332.11
H616h2

0021691000

0021691-000

３３２．１１－Ｈ６１６ｈ２

北海道概況

北海道庁

昭和１１年〔版〕

１９３６

ADC

332.1
H617

昭和十一年

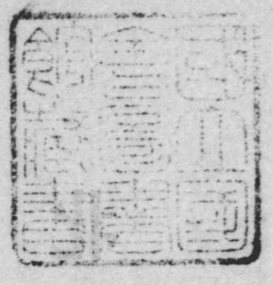
北海道概況

北海道廳

A

北海道概況

28/1
H616h
332.11
H616h2



116280

北海道概況目次

緒言 …… 一
第一章 沿革 …… 五
一 幕府時代 …… 五
二 開拓使及三縣時代 …… 六
三 道廳時代 …… 九
第二章 地勢 …… 一二
一 位置及面積 …… 一二
二 山脈 …… 一二
三 河川 …… 一三
四 湖沼 …… 一四
五 …… 一八

五　港灣……一九
第三章　氣象……一九
一　氣溫……一九
二　氣壓……二一
三　降水量……二一
四　積雪量……二一
五　海霧……二一
第四章　土地……二四
一　土地區分……二四
二　山林……二六
三　農耕適地……二六
四　耕地……二七
五　國有未開地……二九
六　土地制度……二九
第五章　人口……三〇
一　體性と年齡……三一
二　現在密度と可容人口……三二
三　人口動態……三一
四　移民來往住……三二
五　移民世話……三四
六　土人……三四
第六章　交通及通信……三七
一　鐵道……三七
二　道路……四〇
三　驛遞所及渡船場……四一
四　港灣と出入船舶……四二

五 補助航路……七四
六 通信……七六
第七章 産業……七七
一 産業の概況……七七
二 農業……八〇
(一) 概況……八〇
(二) 耕地面積……八二
(三) 農家戸數……八六
(四) 農産物……九〇
(五) 副業……一〇三
(六) 農事指導竝檢查機關及團體……一〇七
(イ) 北海道農事試驗場……一〇七
(ロ) 北海道農産物檢查所……一〇九
(ハ) 農會……一一一

三 畜産業……一一一
(一) 概況……一一一
(二) 飼養頭數……一一三
(三) 畜産生産品……一一六
(四) 畜産業指導竝檢查機關及團體……一一〇
(イ) 北海道廳種畜場……一一〇
(ロ) 北海道廳種羊場……一一〇
(ハ) 畜産組合……一一一
(ニ) 牛酪檢查事業……一一三
四 水産業……一一三
(一) 概況……一一三
(二) 漁船及從業者數……一一六
(三) 漁獲及製造高……一一七
(四) 水産業指導竝檢查機關及團體……一二六
(イ) 北海道水産試驗場……一二六

(ロ) 北海道水產物檢查所……一二七
(ハ) 水產會……一三八
(ニ) 水產組合……一三八
(ホ) 漁業組合……一三九
五 林業……一四一
(一) 概況……一四一
(二) 林野面積及林相……一四一
(三) 林產物……一四三
(四) 林業指導竝檢查機關及團體……一四五
(イ) 北海道林業試驗場……一四五
(ロ) 北海道林產物檢查所……一四五
(ハ) 森林防火組合……一四六
(ニ) 北海道林業會……一四七
六 工業……一四七
(一) 概況……一四七
(二) 工場及職工數……一五三
(三) 各種工業の狀況……一五五
(四) 工業試驗機關……一五八
北海道工業試驗場……一五八
七 鑛業……一六〇
(一) 概況……一六〇
(二) 鑛區……一六一
(三) 鑛產物……一六三
八 北千島竝北洋漁業……一六六
第八章 商業及金融……一七一
一 概況……一七一
二 商業……一七四
(一) 內國取引……一七四
(二) 外國貿易……一七七

三　金融……一八二
(一)　銀行……一八四
(イ)　銀行預金及貸金……一八七
(ロ)　手形交換……一八九
(ハ)　爲替取扱高……一九一
(ニ)　銀行出入金額……一九二
(二)　私營質屋……一九三
(三)　信用組合……一九五
(四)　無盡……一九六
(五)　郵便貯金……一九九
(六)　地方貸付資金……二〇〇
四　物價及賃銀……二〇五
(一)　物價……二〇五
(二)　賃金……二〇八
五　會社……二一〇

六　商工業團體……二一四
(イ)　商工會議所……二一五
(ロ)　商工會……二一五
(ハ)　輸出組合……二一六
(ニ)　工業組合……二一六
(ホ)　商業組合……二一六
(ヘ)　酒造組合……二一七
(ト)　同業組合……二一七
(チ)　準則組合……二一七
第九章　産業組合……二一九
一　産業組合……二一九
(イ)　沿革……二一九
(ロ)　現況……二二三
(ハ)　聯合機關……二三五

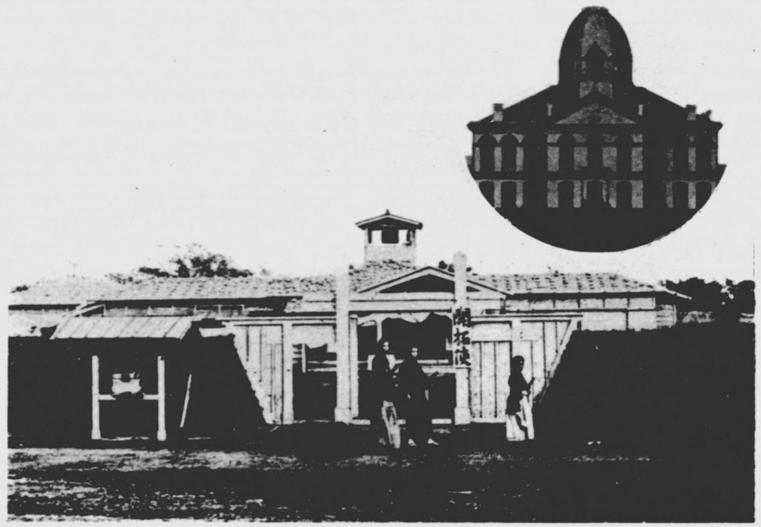
二 農業倉庫……二三九
第十章 土功組合……二四三
一 沿革……二四三
二 現況……二四八
第十一章 行政……二五五
一 行政機關……二五五
(イ) 道廳……二五五
(ロ) 支廳……二五五
(ハ) 特設機關……二五五
二 自治行政……二五六
(イ) 道會……二五六
(ロ) 市町村制……二五六
(ハ) 市町村會議員……二五七
第十二章 財政……二五八
一 國庫歲入出……二六一
(一) 歲入 (イ) 租稅 (ロ) 租稅外收入……二六四
(二) 歲出……二六九
二 地方財政……二七二
(一) 歲入……二七三
(二) 歲出……二七六
三 市町村財政……二七七
四 諸稅負擔額……二八一
第十三章 教育……二八五
一 初等教育……二八六
二 中等教育……二八九
三 師範教育……二八九
四 實業教育……二八九
五 社會教育……二九〇

六 體育……二九三
七 學校衞生……二九四
八 舊土人教育……二九五
九 高等專門教育……二九六
第十四章 神社及宗教……二九七
一 神社……二九七
二 寺院及住職……二九九
三 神道教會說教所……二九九
四 佛道教會說教所……三〇〇
五 基督教會堂講義所……三〇〇
第十五章 社會問題及社會事業……三〇一
一 社會問題……三〇一
(イ) 失業狀況……三〇二
(ロ) 勞働爭議……三〇二
(ハ) 小作爭議……三〇七
二 社會事業……三一〇
(イ) 公私社會事業施設……三一〇
(ロ) 一般救護……三一一
(ハ) 方面事業……三一一
(ニ) 行路病人竝精神病者及其他救護施療……三一三
(ホ) 軍事救護……三一四
(ヘ) 公益質屋……三一四
(ト) 小住宅の建設と住宅組合……三一五
(チ) 職業紹介所……三一六
(リ) 公設市場……三一七
(ヌ) 健康保險……三一八
三 舊土人保護……三一九
(一) 開拓使時代の保護概要……三一九
(二) 三縣時代の保護概要……三二〇

(三) 道廳時代の保護概要……三二二
第十六章 警察及衞生……三二三
一 警察……三二三
(イ) 概況……三二三
(ロ) 犯罪……三二四
(ハ) 火災……三二五
(ニ) 消防……三二六
二 衞生……三二六
(イ) 概況……三二六
(ロ) 傳染病……三二七
(ハ) 疾病死因別……三三八
(ニ) 醫師……三三九
(ホ) 産婆其他……三四一
第十七章 都市計畫……三四二
一 都市の現狀……三四二
二 都市計畫現況……三四四
(一) 札幌市……三四四
(二) 函館市……三四四
(三) 小樽市……三四五
(四) 旭川市……三四九
(五) 室蘭市……三五一
(六) 釧路市……三五三
(七) 帶廣市……三五四
(八) 余市町……三五四
(九) 岩内町……三五五
(一〇) 留萌町……三五五
(二) 野付牛町……三五五
(三) 根室町……三五五
(三) 名寄町……三五五

三　土地區劃整理組合……三五六
四　町村に於ける都市計畫法實施……三五八
第十八章　拓殖事業概要……三五九
一　概　　說……三五九
(一)　第一期拓殖計畫以前……三五九
(二)　第一期拓殖計畫……三六一
(三)　第二期拓殖計畫(現行)……三六七
二　現行拓殖事業施設概要……三八〇
(一)　移民招徠と土地の給與……三八〇
(二)　農耕地開發の助成……三八一
(三)　交通機關の施設と助成……三八二
(四)　港灣事業……三八四
(五)　河川事業……三八五
(六)　國有林の整理竝經營其他……三八六
(七)　泥炭地及濕地竝酸性土壤の改良……三八七
(八)　水田の造成……三八九
(九)　產業に關する施設……三九一
(イ)　農事に關する施設……三九一
(ロ)　水產に關する施設……三九二
(ハ)　畜產に關する施設……三九三
(ニ)　工業に關する試驗及奬勵施設……三九四
(ホ)　販路擴張に關する施設……三九四
附　錄　都邑及名勝地
一　函館市及其の附近……一
二　小樽市及其の附近……四
三　札幌市及其の附近……六
四　旭川市及其の附近……一〇
五　室蘭市及其の附近……一四

六　釧路市及其の附近……一六
七　根室町及其の附近……一六
八　帶廣市及其の附近……二二
九　網走町及其の附近……二四
十　稚內町及其の附近……二五
十一　留萌町及其の附近……二六
十二　浦河町及其の附近……二七



開拓使本廳（明治六年設立）

開拓使廳假廳舍（明治四年四月設立）

現在の北海道廳

明治四年草創の札幌（創成通より西を望む）

明治十四年　明治天皇行幸當時の札幌（南一條東三丁目札幌神社頓宮前より西を望む）

現在の札幌（右方大通遊地・左前方藻岩山）

明治四十年頃の札幌（大通遊地を隔てゝ西南藻岩山を望む）

北海道概況

緒言

本道は面積五千七百五十五方里餘であつて、臺灣、樺太及四國を併せたるものに伯仲し、千島列島を除くも尚東北六縣及新潟縣を併せたるものに匹敵する。海岸線は延長一千三百五十五里で、到る處に魚介海藻が豊富であり、世界有數の漁場を控へて其の名は夙に高く、地勢は概して平濶にして地味は豊沃であり、約二百五十萬町歩の農牧適地を有し、加ふるに千古斧鉞の入らざる森林と各種鑛物の富を藏してゐる。世人或は本道の氣候寒冷なるを恐れるが、之を歐洲各國の緯度に比較すれば優位にあるのみならず、農産物の豊穣と住民の健康とは氣候風土の好適なる事實を證明してゐる。

本道の開發は遠く七百年前に其の曙光を見たが、開拓の功程は特に見るべきものなく、無盡の寶庫は堅く鎖され荊棘徒に蔓る様な狀態であつた。然るに王政維新の宏謨に依つて明治二年開拓使の設置を見るに至り、本道開拓の基礎茲に創めて樹立され、爾來七十

年其の開拓の進捗は寔に顯著なるものがあり、殊に歐洲戰亂の影響は本道にも絶大の好況を齎して各種産業界に記錄を遺し、新企業の興隆其の他諸般の事象に一大變革を來し、更に我邦の人口食糧問題の提唱と共に朝野齊しく本道の拓地殖民の有望なるを注視するに至つた。

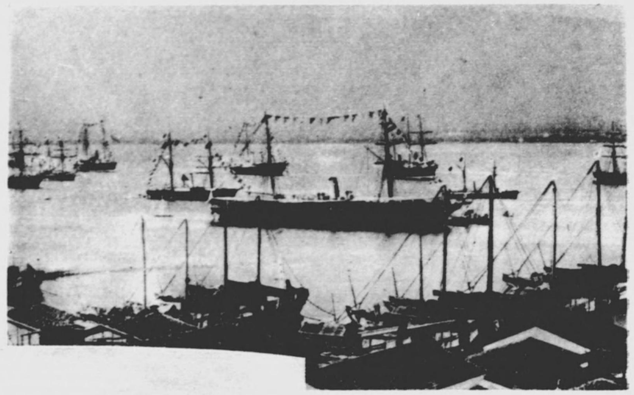
輓近全世界に亙る經濟界の行詰りに因つて一般産業界の梗塞となり、加之昭和六、七兩年に於ける稀有の凶作竝水害の災厄に見舞はれ、且昭和九、十兩年に於ても亦道內の大半に亙り凶作を見るに至つた爲、農村は固より漁村方面に於ても其の窮乏を訴ふるもの鮮くはないが、一面對外爲替關係の有利なるに乘じて本道特産品海外進出の狀況頗る顯著なるものがあり、又國內市場に於ても金、石炭、木材、乳製品、雜穀及水産物等が盛に躍進しつゝあるは洵に力强いことであつて、本道拓殖の前途に大なる光明を與ふるものと云ふべきである。併かも本道の人口は昭和十年國勢調査の結果に依れば三百六萬八千人に達するに至つたが、其の密度は今尙內地府縣中最も疎なる岩手縣の約半數に過ぎない狀態であるから、海陸共各種資源の豐富にして開發の餘地頗る大なるものあると相俟つて前途益々多望なりと言はなければならない。

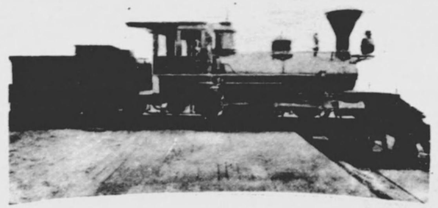
以下叙述する所は其の概要を示すに過ぎないが、最近に於ける本道各般事績の變遷消長を窺知する事が出來よう。

北海道統計摘要

年次	人口 指數	移民 指數	耕地 指數	鐵道 指數	生産總價額	生産 指數	移輸出入總價額	移輸出入 指數
昭和九年	二、八九七、五〇二 人	三五、〇九三 人	二、一三八	三、二八一 粁	四四、七一六、〇一六 円	一六、六三一	三二、九三三	
昭和八年	二、八五九、五〇一	四八、四三四	一、八七九	三、一〇三	四九、九六四、九六九	一五、二六五	七八、二六二	一九、九八二
昭和七年	二、八〇五、八三三	四九、九三三	一、九四六	三、〇〇六	三五〇、〇九三、〇七九	一〇、〇七八	六〇一、五三九、六八五	一五、三五三
昭和六年	二、七四六、〇四三	三五、六五〇	二、一五八	三、二六六	三二、三五一、七〇七	九、八一七	三二、八〇八、九七五	一三、四八九
昭和五年	二、八一二、三三五	六〇、一二六	二、三三三	三、〇一四	四四〇、九一六、七三一	一三、四六三	六六〇、三四六、一三三	一七、三六四
昭和四年	二、三五三、三〇六	五八、四七一	二、二六九	三、〇一四	五六八、一二三、八〇七	一六、七三五	八八、六八六	二一、八三六
昭和三年	二、三〇六、八三三	五七、八九二	二、〇九三	三、〇一四	五六一、三五七、一三五	一六、〇四三	八九四、七四四、八八二	二二、〇〇八
昭和二年	二、四七一、三二一	五七、八五〇	二、一八五	三、〇一四	五四一、八四〇、九四四	一六、五四八	八〇七、七四一、八八二	二二、一四八
昭和元年	二、四三七、一一〇	五六、三一二	二、一五八	三、〇一四	五四〇、一三三、九六五	一七、一〇三	八六六、三三七、六七二	二一、五九九
大正十四年	二、四〇九、六七九	六〇、一〇四	二、三三三	三、〇一四	五六〇、一三三、九六五	一七、一三六	七九八、一四〇、九九九	二一、二四〇
大正十三年	二、四三一、〇八二	五六、三一五	二、一八五	三、〇一四	五八八、四七七、〇三二	一八、一三六	七九八、八一二	二一、七四三
大正十二年	二、四〇一、〇五六	五八、一〇三	二、二五八	三、〇一四	四八四、七七九、九七四	一四、七八九	八二六、四四七	二一、六六三
大正十一年	二、三七四、六九九	六〇、四一二	二、二四八	三、〇一四	四三五、七八一、四八四	一三、一四四	八四八、〇三三	二一、九九八
大正十年	二、三四一、一〇〇	六七、九七四	二、一五〇	三、〇一四	四三五、一〇一、一五〇	一三、八五七	八五四、五七七	二二、〇六〇
大正九年	二、三五九、一三三	八〇、三五六	二、一三四	三、〇一四	五〇〇、五九四、六三一	一三、二六四	八三九、〇五〇	二二、一八一
大正八年	二、二四五、五〇六	九一、四六五	二、一七五	一、九〇九	六二一、七二五、九八六	一八、九二三	八一六、一二九	二二、五二七

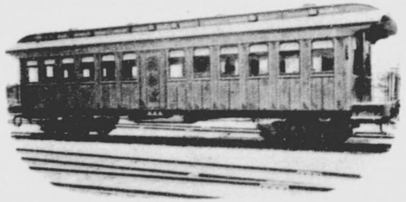
明治九年七月十六日　明治天皇函館御巡幸當時の御召艦





明治十四年八月三十日
明治天皇　の御召列車
（小樽札幌間）を牽引せ
る機關車義經號

明治天皇行在所札幌豐平館
（明治十四年八月）



當時の御召列車

年次	人口	指數	移民	指數	耕地	指數	鐵道	指數	生産總價額	指數	移輸出入總價額	指數
大正七年	二、一六七、三五六人	一、一三三	八三、九二五人	三、二五七	七九五、一九二町	一一、二二二	一、六三三粁	一、八一〇	四五六、八四一、一八四円	一三、九四八	五一五、四三五、七二四円	一三、一五五
明治四十年	一、三九〇、〇七九	七二七	七九、七三七	三、〇九四	四二三、四一四	五、九七五	一、〇三六	一、一五〇	七〇、六一一、四四一	二、一五五	一四五、三二九、一一〇	三、七〇九
明治三十年	七八六、二一一	四一一	六四、三五〇	二、四九七	一四二、七〇六	二、〇一三	三三三	三六九	二九、九〇七、五一一	九一三	八二、〇五一、九四八	二、〇九四
明治二十年	三二一、一一八	一六七	九、〇三八	三五〇	三一、三五一	四四二	九〇	一〇〇	七、〇二六、八八九	二一四	一二、九三二、九三三	三三〇
明治十年	一九一、一七二	一〇〇	二、五七七	一〇〇	七、〇八六	一〇〇	—	—	三、二七五、二四五	一〇〇	三、九一八、一四五	一〇〇

第一章　沿革

(一) 幕府時代　北海道は往時蝦夷地と稱しアイヌ人の居住したる地であつて、和人移住の嚆矢は詳かでないが、想ふに奥羽北陸地方の商賈漁夫にして險を冒し利を射る者、若くは敗戰して隱遁せる者が渡島地方に移住したるに初まるものなるべく、康正二年蝦夷叛亂の時和人は多く渡島地方に住し、僅に余市及鵡川地方に出稼せる者あるのみて極めて寂寥たる狀態であつた。

此の時松前氏の祖武田氏蝦夷を破つたが、爾來數十年屢々騷亂があり、天文十二年蝦夷と和するに至つて松前氏の聲威漸く蝦夷地に及ぶに至つた。而して其の制權は東は龜田、西は熊石に限り其の內を和人居住の地として其の外を蝦夷地とした。明和、安永の頃に至り露人南下の警報來れる爲、德川幕府は幕吏を派遣して其の實況を調査せしめ、寬政十一年遂に松前藩に一任せる統治を以て之を幕府の直轄に歸し、函館奉行を置きて國防及開拓の目的を以て之が經營の大本を定め鋭意其の成功に努めた。後更に西蝦夷地を治め、始めて全蝦夷地を直轄し、函館奉行を改めて松前奉行としたが、偶々露人が擇捉、

樺太及利尻に來寇するに及んで幕府は再び全地を松前藩に還與し之が支配に當らしめた。嘉永六年露艦長崎に入港して交易を迫り、米國水師提督ペルリ亦浦賀に來航して翌年下田條約を締結し、函館開港の事定まるや幕府再び函館奉行を置き、安政二年に福山地方を除き東西蝦夷地及諸島を治めて復幕府の直轄に移し、奥羽諸侯及松前藩に命じて本道を警備せしめた。

(二) 開拓使及三縣時代　明治維新の宏謨成り蝦夷開拓の廟議決するや、二年六月四日議定鍋島直正を蝦夷開拓督務に任じ、畏くも　明治天皇は左の優渥なる勅書を賜つた。

詔

蝦夷開拓ハ　皇威隆替ノ關スル所一日モ忽ニス可ラス汝直正深ク國家ノ重ヲ荷ヒ身ヲ以テ之ニ任センコトヲ請フ其憂國濟民ノ至情　朕嘉納ニ堪ヘス獨恐ル汝高年遽ニ殊方ニ赴クコトヲ　然レトモ　朕之ヲ汝ニ委ス　始テ北顧ノ憂ナカラン　仍テ督務ヲ命ス他日　皇威ヲ北疆ニ宣ル汝方寸ノ間ニアルノミ汝直正懋哉

愈々明治二年七月に至り開拓使を置き、蝦夷地を改めて北海道と稱し十一國八十六郡に分ち、開拓使長官東久世通禧函館に於て開拓の事務を總理し、札幌、根室及宗谷に出張所を置き判官を派遣し、更に省府藩士族寺院の支配地を設けた。當時（二年八月二十五日）東久世長官に賜つた御沙汰書は左の通りである。

北海道開拓ハ　皇威隆替ノ所係方今至重ノ急務ニ候　今般彼地へ出張數百里外殊方ノ寒疆ニ其事務ヲ管督候事不容易艱難一入苦勞　思食候　就テハ向後土地墾闢人民蕃殖北門ノ鎖鑰嚴ニ樹立シ　皇威御更張ノ基ト可相成樣勉勵盡力可有之旨御沙汰候事

次で四年に至り開拓使廳を札幌に置き、茲に於て札幌は始めて全道行政の中心地となつた。又同年六月次官黒田清隆米人ケプロンを雇聘して歸朝し、廣く内外の情勢を參酌して本道開拓の方針を定め、省府藩士族寺院の支配を罷めて全道を開拓使の所轄に歸し、明治五年以降十五箇年間に總額金一千萬圓と外に本道の租稅其の他の收入を擧げて開拓の經費に充つる計畫を樹てた。然るに創業の際とて施設すべき事業多くして歳額足らざるを以て、更に兌換證券二百五十萬圓を發行し、且大藏省より金百五十萬圓を借入れて海陸運輸の改良、各種工場の新設、產業の發達及移民の保護を計り、函館札幌間の道路を開鑿し、室蘭の港灣を修築し又大いに札幌の經營を行つた。而して其の施設は概ね米國に則り規模廣大頗る觀るべきものあつたが、事業と實效と相伴はざるの狀あり、茲に

於て明治七年大いに緊縮の方針を採り、興産の方法を講ずると共に民力の涵養に努め産業を奬勵し漁業其他産業の發達を圖り、明治十一年起業公債約五十萬圓の下付を得て幌内炭山の開掘に著手し、同十三年小樽を基點として鐵道を敷設し、其他學校の創始、屯田の設置及貿易の擴張等施設する所尠くはなかつた。

之より曩明治九年七月、明治天皇東北御巡幸の砌、鳳駕を函館より七重まで進めさせ給ひ、茲に孜々として北疆の開拓に勵み來れる官民は齊しく皇恩の無窮なるに感激した、更に明治十四年八月三十日再度　龍駕を本道に迎へ奉つたのであるが、明治天皇は小樽、札幌、千歳、白老、室蘭、森、七重、函館の各地を九日間に亙つて御巡幸遊ばされ、具さに開拓の狀況竝風土民情を叡はせられたので人民愈々聖恩の忝けなさに感泣し、普天率土惟れ王土たるの信念を確保するに至つた。

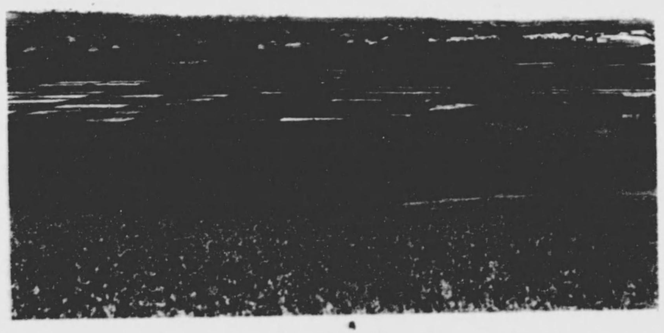
明治十五年に至り開拓使を廢し、新に函館、札幌及根室の三縣を置きて一般行政を司らしめ、殖民竝山林等主として拓殖を目的とする事務は總て之を農商務省及工務省に移し、翌年更に農商務省中に北海道事業管理局を置きて之を統一管理せしめた。然るに其の主管する拓殖事務は開拓使の舊套を踏襲せるに過ぎず、加之三縣一局に分れたるが爲各部の統一連絡を缺きて往々にして事務の澁滯するを免れなかつた。

(三)　道廳時代　明治十九年三縣一局を廢して北海道廳を置き、本道の事業を擧げて之に屬せしめ、努めて行政事務の簡捷を圖り行政費を節約して事業費を增加し、專ら力を拓地興産に竭すの方針を採り、移民の直接保護を廢して間接助長の政策を主とし、道路の開鑿、地形の測量、殖民地の選定、水產及鑛床の調査、水產稅の輕減、出港稅の廢止及官貸金の整理等を斷行し、又官營諸工場を拂下げ或は有望なる新設事業の補助及上川原野の開發等を計畫し、而して炭礦鐵道の建設を補助する等能く時運の趨勢に適應して着々拓殖事業の發展を企圖した。同三十年道廳官制を改正して郡役所を廢し支廳を置き、同三十二年函館、小樽及札幌に區制を施行し、翌年大野村外十五箇町村に一級町村制を實施し、又翌三十四年に至り道會法及北海道地方費法竝二級町村制を施行し、又此の歲始めて本道より衆議院議員を選出した。同年所謂北海道十年計畫成り國費と地方費とを分割して駢行奬進の策を定め、十箇年間に國費三千百五十萬圓を支出するの計畫を樹てたが、幾何も無く日露戰役の影響を受け經費節減の結果豫定の成績を擧ぐるを得なかつた爲、四十三年所謂第一期拓殖計畫を樹立し、每年確定支出額として二百五十萬圓及本

道に於ける政府の歳入增加額を支出し、一箇年度の支出額は五百萬圓を超過せざること
とし、十五箇年を期して七千萬圓を國庫より支出し專ら拓殖事業の完成を期せんとした。
而して大正十一年札幌外五區に市制實施せられ、翌十二年戸長役場廢止され、後昭和二
年一、二級町村制が改正されて本道の自治愈々其の擴張を見るに至り時勢の進運に伴ふ
樣になつた。又昭和三年に於て普通選擧法に依る第一回衆議院議員選擧及道會議員の選
擧を見るに至つた。
更に從來の本道拓殖の業績より見て將來幾多の施設經營に俟つべきものあるを以て、昭
和二年より二十年間第二期拓殖計畫を樹てゝ毎年度本道に於ける政府の歳入歳出の剩餘
金を以て之が財源に充當し、總經費九億六千萬圓の豫定を以て拓殖事業完成を期せんと
し目下之が道程にある。而して明治二年始めて開拓使を設置せられてより玆に六十有八
年、今や人口二百八十九萬七千、生產總額五億四千四百七十餘萬圓を算するに至つたが、
拓殖の前途は尙甚だ遼遠にして將來發展の餘地極めて多大なるものあるのみならず、本
道開發は寧ろ今後道民の努力に俟つべき狀態である。

大沼と駒ヶ岳の遠望

十勝岳連峯



石狩平野の一部

第二章　地　勢

(一)　位置及面積　本道は我國の北部に在つて樺太島の南に位し、南は津輕海峽を隔てゝ本州と相對し其の最短距離僅かに十海里、北は宗谷海峽を挾み相距ること二十四海里にして樺太島と相對し、北西遙かに海を隔てゝ露領シベリヤと相呼應し、西は渡島國大島西端東經百三十九度二十分を以て極西とし、極南は渡島國小島南端北緯四十一度二十一分、東は占守島東端東經百五十六度三十五分にしてカムチヤツカ半島に接近し、而して極北は千島國アライト島の北端北緯五十度五十七分、之を以て北海道即日本の最東端及最北端とし、國防及漁業上重要なる國際接觸線を爲して居る。且西は日本海に面し北はオホツク海に臨み、東南二方は太平洋に瀕し正に大鵬の雙翼を張るが如く其の圈圍は三大海洋に跨るものである。

而して本道は本島及大小三十有餘の島嶼より成り、其の面積は五千七百五十五方里餘にして總面積に於ては臺灣、樺太及四國を併せたるものに近似し、尙千島を除くも東北六縣及新潟縣を合したるものに匹敵してゐる。

(二) **山脈**　本道胴體部に於ける山脈は丁字形を爲し、之を形成するものは日高山脈、北見山脈及千島火山脈であつて、其の交叉點たる中央部に於て相會して最も高峻を極め、所謂大雪山彙及石狩岳其他一環となり雄壯秀麗なる景勝地を形成し、石狩川、十勝川及天鹽川を始め常呂川、網走川等幾多大小河川の源を爲してゐる。

即ち大雪山彙は旭岳を盟主として比布岳、凌雲岳、北海岳、白雲岳、黒岳等十指を屈する秀峰高岳巍然として櫛比聳立し、雲海漂渺として遙かに十勝岳、トムラウシ岳及石狩岳と呼應對峙し、深峽碧淵其の岳麓を繞り莊嚴と神祕を極めてゐる。

日高山脈は摺曲山脈であつて襟裳岬より十勝岳に向つて北に走り、南北に連亙して峻峰嶮岳多く、就中幌尻岳最も高く、戸蔦別岳、札内岳、神威岳及芽室岳等何れも二千米内外の高度を競ふてゐる。而して此の山脈は襟裳岬を南端として大分水嶺を爲し太平洋に突出し、石狩川及十勝川支流其の他數多中小河川等此の山脈より發し、西南及東南二方に向ひ太平洋に流入し短流多く、日高方面の流域は狹小であるが十勝方面は大平野を展開してゐる。

千島火山脈は知床半島より十勝岳に向つて走り、火山、湖沼及高原地帶等頗る變化に富む山脈を形成し、數多景勝大觀の地域を展開してゐる。就中阿寒國立公園地帶は其の代表的なものであつて、雄阿寒岳、雌阿寒岳、藻琴山、跡佐登山及斜里岳等は此の間に介在する阿寒湖、屈斜路湖及摩周湖と共に太古の面影を殘し神祕的景觀を恣にしてゐる。此の外、知床半島には羅臼岳及別海岳等其の狹小地帶に連亙しオホツク海に突入してゐる。而して此の山脈の東南方に廣大なる釧路及根室原野、北部には北見平野展開し將來の開發に俟つべきもの頗る多い。

北見山脈は中央部石狩岳より西北に向ひ天鹽及北見の國境を走り宗谷岬に達するものであつて、概して高山少く中央部に武華山、武利岳、屏風岳及天鹽岳等大雪山に相對峙し、何れも千七、八百米の標高を示し北に向ふに從ひ漸次山勢を減じ千米以下となつてゐる。

以上三大山脈の外に日高及北見兩山脈と竝行縱走する夕張山脈及天鹽山脈あり、其の間に名寄盆地、上川盆地及富良野盆地等本道有數の沃野が相竝んでゐる。而して增毛山塊は石狩平野の北部に位し日本海岸に聳立し其の最高點は約千五百米に過ぎない。又中西部には後志山塊あり、札幌より長萬部に至る間に重疊し、著名なる溫泉、湖沼及峽谷等景勝地多く、春夏秋冬遊覽及登山の好適地となつてゐる。此の山脈に屬する諸山は多く火

山岩より成り、現に火煙を吐きつゝある樽前山、有珠岳及死火山たる羊蹄山等最も著名である。羊蹄山は海拔約千九百米あり、美麗なる圓錐狀を呈するを以て蝦夷富士の稱あり、其他ニセコアンヌプリ、手稻山、札幌岳、惠庭岳及無意根山等高山とは稱し得ないが、北方に於ける最高文化都市近郊の名勝地として著名である。而して石狩大平野は夕張山脈、增毛山塊及後志山塊の間に擴り、北西は日本海、南方は遠く太平洋に向つて展開し本道の富源を藏してゐる。尙後志山塊に續ける山脈は漸次狹長なる半島部に連亙し脊梁狀を爲し、概して高山少く著名なる山も亦少いが、近年爆發せる活火山駒ケ岳は噴火灣頭に聳立し、大沼の勝地を控え渡道初印象の讃嘆を恣にしてゐる。

(三) 河川 河川の主なるものは石狩川、天鹽川及十勝川等であつて本道の三大河川と稱し他の二三長流と共に其の源を本道中央部の山地に發してゐることは既述の如くである。石狩川は長さ約九十三里にして本道第一の大河であり、本邦一二を競ふ長流であつて其の源を石狩岳に發し石狩平野を蛇行貫流し日本海に注ぎ、其の下流五十里餘は小蒸汽船を通じ、多少の補修を加ふれば河口より數里の間は千噸級汽船の航行も難事ではないと稱せられ、運輸の便頗る多く且秋季より冬季にかけて夥しき鮭の溯上するは餘りに有名

である。又本河川は其の流域に千里の沃野を潤ほしてゐるが、流身變轉蛇行曲折甚しく度々大氾濫の災害を附近農耕地に蒙らし無數の三日月沼を作つてゐる。然し乍ら三千萬圓の巨費を投じ施行し來りたる治水事業頗る進捗し、江別町より河口迄約十二里十八町に對し昭和九年八月切替掘鑿事業完成し直流六里二十一町に短縮し、尙上流部に對しても目下工事中であるから、將來水害の除却は固より耕地開發に資するところ甚大なるを期待される。而して其の支流の主なるものは雨龍川、空知川、江別川及豊平川であつて、雨龍川は天鹽山脈の北部に發し、其の石狩川に合流する地方最も肥沃である。又空知川は富良野盆地を貫流し、江別川は千歲川及夕張川を合流し、廣濶なる流域一帶地味肥腹なる大平野を爲してゐる。之等の本支流を合するときは其の流域面積千五百二十四方里餘に達し、稻田麥圃相連り本道第一の農業地帶である。

天鹽川は其の源流を天鹽岳に發し、鹽狩國境以北の平原を北流して日本海に注ぎ、其の延長七十七里餘、流域面積四百三十方里に及び、沿岸の原野は中流以上は肥沃にして能く開發せるも、下流地域は概ね寒冷卑濕にして開拓の業遲々たる觀がある。而して本道河川の大部分が原始河川にして流路の變轉極りなく、附近耕地の開發に連れ

益々洪水氾濫の被害大なるものあるに鑑み、小にしては護岸及改修工事、大にしては切替掘鑿等の治水工事を施行しつゝあるが、天鹽川に對しても被害最も大なる名寄盆地の一部に於て實施中である。

十勝川は其の源流を十勝岳に發し、千島火山脈の南側と日高山脈の東側の水を集め、扇形の大小無數の支流を有し延長五十里、流域九百方里に及び、石狩平野に次いで廣大なる十勝平野を貫流する本道第三の大河であつて南流して太平洋に注ぐ。支流然別川の水源然別湖は神祕幽邃の祕境として稱へられ國立公園大雪山地帶の一部を占めてゐる。本流の日高山脈と平行南流するあたり狩勝峠より眺めらるゝ十勝大平野の展望は、古くより中央に名高き本道獨特の壯觀であつて農業富源の狀況を一眸の中に收めることが出來る。而して本河川も亦目下治水工事實施中に屬し、北見釧路國境に發する支流利別川と本流との合流點附近の豐沃なる耕地の被害を防止せんとするものであつて益々將來の開發を期待されるものである。

釧路川は源を屈斜路湖に發し、數多支流を合せ延長三十四里餘にして釧路港に注ぐものである。此の流域面積百六十二方里に達し、其の四十五パーセントは農耕適地であるが、尚未開地多く目下施行中の治水事業完成に到らば下流部水害の除却と共に開發さるゝに至るであらう。

常呂川は本道東海岸中隨一の大河であつて延長三十七里餘、東北流してオホツク海に注ぐ。其の流域面積百三十二方里に及び、之に平行せる網走川流域と共に北見原野の大部分を占め石狩及十勝平野に次ぐ沃野である。

其他日本海に注ぐ河川中には利別川、後志川（尻別川）、余市川、留萌川、小平蘂川、羽幌川及遠別川等あり、就中後志川流路延長最も長く三十六里餘從つて其の流域も良く開け利別川之に次ぐものである。

オホツク海に注ぐものには前述せる二河川の外、湧別川、渚滑川及斜里川等あり、而して太平洋に流入するものは前述二河川を除き鵡川及沙流川が主なるもので、根室灣に注ぐものは西別川、標津川及風蓮川等であつて何れも其の流域は肥沃なる平野である。

而して何れの河川も魚族饒多であり、秋冬季間に鮭の溯上する數も亦夥しき數に上るものであつて、往時アイヌ人の山に羆熊を逐ひ川に鮭を漁りて原始的生活を爲せる樣そゞろに思はれ、且今にして尚其の餘澤の洽ねきは吾人の喜びてあり誇りである。

(四) 湖沼　本道には湖沼頗る多く其の著名なるものゝみにても二十有餘を數へ、從つて其の成因等も複雜であり種々學術的資料を提供してゐる。卽ち大別して之を略述すれば、海岸湖としては北見の猿澗湖、根室の風蓮湖及溫根塘湖、釧路の厚岸湖及春採湖等が其の代表的なもので東北部に多く、大體に於て本道の海岸隆起と一部沈降の傾向を示すものである。而して海岸隆起と共に砂洲が河口を堰き止め湖沼となれるものは弓形に張りつめた北見、天鹽及十勝海岸に多く、濤沸沼、湧洞沼及天鹽川下流の湖沼等であり又苫小牧附近にても散見される。

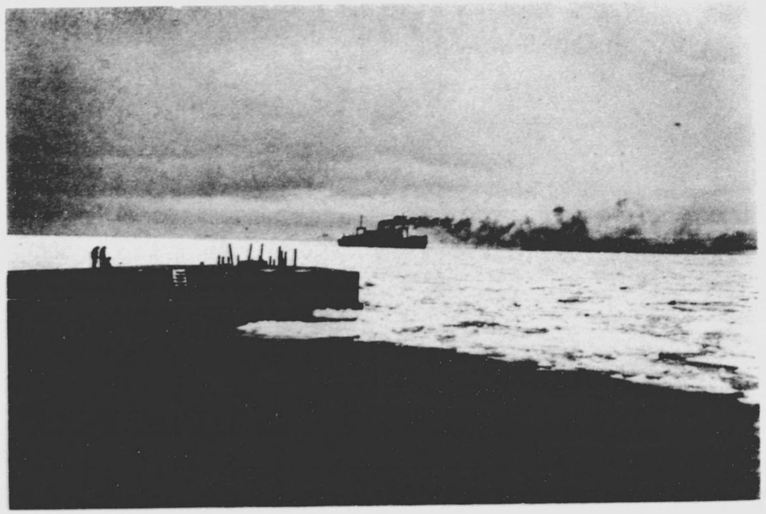
內陸平原に存在する湖沼は概ね石狩川、十勝川及天鹽川等大河川の流身變轉極りなき蛇行により瀦溜して生成せるもの頗る多いが著名なるものはない。

而して本道の山地に存在する湖沼の主なるものは皆火山湖であつて、千島火山脈中には屈斜路湖、摩周湖、阿寒湖及然別湖、後志火山彙には支笏湖及洞爺湖があり、又大沼、小沼及蓴菜沼も亦火山湖の一種である。而して千島には火山湖が多い。

如上の湖沼には景勝地として著名なるもの多く、就中摩周湖、屈斜路湖、阿寒湖及然別湖等は國立公園中に在り、原始的なる四圍の山河を背景として變化の至妙、構圖の雄大而して萬古不易の森嚴味を以て聞え、摩周湖の如きは流出入の一河川もなく千古淸澄の水を湛え居るを以て最も有名である。支笏湖、洞爺湖及大沼は其の眺望廣濶、名山高岳を背景とし且附近大都市の逍遙地として最も親しまれてゐる。而して最大なる湖は猿澗湖であつて周圍二十三里を超え、最深なるものは支笏湖の千二百尺、之に次ぐは摩周湖の約七百尺である。屈斜路湖は周圍十二里餘、洞爺湖は九里餘である。其他海岸湖にして周圍延長の大なるものは風蓮湖、能取湖及網走湖等であるが成因の關係上一般に深度は低い。尙本道の湖沼は豊富に魚族棲息し養殖も亦漸次隆盛に赴きつゝある。

(五) 港灣　本道の海岸線は總延長一千三百五十五里、千島列島の海岸線約六百三十里を控除するも尙七百四十二里に達する。地理的に之を觀れば長大なる弧狀線を描く海岸多く概して灣入屈曲少く、且冬季結氷、風浪强烈、砂洲流出等に阻害せられ天然の良港に乏しいが、函館、小樽及室蘭は古くより知られたる良港である。然るに拓殖計畫に依り自然的條件と內陸及海上の產業地理的關係とを稽査し、釧路、網走、根室、稚內及留萌の商港を修築し、現在函館、小樽、室蘭、釧路、根室及最近設定されたる新興商港留萌を加へ本道の六貿易港とする。

蘭島海水浴場（小樽市郊外）



稚内港の流氷

右の外拓殖計畫に依り築設されたる漁港は太平洋岸に於て浦河及廣尾の二港、日本海沿岸に於ては岩内、江差、沓形、余市及天賣の五港、オホツク海方面に於ては紋別の一港であつて沖取漁業に資するところ尠くない。

而して沿岸漁業に對しては之等大小商漁港の補助施設として六十有餘の小漁港及船入澗の築設を爲しつゝあるを以て、本道海岸の自然的缺陷は拓殖計畫の進捗と共に漸次補はれつゝあり、內陸產業及沿海漁業の發展助成に貢獻するもの多大である。

第三章　氣　象

本道は我國の最北部に位し、樺太を除きては我國の最寒冷地帶に屬するも、緯度より見れば先進中歐諸國と殆ど同位に在り、世人の多くが想像するが如き住み難い處ではなく、本邦に於ける北方文化開發上有力なる素因を爲すもの尠しとしない。兎も角本道の氣候は、前章既述の如く面積廣大であり、且四面の海岸は暖流及寒流に洗はれ又內陸の地形に複雜なる關係を有する爲、其の位置によつて氣候上甚しく差異があり、從つて產業文化及交通に影響する所甚だ多きを見る。然るに此の自然の妙機を捉へ適切なる人力施設を加ふれば樂土と化するも至難ではなく、徐々に其の自然の征服と活用を見つゝあるものので、凶作と寒冷は本道の代名詞ではないのである。

冬期は白雪地を覆ひ朔風肌に徹することもあるが、春は春風駘蕩として櫻花開き、夏は溫度高くして楡樹翠を滴らし、秋は稻田黃熟して殆んど本州の東北部と異なる所がなく四季折々の興趣も亦深いのである。

(一)　氣溫

本道近海の海流は寒暖の二種があつて、暖流は對馬海峽を經て西海岸に沿ふ

て北に進み、宗谷海峽を過ぎて北見の海岸を洗ひ國後島附近に至り、又支流は分れて津輕海峽に入り東流して寒流に合してゐる。寒流は北東方より千島の東岸を洗ひ本道の東岸に沿ひて南西に流るゝ千島海流と、樺太の東方を南下し宗谷海峽に至りて二分し、一は暖流と接觸相混じて東方に赴き、更に進んで千島西岸を北上し、一は海底流となつて南進する樺太海流とがある。故に本道西海岸地方は對島海流の影響を受けて比較的溫暖なるも、東海岸地方は北方より來る所の寒流其の岸を洗ふを以て比較的低溫である。又海岸は總べて海上氣象の影響を受け四季及晝夜氣溫の變化は比較的少いが、內部は大陸的氣象の影響により氣溫の變化著しく、上川及十勝地方の如きは夏季本道の最高氣溫を顯はすと共に冬季本道の最低氣溫を示してゐる。而して一箇年中の平均を見るに札幌は略々本道の中位に在るが、今札幌の氣溫を諸外國の夫れに比較するに札幌の年平均は六度九分なるを以て、浦鹽斯德の五度四分、哈爾賓の四度三分、レニングラードの四度二分及ストツクホルムの五度八分に比し遙に溫暖にして、ロンドンの九度七分、ベルリンの九度一分に比し稍々寒冷であるが、コペンハーゲンの八度一分、ベルンの七度九分ベルゲンの七度一分に比較して大差はない。之を見ても本道の氣候は概して北方文化の進展を阻害するものではなく、寧ろ自然順應の極致に於て人文の發達すべきは先進諸外國の實例に鑑みるも疑ふ餘地はない。更に之を適地適營に依る農作物の豐穰と住民の健康なる事實を併せ考ふる時、其の氣候風土の適應性を馴致するに至らば文化促進及產業助長に對し何等障害となるべきものを認めざるに至るであらう。今本道各測候所の氣溫累年平均を示せば左の如くである。

最高及最低氣溫月別累年平均

測候所	區分	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年平均氣溫
函館	最高	(一)〇・四度	(一)〇・一	一・四度	四・四度	一〇・八度	一四・九度	一八・五度	二二・六度	二五・二度	二三・二度	一六・七度	九・九度	三・一度	八・五
	最低	(一)七・三	(一)〇・八	(一)六・七	(一)二・六	(一)一・七	(一)五・八	(一)一〇・六	(一)一五・九	(一)一八・七	(一)一三・二	(一)六・六	(一)一・七	(一)四・三	序
壽都	〃	(一)五・九	(一)〇・八	(一)二・二	(一)二・八	(一)一・七	(一)五・八	(一)九・二	(一)一五・八	(一)一八・二	(一)一四・二	(一)九・二	(一)一・五	(一)三・九	八・〇
室蘭	〃	(一)五・六	(一)〇・一	(一)二・六	(一)三・一	(一)一・六	(一)五・八	(一)一〇・二	(一)一五・八	(一)一八・七	(一)一四・三	(一)九・九	(一)二・六	(一)三・九	八・三
札幌	〃	(一)一二・七	(一)一〇・七	(一)六・七	(一)二・六	(一)一・六	(一)五・二	(一)九・八	(一)一四・七	(一)一八・二	(一)一六・二	(一)一一・七	(一)四・〇	(一)〇・九	六・九
羽幌	〃	(一)二・九	(一)一・九	一・六	六・三	一〇・二	一四・八	一七・四	二一・二	二四・三	二一・九	一四・八	七・四	一・五	五・八
旭川	〃	(一)一六・三	(一)一〇・七	一・六	九・一	一六・一	一九・九	二三・二	二六・六	二六・二	二二・三	一五・六	八・二	(一)一・五	四・九
浦河	〃	(一)七・五	(一)三・二	三・二	八・〇	一二・一	一六・八	一九・九	二三・一	二三・一	一九・三	一三・一	七・一	(一)〇・九	六・七
廣帶	〃	(一)一九・五	(一)一三・七	(一)一・一	三・二	七・一	一一・二	一四・六	一八・〇	一七・七	一四・〇	八・〇	二・一	(一)三・〇	五・〇

測候所	區分	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年平均氣温
釧路	最高	(一)一・七度	(一)一二・三	(一)二・一	(一)六・九	一〇・八	一四・三	一八・九	二一・四	一四・四	一一・四	(一)八・四	(一)一・六	五・二度
根室	〃	(一)一・二	(一)二・六	(一)七・一	(一)一〇・七	一三・〇	一七・七	二一・五	二三・四	一八・二	一四・四	(一)一・四	(一)五・一	五・五
網走	〃	(一)一・七	(一)七・一	(一)一〇・七	(一)一四・四	一七・一	二一・五	二四・四	二五・一	二〇・五	一五・五	(一)七・〇	(一)一・六	五・五
紗那	〃	(一)一・七	(一)二・六	(一)六・四	(一)一〇・七	一四・〇	一八・四	二一・四	二二・一	一八・一	一四・一	(一)七・〇	(一)一・六	五・五
釧路	最低	(一)一二・三	(一)一二・三	(一)八・八	(一)二・一	三・〇	七・六	一一・六	一三・九	一〇・一	六・七	〇・五	(一)六・九	二・一
根室	〃	(一)一二・五	(一)一二・八	(一)九・八	(一)二・三	二・九	六・四	一〇・一	一二・七	九・六	五・〇	〇・五	(一)八・一	一・〇
網走	〃	(一)一〇・八	(一)一一・一	(一)六・四	(一)〇・七	四・〇	八・六	一二・五	一四・〇	一一・〇	七・一	一・四	(一)五・一	三・四
紗那	〃	(一)一二・七	(一)一三・七	(一)七・六	(一)一・七	三・七	八・六	一二・五	一四・〇	一一・〇	七・一	一・四	(一)五・一	三・四

備考　一、本表は昭和五年迄の累年平均である。
　　二、本表は攝氏の度であつて(一)は零度以下を示す。

(二) 氣壓

本道の氣壓は四季相異なり、夏季は概して南東方海上に高く、從つて風は南東若くは南に偏し、冬季は主として西比利亞方面に高く北西の季節風が卓越し、又年平均より見るときは北東部に低い爲西又は南西の風が多い。然るに細部に亙つて觀察するときは地勢、位置及海流等事情の異なるに依つて風向も一定しない。

尙累年の風速に付いて見るに、壽都の六・六米を第一とし、紗那の六・二米之に次ぎ、帶廣の二・一米、旭川の一・七米を最小とする。故に暴風の如きも壽都最も多く一箇年平均二〇三・九日にして、內九・三日の颶風を見、之に次いでは紗那の一六八・九日にして颶風の日數一・四日あり、旭川の五・二日、網走の二・四日は最も少い。

旭川及帶廣の風速の弱いの前者は上川盆地、後者は十勝平野に在つて、四圍山脈を續らし海岸に比較的遠いからである。次に本道累年の氣壓及風速を示せば左の如くである。

累年氣壓及風速摘要表

測候所	一月 氣壓	一月 最多風向	八月 氣壓	八月 最多風向	年 氣壓	年 最多風向	風速	暴風日數
函館	七五一・一 粍	西	七五四・五 粍	東南東	七六〇・〇 粍	西	四・一 米	一〇八・八 日
壽都	七六〇・八	北西	七五七・二	南南東	七五九・六	南東	六・六	二〇三・九
室蘭	七五八・八	北北西	七五五・八	東南東	七五八・二	北北西	三・一	五六・四
札幌	七五九・〇	北西	七五六・〇	南東	七五六・〇	北西	三・二	四九・〇
羽幌	七五七・六	南東	七五五・〇	南東	七五七・二	南東	五・八	一六五・五
旭川	七四九・七	西	七四七・八	西	七四九・四	西	一・七	五・二
浦河	七五七・二	北西	七五五・〇	東南東	七五六・五	西北西	四・六	一二一・四
帶廣	七五六・五	北西	七五四・八	東南東	七五六・五	東南東	二・一	三三・六
釧路	七五五・八	北北東	七五五・二	南東	七五六・五	北北東	五・七	七一・二
根室	七五六・五	北西	七五六・二	南	七五七・一	南	四・七	九五・四
網走	七五五・四	西	七五四・五	南	七五五・八	南	二・八	二・四
紗那	七五五・二	北西	七五五・八	南東	七五五・三	北西	六・二	一六八・九

(三) 降水量　本道の降水量は本邦中寡少の部に屬し、一箇年總量千粍を超ゆるものは函館、壽都、室蘭、札幌、羽幌、旭川、浦河、釧路、紗那等であつて、之を四國の太平洋岸高知地方に比較すれば其の約二分の一、東京の三分の二に過ぎない。

更に之を月別に見れば、十二月最も多く十一月、十月、八月、九月順次之に次ぎ、寡少な月は七月で六月、五月も亦之に次いで少い。

更に地方的に見るに概して北見の北部より天鹽、石狩、後志及渡島等日本海の方面に多く、北見の南部、日高及十勝地方は少い方である。殊に網走方面に於て寡量なる現象は西に於ては北見山脈、南部に於ては千島火山脈を以て遮られ濕潤な南風や西風を受けることが少い爲である。

又日本海沿岸に多いのは對馬暖流上の溫暖に濕度が西又は北西風に送られて、天鹽山脈等に衝突冷却し夏は雨となり冬は雪となつて降る爲である。特に注意すべき點は本道は內地府縣と異り梅雨の現象は稀有なる事である。

(四) 積雪量　本道の積雪量は本道南部及太平洋に面する地方に少く、西部及北部卽ち對馬暖流の影響を受ける沿岸地方に多い。

是を月別に見るに全道を通じ二月は最も多量で、從つて積雪の最深に達する月は二月で平均四十二・三糎以上を示すも、旭川の如きは約八十糎となり、西部地方に於ては百二十糎以上に達することが往々ある。

初雪の累年平均を見るに、札幌、旭川及紗那のみは十月末近くに初雪を見るが、他は大抵十一月初旬、釧路は十一月中旬であり、終雪は南西部たる函館、壽都及札幌は四月中旬、他は五月初旬乃至中旬の頃である。根雪の早いのは羽幌及旭川の十一月中旬であり、最も遲いのは釧路及根室の一月上旬で大部分は十二月に入つてからである。

(五) 海霧　六、七、八月頃になると襟裳岬より根室に至る近海は濃霧襲來し咫尺を辨ぜざる日多く、襟裳岬の燈臺に於ては濃霧に因る溟濛たる天候には每分每に七秒間霧笛を吹鳴らし汽船航行の便を圖る程である。之は津輕海峽から來る對馬海流の末端が千島寒流の南下せるものと此の附近に於て衝突して生ずる現象である。

由來釧路國沿海地方にては此の爲夏季氣溫低下し、且つ空氣濕潤なるが爲に結實を要する農作物の不良を來し、該地方に於て一時穀菽農業の不振を招かんとしたが、其の後調査の結果海岸三里を隔てる地に於て障碍なく充分農耕に適する事判明し、又海岸地方は

國有林（北見國溫根湯附近の蝦夷松）

國有未開地の開墾

墾成後の畑（十勝平野）

開發された水田農村（雨龍郡納内村）

根菜類を栽培し良結果を得てゐる狀態であつて適地適作の好例を示してゐる。

此の濃霧の襲來によつて沿岸地方一帶は天日を仰ぐ日數が少なく、釧路、根室及襟裳岬地方は四月から八月迄の大半は霧に蔽はれてゐるが、其れも沿岸地帶より數里の陸地に限られ、本道の內陸地帶及海岸の大部分は霧に蔽はれること極めて少く、年平均五日以內に限られてゐる。

第四章　土　地

本道の面積は五千七百五十五方里餘、即ち八百九十五萬一千四百八十二町歩にして諸外國の大なるを見て徒らに本邦の劣小感を抱くもの此の廣大さを見るべく、實に臺灣、樺太及四國を併せたるものに近似し、一支廳平均面積に於ても四百十方里に及び、一府縣平均四百十三方里に匹敵するもので地圖上の實感を遙かに超えるものである。尚之を一市町村平均から觀るに、本道は二十三方里で、府縣の一方里六に比し約十四倍強に當り根室支廳管内別海村の九十方里、留別村の九十二方里は殆んど大阪府の面積に等しく世人の想像を驚嘆せしむるに足るものである。而して昭和九年末の之が面積内容を示せば左の如くである。

(一)　土地區分

御料地	九〇九、八八六	町歩
國有地	四、四二六、八六五	
國有林（内務省所管）	三、五一二、五〇九	

官用地		三〇
貸付地	（未開地處分法に依る起業中の土地）	二二五、二九五町歩
未處分未開地		四六、二一八
道路河川湖沼其他		三四〇、一八七
		三〇二、六五六
民有地		三、六一四、七三一
公共團體有地		八九三、四四八
私有地		二、七二一、二八三
內 賣拂地	（未開地處分法に依る起業中の土地）	一四七、九四五
合計		八、九五一、四八二
御料林		九〇〇、四三七町歩

備考　本表は昭和九年末現在である。

(二) 山林　本道森林の林相は概ね針葉樹林、濶葉樹林及混淆林の三種に大別され、其の中濶葉樹林最も多く針濶混淆樹林は最少であつて、昭和九年末現在の山林面積は六百八十三萬九千七百八十四町歩で其の所有別を示せば左の如くである。

國有林（內務省所管）	三、五一二、五〇九
大學演習林及其他の官有林	一八六、三四六
公有林	八〇〇、〇七〇
社・寺有林	二、五三二
私有林	一、四三七、八九〇
合計	六、八三九、七八四

御料林は宮內省に依り、公有林は大部分北海道地方費に依り管理經營されてゐる。尙國有林は北海道廳の經營に係り、本道拓殖計畫上重要なる地位を占むるものなるに依り項を改め委しく後章で述べることゝする。

(三) 農耕適地　第二期拓殖計畫に依れば、本道に於ける農耕適地は總面積百五十八萬町歩、其の內昭和九年末現在の既耕地は九十四萬一千九百五十八町歩にして、差引未成の農耕適地六十三萬八千四十二町歩を殘してゐるが、第二期拓殖計畫實施以來每年一萬町歩乃至三萬町歩の增加を示すものである。

農耕適地一、五八〇、〇〇〇町歩 ｛水田適地 四五〇、〇〇〇町歩 ｛既成水田面積 二一三、二九七町歩 ／ 將來造田面積 二三六、七〇三町歩
畑適地一、一三〇、〇〇〇町歩 ｛既成畑面積 七二八、六六一町歩 ／ 將來畑地面積 四〇一、三三九町歩

(四) 耕地 昭和九年末の現在耕地は九十四萬一千九百五十八町歩であつて、内水田反別二十一萬三千二百九十七町歩に達し最近十箇年間に於て約二倍に增加した。是は專ら本道米作の確實なる事實を周知せられた結果であるが、最近四箇年の米作の不況は甚しく此の傾向を阻害する結果となり、目下之が對策に就きて鋭意調査立案し著々實施中に屬し、經營方法の適正と水稻新品種の育成とにより漸次順調に赴くべく著實穩健なる發達を辿るものと想像される。又畑の反別は七十二萬八千六百六十一町歩で水田の造成と畑作物價格低落に影響せられて一時減少の傾向を示したが、開墾助成及民有未墾地開發等の道廳施設に伴つて新墾地の增加顯著なるものがあり、現在未成畑適地四十萬一千三百三十九町歩の墾成も亦遠きを俟たぬであらう。

耕地の趨勢

年次	田	畑	計
	町反	町反	町反
昭和九年	二一三、二九六・七	七二八、六六〇・八	九四一、九五七・五
昭和八年	二一三、二五六・四	七一五、四八九・一	九二八、七四五・五
昭和七年	二一二、三八七・〇	六八九、二一九・六	九〇一、六〇六・六
昭和六年	二〇八、三三一・一	六六三、二三〇・四	八七一、五六二・五
昭和五年	二〇一、八八一・一	六三六、九三〇・二	八三八、八一一・三
昭和四年	一九〇、九四一・三	六二七、七四五・〇	八一八、六八六・三
昭和三年	一七四、四七四・八	六三三、〇二六・九	八〇七、五〇一・七
昭和二年	一五八、九一四・一	六三〇、五一五・四	七八九、四二九・五
昭和元年	一四六、六二七・七	六三七、六四一・四	七八四、二六九・一
大正十四年	一三六、〇一一・三	六五〇、三五五・六	七八六、三五六・八
大正十三年	一二七、三五一・三	六七一、四五九・九	七九八、八一一・二
大正十二年	一一八、一二九・八	七〇八、三一六・八	八二六、四四六・六
大正十一年	一〇五、一八二・六	七四二、七四〇・三	八四八、〇二二・九
大正十年	九三、三五四・九	七六一、一二二・四	八五四、五七七・三
大正九年	八三、八四六・一	七五五、二二四・三	八三九、〇七〇・四
大正八年	七三、八七九・二	七四二、二三九・九	八一六、一一九・一
大正七年	七〇、八七四・七	七二四、三一六・八	七九五、一九一・五
明治四十二年	三六、四三二・五	四八一、五五六・五	五一七、九八九・〇

(五) 國有未開地　昭和九年末の調査に依れば、既に賣拂又は貸付したる未開地で現に起業中に係るもの十九萬四千百六十三町歩、將來處分すべき未處分未開地三十四萬百八十七町歩であつて、未處分未開地中選定濟面積二十一萬七千六百七十九町歩、其の中農耕適地八萬一千二百五十町歩を存してゐる。

未處分未開地

支廳	面積	支廳	面積	支廳	面積
石狩	六、六三九町歩	檜山	一二、三七七町歩	日高	六、四二五町歩
空知	七、八六一	十勝	三一、三三四	留萌	三三、九九一
上川	一〇、四二九	釧路國	五七、九八五	合計	三四〇、一八七
後志	一九、一〇六	根室	八四、三六七		
		網走	二三、四二七		
		宗谷	二五、〇三三		
		渡島	八、五三九		
		膽振	一四、六二四		

備考　支廳に市の分を含む。

(六) 土地制度　本道に於ける土地制度は開拓使以來幾多の變遷を經て今日に至つたが、要するに常に時勢に鑑みて適切なる政策を採用し以て開拓の進捗に努めた。卽ち明治五年北海道土地賣貸規則の制度に依り一人十萬坪以内の賣下を認め、着手後十箇年間除租の特典を設け、次で明治十九年閣令土地拂下規則に依り一人十萬坪を限り貸下げ、之を成功の後付與することゝし、其の翌年より十年間地租及地方稅を免除するの途が開かれた。更に明治三十年法律及勅令を以て北海道國有未開地處分法が發布され、未開地の賣拂付與交換及貸付の法を定め、起業の目的に應じ處分法を異にし、以て賣拂付與又は交換したる土地は民有に歸したる翌年より二十年間免租し、或は又同年廳令を發し府縣知事の認可を得たる團體入地者に對しては貸下地の豫定存地を爲す便を與へた。

越えて明治四十一年北海道國有未開地處分法並に同施行規則を改正し、公用又は公共事業並素地の儘使用を目的とする土地は貸付(若くは前者は付與)を認むる外、自作農に限つて十町歩の特定地を設定して無償貸付を爲し、其の他は全部賣拂の制に代へ成功期間滿了の翌年より十年間は地租を免除した。而して起業の目的に依り賣拂若くは貸付面積を制限し耕作は五百町歩、牧畜及植樹は八百町歩、其他は十町歩として成功期間は何れも地積に依り五年乃至十年(植樹地又は泥炭地は二倍)とし民有に移す方針を採つた。昭和二年八月再び勅令を以て曩の北海道國有未開地處分法施行規則を改正し、賣拂若くは貸付面積の制限を、耕作は二百町歩、牧畜及植樹は五百町歩に更正し、特定地其他は

依然十町歩としたが、其の賣拂又は貸付方法に付ては從來の特賣を改めて競賣とし、即ち(一)公用又は公共の利益と爲るべき事業、(二)二十町歩以内、(三)拓殖上特に必要なる事業、(四)二回以上競落者なき土地は豫定價格以上にて賣拂又は貸付する場合の外は總て之を競賣とすることゝしたが、昭和八年六月更に勅令を改正して特定地の貸付面積の十町歩なるを、特殊の經營を必要とする場合に於ては釧路國及根室支廳管轄區域は二十町歩迄、其他の支廳管轄區域は十五町歩迄とすることゝした。

要するに現行土地制度は一は以て大地積の處分に俟つて拓殖の促進、産業の勃興を圖り、一は以て小農の扶植に努め集約的開發を促進し大いに殖民を圖らんとするにあつたが、最近の狀況は大地積處分を可とすべきもの甚だ少く、又土地處分の成績より之を見ても、成る可く小地積の分割處分に依り主として自作農民を扶植し、以て堅實なる農村を構成するを適當と認め專ら此の方針に力を注いで居る。

第五章　人口

本道は明治二年開拓使の設置を見るまで蝦夷地と稱し、可惜廣大なる國土を狩獵及爭鬪を事とするアイヌ族の跳梁に委ね、更に開拓の耒耜を入るゝ何等積極的國策はなかつた。抑々和人移住の濫觴は遠く七百餘年前文治年間であるが、其の勢力は微々たるもので未だ振ふに至らず、屢々夷人の逆襲に困しみ、僅に今の渡島地方の一隅を守り漁撈を事とせるに過ぎなかつた。

松前氏が蝦夷を征服するに及び、制度と施設とに於て稍々見るべきものあつたが、其の財力の計畫は僅に權勢の維持に止り、未た積極的に殖民の業を興すに及ばず、幕府時代に至りて內外の狀勢に鑑み、夷人の撫恤と和人の移住を奬勵し、産業の開發及航運の途を講ずる等畫策する所尠くなかつたが、封建の眠り未だ覺めず氣運の熟せざる爲、人口の增加は固より産業の發達も著しくはなかつた。即ち明治二年に於て人口僅に五萬八千四百六十七人を算ふるに過ぎなかつた。

然るに明治二年開拓使設置さるゝに及び、同使は開拓の根幹を樹立し規模を擴張し、各

種の産業を興すと共に移民を奥羽及北陸地方に募りて保護奬勵に努めた結果、農商工等の移住を企圖する者漸く多く年を逐うて戸口を增加するに至り、明治十九年に於ては三十萬三千七百四十六人を算ふるに至つた。然るに其の間開拓使の廢止と之に代る一局三縣時代の不振なる經營及計畫は一時本道の開發を遲延せしめ當初の開拓精神を沮喪せしめた。

而して玆に一局三縣を廢して同年北海道廳の設置を見ることゝなり、爾來消長變遷多く明治四十二年第一期拓殖計畫の樹立を見る迄は概して其の氣運釀成と基礎工作に始終せるものと見るべきであるが、漸次移殖民政策も重要視さるゝに及び、殖民地の選定區劃及土地處分を敏活ならしめ、鐵道敷設及道路開鑿等交通の便を圖り、又移民世話所を設くる等鋭意移民の招徠を促し開拓の氣運を振興せる爲移民は陸續到來するに至り、大正九年第一回國勢調査に於ては二百三十五萬九千百八十三人となり、更に大正十四年第二回國勢調査に於ては二百四十九萬八千六百七十九人となり昭和五年第三回國勢調査に於ては二百八十一萬二千三百三十五人を數へ、尙昭和十年第四回國勢調査に於ては實に三百六萬八千二百八十三人に達し漸次拓殖の實績を擧ぐるに至つた。

之を前回の國勢調査の結果に比較するに五箇年間に於て實に二十五萬五千九百四十八人の增加を示してゐる。尙最近十箇年に於ける人口增加率の年平均は〇・〇二三であり、之が實數は五十六萬九千六百四人である。蓋し本道の人口增加は自然增力と移民來往住の差增に依るものであつて、前者に於ても其の率全國府縣中第五位（昭和九年）にして相當の增加率を示して居るも、將來拓殖の促進と我國人口政策との關係よりして、移民の增加に依り本道人口の充實を圖るは刻下の急務と見るべきである。

戸口增加の趨勢

年次	現在戸數	現在人口	一戸平均人口
昭和十年十月一日	五四五、三九〇戸	三、〇六八、二八三人	五・六三人
昭和九年	五一八、九四八	二、八九七、五〇一	五・五八
昭和八年	五一三、五一八	二、八五九、五〇一	五・五七
昭和七年	五〇六、七六一	二、八〇五、八五三	五・五四
昭和六年	四九九、九〇一	二、七四六、〇四二	五・四九
昭和五年十月一日	五〇九、七五八	二、八一二、三三五	五・五二
昭和四年	四八〇、五七三	二、五五五、五〇六	五・三二

年次	現在戸數	現在人口	一戸平均人口
昭和三年	四七一、一六三戸	二、五〇六、八八三人	五、三二人
昭和二年	四六四、〇一七	二、四七一、三二一	五、三三
昭和元年	四五八、四一八	二、四三七、一一〇	五、三二
大正十四年十月一日	四六八、七二九	二、四九八、六七九	五、三三
大正十三年	四五二、三二六	二、四三一、〇八二	五、三五
大正十二年	四四八、七一七	二、四〇一、〇五六	五、三五
大正十一年	四四三、四八三	二、三七四、六九九	五、三五
大正十年	四四〇、六五五	二、三四一、一〇〇	五、三一
大正九年十月一日	四四九、七八三	二、三五九、一八三	五、三五
明治四十二年	二九一、二〇六	一、五三八、七三八	五、二八
明治四十年	二五九、六六二	一、三九〇、〇七九	五、三六
明治三十年	一六四、四〇八	七八六、二一一	四、七八
明治二十年	六七、五四四	三二一、一八	四、七五
明治十年	三八、一四九	一九一、一七三	五、〇一

備考　大正九年、同十四年、昭和五年及同十年十月一日現在は國勢調査の結果にして其他は北海道廳調査の推計人口である。

(一) 體性と年齡

昭和十年國勢調査に於ける本道の人口は三百六萬八千二百八十三人であつて、内男子は百五十九萬三千八百十九人、女子は百四十七萬四千四百六十四人、女子百人に付男子百八人の比である。

又昭和十年國勢調査に依る現住人口年齡構成は未定であるが、昭和五年國勢調査の夫れを觀るに、生産的人口百五十一萬七千百九十一人、不生産的人口百二十九萬五千百四十四人であつて、生産的人口は總人口の五割四分を占めてゐる。

(二) 現在密度と可容人口

昭和十年十月一日現在（國勢調査）に依る本道人口の密度は一方里五百三十三人に當り、千島列島六百六十六方里六を除くも六百三人であつて、之を東北六縣の平均一方里當千六百十人に比較するに、僅に其の三割七分を容るゝに過ぎない狀態である。更に全國中最も稀薄な岩手縣の一方里當千五十九人に比較しても尚其の五割八分に過ぎず、多分に拓地殖民の餘地を有するものである。

今千島を除いた本島の地積に對し、東北六縣又は岩手縣の例に依り可容人口を算出して見るに

東北六縣の例　一、六一〇人に依れば　八、一九三、六一〇人

岩手縣の例　一、〇五九人に依れば　五、三八九、四六〇人

となり、岩手縣を標準としても今後優に二百三十餘萬人を收容することが出來ることになる。本邦人口問題を憂慮し移殖民政策を云々するもの玆に着目して然るべきである。

(三) 人口動態　內閣統計局調査に依れば、昭和九年に於ける本道の出生十萬四千七百八十二人、死亡五萬一千七百三十二人にして、人口千人に付前者は三十四人二二、內地の總平均二十九人九七に對し四人二五の超過で、其の比率は全國中第七位であり、後者は十六人九であつて內地總平均十八人一一に比し一人二一低く、其の比率は極めて下位に在るを見、之を表面的に觀察しても本道に於ける氣候風土の生活に適せる理由を證明し得るのである。

而して自然增加は五萬三千五十人であつて、前年の夫れに比し九百十人を增加し、人口千人に付いての割合は十七人三二にして、內地總平均の十一人八六に比すれば五人四六の超過である。

(四) 移民來往住　來住者中最も多いのは農業者及雜業者であつて、本道經濟界の活躍時代たる大正五年以降四箇年間は移民の來住最も殷賑を極め、大正八年の如きは二萬五千戶、九萬一千人に達し、既往に於て最高位に達したのであるが、歐洲戰亂後の財界反動は本道農業にも深刻なる不況を齎して來住者の減少と往住者の增加となり、大正十三年に於ては往住者九千百二十三戶、四萬三千八百四十六人の多きを算する悲況を呈した。然るに爾後拓殖の進捗と財界の安定に連れて幾分回復の趨勢を辿り順調を示しつゝあるものである。卽ち昭和九年度に於ては來住一萬二千三百六十戶、五萬五千九十三人、往住五千三百九十六戶、二萬七千四百八十九人を算ふる狀況である。卽最近の趨勢を示せば左の通りである。

來往住者累年戶口

年度	來住者 戶數	來住者 人口	往住者 戶數	往住者 人口	差引殘留者 戶數	差引殘留者 人口	來住百に對する往住 戶數	來住百に對する往住 人口
昭和九年度	二三、三六〇戶	五五、〇九三人	二七、二六六戶	二七、四八九人	六、九六四戶	二七、六〇四人	四四戶	五〇人
昭和八年度	一〇、二六五	四八、四二四	四、九四六	二四、八八八	五、三一九	二三、五三六	四八	五一
昭和七年度	一〇、七八一	四九、九〇三	四、八七一	二四、〇九五	五、九一〇	二五、八一〇	五四	五一
昭和六年度	二一、〇三三	五五、六三〇	八、三五五	二七、四三三	六、一八七	二七、九〇八	四九	四九
昭和五年度	二一、八八四	六〇、一二六	八、一二三	二六、二三五	七、六五二	三三、八九一	四二	四四
昭和四年度	二一、六一七	五八、四七一	八、六三三	二七、二一九	六、九八四	三一、二五二	四五	四七
昭和三年度	一八、四七四	五三、九三一	八、〇四四	二八、〇四四	五、八四四	二五、八七七	四九	五三

年度	來住者 戸數	來住者 人口	往住者 戸數	往住者 人口	差引殘留者 戸數	差引殘留者 人口	來住百に對する往住 戸數	來住百に對する往住 人口
昭和二年度	一三、一三七 戸	五七、八九〇 人	六、〇〇一 戸	二八、七四五 人	七、一三六 戸	二九、一四五 人	四五 戸	五〇 人
昭和元年度	一二、五〇七	五六、三一二	六、〇七五	二八、四八九	六、四三二	二七、八二三	四九	五一
大正十五年 自一月 至三月	四、二八〇	一七、四五三	一、八九一	八、五八六	二、四八九	一一、八六七	四三	四三
大正十四年	一三、八五七	六〇、一〇四	七、四一三	三三、四五七	六、四四四	二六、六四七	五三	五六
大正十三年	一二、七四六	五六、三一五	九、一二五	四三、八四六	三、六二三	一三、〇六九	七二	七八
大正十二年	一三、九四三	五八、一〇五	六、四七四	二七、八六九	七、四六八	三〇、三四〇	四六	四八
大正十一年	一三、六〇三	六〇、四二二	六、三九六	二六、五八〇	七、二〇六	三三、八五二	四二	四四
大正十年	一八、二四三	六七、九四四	六、三四七	二四、三七九	一二、九九五	四三、五九五	三五	三六
明治四十二年	一九、〇三四	六三、八四八	四、八四三	一三、七九九	一四、一九一	五〇、〇四九	二五	二七
明治四十年	二一、一四三	七八、七二七	三、八三四	一三、九五七	一七、二五八	六六、七七〇	一八	一七
明治三十年	一三、九一〇	六四、三五〇	二、六二九	一二、三五六	一三、二八一	五二、七三一	一七	一八
明治二十年	二、六一七	九、〇三八	二、六四	八、二四八	一三	七九〇	一〇	八
明治十年	六八	二、三七七	？	？	？	？	？	？
明治二年	七二六	一、九七二	？	？	？	？	？	？

備考　一、本表中來往住者は轉籍、寄留等（道内の移動に依るものは除く）の手續に依つて當該年内に役場に届出でたものによる故に、事實の來往者は前年のものが尠くはないが届出の事實に依つて調査した。

二、大正十四年以前は年末現在である。

更に大正十四年より昭和十年に至る十箇年來往住者府縣別戸口及職業別戸口數を示せば左の如くであつて、近時來住者の最も多いのは秋田縣であり、之に次ぐは青森、宮城、新潟、岩手、山形、福島、東京及富山の各府縣等である。

（一）自大正十四年一月 至昭和十年三月　十年三箇月來往住者府縣別戸口調

府縣	來住者 戸數	來住者 人口	往住者 戸數	往住者 人口	殘留者 戸數	殘留者 人口
秋田	一四、七九九 戸	六八、六五五 人	二、一四三 戸	二、七一四 人	二、六五六 戸	五六、九四一 人
青森	一四、七九七	六八、五二六	三、四九三	一七、五五五	一一、三〇四	五〇、九二一
宮城	九、八九一	四六、一六七	二、〇八九	一〇、〇四〇	七、〇〇二	三六、一二七
新潟	九、五〇七	四三、七九一	一、七二二	九、一五一	七、七九五	三四、六四〇
岩手	七、六〇三	三五、二四七	一、五九〇	七、二一三	六、〇一三	二八、〇三四
山形	七、四五五	三三、六二三	一、二六八	六、二八〇	六、一八七	二七、三三三
福島	七、四七二	三三、七二八	一、五七一	七、〇二四	五、九〇一	二六、七〇四
東京	六、〇七一	二七、一〇五	一〇、三〇五	五〇、八〇〇	△四、二四四	△二三、六二五
富山	五、六五六	二六、一七一	一、八二一	九、〇〇一	三、八三五	一七、一六九
石川	四、六一五	二〇、八四四	一、〇四八	五、四七七	三、五六七	一五、三七七
福井	二、七二九	一三、〇七八	一、三〇三	六二、七六五	△二、二五三	△四九、六八七
樺太	二、七二九	一三、〇七八	一、三〇三	六二、七六五	△二、二五三	△四九、六八七
石川	四、六一五	二〇、八四四	一、〇四八	五、四七七	三、五六七	一五、三七七
富山	五、六五六	二六、一七一	一、八二一	九、〇〇一	三、八三五	一七、一六九
東京	六、〇七一	二七、一〇五	一〇、三〇五	五〇、八〇〇	△四、二四四	△二三、六二五
福島	七、四七二	三三、七二八	一、五七一	七、〇二四	五、九〇一	二六、七〇四
岩手	七、六〇三	三五、二四七	一、五九〇	七、二一三	六、〇一三	二八、〇三四
山形	七、四五五	三三、六二三	一、二六八	六、二八〇	六、一八七	二七、三三三
新潟	九、五〇七	四三、七九一	一、七二二	九、一五一	七、七九五	三四、六四〇
宮城	九、八九一	四六、一六七	二、〇八九	一〇、〇四〇	七、〇〇二	三六、一二七
青森	一四、七九七	六八、五二六	三、四九三	一七、五五五	一一、三〇四	五〇、九二一
秋田	一四、七九九 戸	六八、六五五 人	二、一四三 戸	二、七一四 人	二、六五六 戸	五六、九四一 人

府縣	來住者 戸數	來住者 人口	往住者 戸數	往住者 人口	殘留者 戸數	殘留者 人口
	戸	人	戸	人	戸	人
岐阜	二、〇〇五	八、二四	五、七二	五、八二一	一、四〇八	五、八二一
德島	一、九一〇	七、九八七	三、六〇三	六、二八四	一、五二五	六、二八四
香川	一、六六八	六、六二七	二、七八二	四、九六五	一、二七三	四、九六五
廣島	一、九〇〇	七、〇二九	二、一四八	四、八八一	一、〇四七	四、八八一
茨城	一、五四四	六、九〇七	一、七五一	五、一五六	一、一三八	五、一五六
朝鮮	一、六二三	六、一一〇	四〇六	一、四八一	一、四八一	五、四二〇
兵庫	一、四〇二	五、八四七	七四二	三、五二三	六六一	二、三二四
愛媛	一、三九五	五、九七三	一、五九三	四、三六〇	一、〇六二	四、三六〇
愛知	一、三三六	五、八四五	九五三	四、八一五	三八四	一、〇三〇
栃木	一、三〇三	五、七七三	三六五	一、六二四	九七七	四、〇九八
長野	一、二七〇	五、五三九	一、八四二	四、一六	八五四	三、九七七
静岡	一、二八一	五、五八四	五八八	二、九三一	六九三	二、九五二
奈川	一、二三七	五、七〇六	一、六三三	八、〇七九	三七九	一、六三三
大阪	一、二三七	五、一八五	一、七〇四	七、七四五	四六七	二、〇五〇
神奈	一、一八三	四、八六八	一、一四〇	二、八四	八八九	三、四六八
岡山	一、一〇九	五、三九八	四七三	二、〇九一	七三六	三、四七三
福岡	一、一八一	四、八四七	一、一三三	四七三	九四八	三、七三五

府縣	來住者 戸數	來住者 人口	往住者 戸數	往住者 人口	殘留者 戸數	殘留者 人口
千葉	一、一八	五、〇五	一、〇五八	二、〇三七	六七八	二、〇三七
群馬	一、〇三一	四、三四九	一、六四五	六九四	一七一	二、七〇四
和歌山	九五〇	三、八一二	三七一	一、〇〇八	一七九	三、八一二
埼玉	八九三	三、八六	一、九八	六四六	四六二	一、九二八
滋賀	八二五	四、〇四三	一、〇九七	六〇五	二三〇	二、九四六
三重	八六一	三、七一〇	一、二四	一、一七四	二四四	二、五〇五
鳥取	八二	三、五八二	一、〇七	一、一七	二四四	二、五〇五
奈良	八一六	三、四二九	七三四	六四五	二四四	二、六九五
京都	七五二	三、三四三	二、八三三	一、〇六	六四六	二、八九五
山口	七〇三	三、〇四	八八〇	五〇〇	二〇二	二、一九四
島根	六五七	二、一〇五	六三五	一、五七〇	一五四	一、五七〇
鳥取	六五九	二、九八九	六七五	四九六	一六三	二、二四五
山梨	五九〇	三、一六一	一九〇	一、〇一〇	一六三	二、一五一
熊本	六五九	二、九一〇	一九六	五四四	九六	一、七九七
鹿兒島	五一七	二、三二一	一六一	六七九	一六一	二、四一三
大分	四八九	二、〇九二	一六一	三七八	一六一	二、四一三
長崎	五〇七	二、〇八五	一七五	一、三一五	一七五	一、三一五
佐賀	四三三	一、九一九	二一七	五八八	二一七	一、三三一
宮崎	二三四	九八九	八二	三五八	八二	六三一
臺灣	四〇	一六四	一六	五七	一六	七〇一

府縣	來住者 戶數	來住者 人口	往住者 戶數	往住者 人口	殘留者 戶數	殘留者 人口
沖繩	二六戶	一二四人	一二戶	七〇人	一四戶	六四人
合計	一三〇、一八〇	五八六、八九五	五六、一七一	二六六、七七五	七四、〇〇九	三三〇、一三〇

(二) 職業別來往戶數

年度	農業 來住	農業 往住	漁業 來住	漁業 往住	商工業 來住	商工業 往住	雜業 來住	雜業 往住	合計 來住	合計 往住
昭和九年度	二、〇五一戶	九八七戶	一、〇四三戶	五〇五戶	二、二三五戶	八八七戶	六、八三一戶	二、〇三七戶	一二、三五〇戶	五、三九六戶
昭和八年度	二、六五八	八八七	六四九	四五三	一、四〇六	八三六	五、五五三	二、七四〇	一〇、二六五	四、九四六
昭和七年度	二、九四三	九二三	六五七	三八一	一、四五六	八〇三	五、七二五	二、七七五	一〇、七八一	四、〇八一
昭和六年度	二、四五四	一、〇八六	七五七	六二一	一、六二七	九三〇	五、一九八	二、九一九	一二、〇三三	五、八三五
昭和五年度	二、六四七	一、〇〇〇	八〇三	五七八	一、七九九	八〇三	六、六六六	二、八一七	一二、八四四	五、三八三
昭和四年度	二、四〇九	一、二一七	八二〇	五七九	一、四八九	七九九	六、二九九	三、〇四八	一二、六一七	五、六二三
昭和三年度	二、三六〇	一、二五七	八〇一	四七五	一、四七五	八九五	六、九三五	三、〇〇三	一二、七四五	五、六三〇
昭和二年度	二、二九五	一、二三一	九二五	六二三	一、三五六	九〇八	七、〇五二	三、一三九	一三、一〇一	六、〇〇一
昭和元年度	二、〇一八	一、三〇四	八九四	四二三	一、七九六	一、一三一	六、八一九	三、二七	一二、五〇七	六、〇七五
大正十五年自一月至三月	一、〇八五	四四一	三〇三	九三	一、三六九	三六九	二、〇六三	九六八	四、三六〇	一、八九一
大正十四年	二、二六二	一、七一五	七二〇	四五二	二、六八一	一、三六三	七、一二四	三、八二三	一四、八九九	七、三四五
計	三二、一八三	二三、〇四七	一、三四二	五一、一七三	二一、三四一	九、七三八	八一、五三一	三一、九八五	一二六、〇〇九	五四、〇四二

(三) 職業別來往人口

年度	農業 來住	農業 往住	漁業 來住	漁業 往住	商工業 來住	商工業 往住	雜業 來住	雜業 往住	合計 來住	合計 往住
昭和九年度	一〇、〇〇四人	四、二九七人	五、一七七人	二、六七九人	七、二八九人	三、三一七人	一七、一九六人	七、一九四人	五五、〇九三人	二七、四八九人
昭和八年度	一一、六三三	三、八三九	三、四八九	二、三二七	五、三五八	三、二九一	一五、五四一	六、三五五	四八、四二四	二四、八九八
昭和七年度	一二、三二四	三、九三一	三、八〇八	二、一一一	六、一八三	三、〇七二	一四、九七九	六、一九五	四九、〇九三	二四、〇九三
昭和六年度	一四、五六三	四、三三五	四、三一四	三、一六六	六、一九五	三、一三七	一六、八八八	六、六六六	五五、六四〇	二七、七三三
昭和五年度	一六、一四〇	四、一四〇	四、七八二	三、一三三	六、六六六	三、一三七	一五、八三六	六、二九九	六〇、一二六	二六、三五五
昭和四年度	一六、九九〇	五、三七七	五、一八四	三、〇六八	七、一三四	三、四七七	一五、八四七	七、一二四	六八、四七一	二七、二一九
昭和三年度	一四、五二三	五、一八三	四、九七一	二、七五八	六、三二九	二、九三二	一六、三二九	七、一二四	五五、九三二	二八、〇五四
昭和二年度	一三、六四八	五、三七二	六、三五二	三、〇九九	七、一二四	三、一三七	一六、四四一	七、一二四	五七、八九〇	二八、七三五
昭和元年度	一二、〇六四	五、六九三	五、六六一	一、九八三	六、六六六	二、八一七	一六、九八〇	六、六六六	五六、三一二	二八、四八九
大正十五年自一月至三月	四、六三五	一、八四	一、八六二	四〇三	一、八九二	八六九	四、九六六	二、〇四三	一六、四三二	八、三六六
大正十四年	一三、三三七	七、〇〇四	二、八五二	一、八九二	四、九六六	一、九六八	一九、三六八	八、三四七	六〇、一〇四	三三、四五七
計	一三九、八一九	五一、三〇五	四八、〇五五	二七、一二八	三二、四七九	一七、〇三九	一七〇、三五九	六八、五三一	五七六、三三六	二八四、九七七

備考　一、雜業中には職業不詳を含む。

二、昭和八年度數字中函館市の分は同市大火の爲資料燒失せるに付七年度分を加算せり。

(五) 移民世話

從前に於ける移民の世話は專ら汽車及汽船割引券の交付と移民事務所に

依る案内に過ぎなかつたが、大正十二年以降移住費の補助其他世話指導に關する施設を漸次擴張し今日に及んでゐる。

今右移民事務所を經由せる移民の趨勢を觀れば左表の如くである。

（一）事務所經由移民

（以下四表は移民事務所を經由したる移民にして移住割引券を携帶せる上陸者のみを調査したるものとす）

年次	移民數 戸數	移民數 人口	前年との比較 戸數	前年との比較 戸數 %	前年との比較 人口	前年との比較 人口 %
昭和九年	二、四一九戸	五、二六四人	三二七戸	一五・六	六五八人	一四・三
昭和八年	二、〇九二	四、六〇六	△一二七	△五・七	△六九〇	△一二・三
昭和七年	二、二一九	五、二九六	△一、五八〇	△四一・六	△四、九九二	△四八・五
昭和六年	三、七九九	一〇、一八八	△七九三	△一・七	△一、六七〇	△一・三
昭和五年	四、三八二	一一、九五八	△二一二	△〇・五	△三二九	△〇・三
昭和四年	四、三七〇	一二、四八七	七六三	二・一	一、九九六	一・九
昭和三年	三、六〇七	一〇、四九一	一、四〇五	六・四	四、七五九	八・三
昭和二年	二、二〇二	五、一三二	△七八二	△二六・一	△一、一九〇	△一〇・二
昭和元年	二、九八四	六、〇三八	△一九五	△〇・八	△八六四	△一・四
大正十四年	二、七九九	一、二九五	四一七	一・八	一、二九五	二・七

備考　昭和七、八年に於て激減せるは昭和六、七兩年に於ける本道の凶作が移民希望者の來住心を阻害せるに因る。

（二）經由移民月別

年次	昭和九年	昭和八年	昭和七年	昭和六年	昭和五年	昭和四年	昭和三年	昭和二年	昭和元年	大正十四年
一月 戸	七四	九八	一四〇	一二九	一六一	七五	一六一	一四六	一六〇	九〇
一月 口	一三五	一八五	二五八	三三三	三九九	一九七	三〇四	三五五	三二八	一八七
二月 戸	二三三	二三三	二三五	三五一	二四六	一三八	一四六	二三五	一三八	一五九
二月 口	四七九	四九一	五〇七	一、一四三	八六六	三〇一	四一九	四一九	三〇一	二一五
三月 戸	六二三	一、八〇三	一、五八〇	一、二六二	一、一九九	四〇九	一、一九一	八一一	四〇九	四七六
三月 口	一、三七五	一、三七七	一、五八五	四、三六七	二、九九八	一、一七二	一、一九一	二、三六四	一、一七二	一、一六三
四月 戸	四五四	九五六	一、〇四〇	九九八	一、〇二四	九九六	八八七	九五六	七〇六	六八三
四月 口	一、一三七	一、一五五	二、一一一	二、一四四	二、一一一	一、九四六	二、二三二	一、九五一	一、七七二	一、七一〇
五月 戸	二三八	四七九	二一四	五七〇	二一四	五四〇	八六九	六八六	五六〇	三九九
五月 口	五七九	五五〇	五七〇	一、三一二	四八九	一、二五四	一、二五九	一、一九一	一、〇五四	八六一
六月 戸	七六	一三五	一四四	一四〇	一四〇	一四八	一四四	一四八	一四〇	一四〇
六月 口	一、一二	一、一六八	一、二六一	一、三五一	一、三五一	一、三五二	一、三六六	一、三六六	一、三〇二	一、一六
七月 戸	一、一二	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六
七月 口	二、一六	二、一六	二、一六	二、一六	二、一六	二、一六	二、一六	二、一六	二、一六	二、一六
八月 戸	一、一〇	一、一〇	一、一〇	一、一〇	一、一〇	一、一〇	一、一〇	一、一〇	一、一〇	一、一〇
八月 口	二、一九	二、一九	二、一九	二、一九	二、一九	二、一九	二、一九	二、一九	二、一九	二、一九
九月 戸	一、一九	一、一九	一、一九	一、一九	一、一九	一、一九	一、一九	一、一九	一、一九	一、一九
九月 口	三、一九	三、一九	三、一九	三、一九	三、一九	三、一九	三、一九	三、一九	三、一九	三、一九
十月 戸	一〇四	一〇四	一〇四	一〇四	一〇四	一〇四	一〇四	一〇四	一〇四	一〇四
十月 口	二、一二	二、一二	二、一二	二、一二	二、一二	二、一二	二、一二	二、一二	二、一二	二、一二
十一月 戸	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇	九〇
十一月 口	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六
十二月 戸	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇
十二月 口	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六	一、一六
計 戸	一、四一九	二、〇九二	二、二一九	三、七九九	四、三八二	四、三七〇	三、六〇七	二、二〇二	二、九八四	二、七九九
計 口	五、二六四	四、六〇六	五、二九六	一〇、一八八	一一、九五八	一二、四八七	一〇、四九一	五、一三二	六、〇三八	一、二九五

(三) 經由移民府縣別戶口 (昭和九年)

府縣	戶數	人口	府縣	戶數	人口
福島	六三五戶	一、一五五人	山梨	三六戶	四四人
秋田	三三三	八二三	東京	二三	六七
山形	一七五	三二二	新潟	二三	五三
香川	一四六	二四七	和歌山	二三	四五
宮城	一二二	三七七	千葉	二一	四二
高知	一一八	二三七	鳥取	二〇	五〇
岐阜	九九	二三一	廣島	二〇	三三
愛媛	八四	一四一	福井	一八	二七
富山	七三	一五〇	兵庫	一七	三六
岩手	六二	二〇七	靜岡	一五	三六
德島	六一	八八	石川	一五	三三
長野	四三	八八	島根	一四	三一
栃木	三八	一四七	奈良	一三	三二
岡山	三三	八一	山口	一二	三一
青森	三〇	一一〇	三重	九	三六
愛知	二八	七三	埼玉	八	一二
滋賀	七	一五	佐賀	四	九
茨城	七	三〇	長崎	三	一一
熊本	六	二三	京都	二	七
福岡	五	二二	大阪	一	一
群馬	四	一五	其他	九	三六
神奈川	四	一〇	計	二、四一九	五、二六四

(四) 經由移民移住先 (昭和九年)

市及支廳別	戶數	人口	市及支廳別	戶數	人口
網走	六二五戶	一、三三四人	石狩	四一戶	六三人
十勝	四四三	八八四	渡島	四〇	八八
上川	四〇五	八五二	後志	三三	六二
釧路國	二六九	七八六	日高	七	一一
空知	一六七	三四五	檜山	一	一
宗谷	一〇〇	二六九	釧路市	三八	七六
留萌	五九	一三三	札幌市	二九	五三
膽振	四九	一〇四	函館市	二五	四二
根室	四七	八七	小樽市	一六	二三

市及支廳別	戸數	人口
旭川市	一五戸	三三人
室蘭市	九	二七
帶廣市	一戸	一人
計	二四九	五二六四

(六) **土人**　北海道土人はアイヌと汎稱されてゐるが、之を本島固有のアイヌ族と色丹土人（明治八年北千島と樺太交換の際我國に歸化せる占守島在住のクリル族）に分つことが出來る。

之等土人の趨勢を其の人口に就て見るに、明治五年以降同三十一年に於ける人口は其の間多少の增減ありとは云へ、概して停頓狀態を呈し同三十二年以來其の出生及死亡を比較すれば、毎年三百人乃至三百五十人の增加を續けてゐる。

斯くの如く事實上增加しつゝあるに拘はらず、統計的には停頓否寧ろ減退の傾向を示すを目して世人は土人が亡び行くものと言ふ向もあるが、具さに其の實情を探究すれば決して衰亡し行く民族であるとは斷定出來ない。毎年增加しつゝ而かも統計的に減少を示すと云ふが如きは、相當理由の存するところであつて、之は現時の狀態に於て土人の統計を得る事は甚だ困難な事情に置かれてゐるに依るものである。卽ち現行法上土人及和人の區別はないのみならず、其の混血兒は何れに屬せしめるか、內務省の解釋は何人が見ても和人に見える者は和人に、土人に見える者は土人として取扱ふと云ふが如き限界の明かでない極めて漠然たる解釋を下してゐる。然るに人間の容貌性質等は生活關係及環境の影響等に依つて變化し易いもので、一般和人に伍し其の生活樣式を普通內地人に模してゐる者は次第に和人化し、一見兩者の區別が付かなくなり就中混血兒の如きは益々判別し難いのである。而して最近の調査に依れば和人にして土人の家に入嫁及入婿せる者九百七人、土人にして和人の家に入嫁及入婿せる者九百六十三人に達し歲と共に增加しつゝある傾向に徵するも人口統計に現はれる土人の數は實數と相當の懸隔を示すものなるを首肯し得るであらう。而して之等の男女は隨意に道內の市町村或は他府縣に轉住して行く爲、一層兩者の區別を不明瞭ならしめてゐる。之卽ち土人が統計上に於ては人口の增加せざる原因を爲すものである。

他面世人の多くは彼等の榮養及衞生の不完全、血族結婚、飮酒過度及死亡高率等の理由を擧げて土人族の滅亡を云爲するは事實を見誤るも甚しい。之等列擧事項は同族固有の

缺陷とは限らぬもので、且土人保護の項に於て後述する如く今や同化の實大いに揚がり往昔の弊風を矯め、貧困乍らも一般生活狀態に於て和人と異るなき迄に至つた今日、獨り土人のみが右の事實に依り滅亡して行くものと輕々に斷ずることは出來ない。

又土人の統計は一定不動の土人部落、卽ち給與地を附與されて定着せるものを基礎として調査されるもので、部落を離れて道內諸都市、或は他府縣に轉住せるものも多數あるが之は統計上洩れ勝である。それは前述の如く戸籍上土人及和人の區別なき爲である。此の統計に基く人口は昭和九年末の調査に依れば人口一萬六千三百八十一人、出生六百四十五人、死亡四百九十八人、其の千分率は前者三十九人、後者三十人、差引九人の自然增加となつてゐる。

其の分布狀態を支廳別に見るに其の數最も多いのは日高一千三百六十六戸、六千十二人で、膽振の七百十九戸、三千五百八十一人、十勝の三百一戸、一千二百四十三人、釧路國の二百十三戸、九百九十四人之に次ぎ其の他全道各地に散在してゐる。

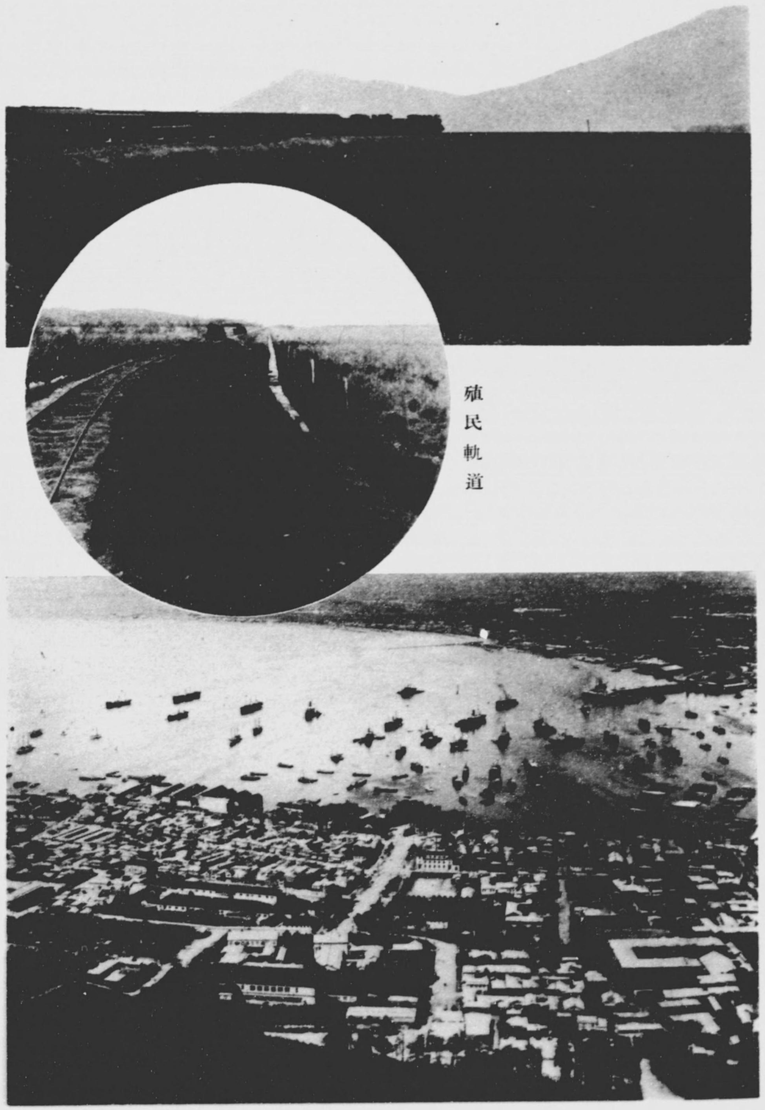
戸數及人口の趨勢を示せば次の通りである。

舊土人の趨勢

年次	現在戸數	現住人口	出生	死亡	比例 現在一戸に付人口	比例 人口百に付出生	比例 人口百に付死亡
昭和九年	三、五四六戸	一六、三八一人	六四五人	四九八人	四・六二人	三・九四人	三・〇四人
昭和八年	三、四六一	一五、九一六	六四九	五〇一	四・六〇	四・〇八	三・一五
昭和七年	三、五一七	一五、九四〇	七〇三	四八四	四・五六	四・四〇	三・〇三
昭和六年	三、五一七	一五、九六九	五七五	四二五	四・五四	三・六〇	二・六六
昭和五年	三、四八八	一五、八〇三	六四〇	五一一	四・五三	四・〇五	三・二三
昭和四年	三、五八〇	一五、四四七	六二五	四八六	四・三一	四・〇五	三・一五
昭和三年	三、五六〇	一五、二〇八	六一三	四九九	四・〇六	四・〇三	三・二八
昭和二年	三、六三三	一五、六八二	五六一	四九一	四・三一	三・五八	三・一三
昭和元年	三、五一七	一五、二四七	五五八	五〇五	四・一三	三・六六	三・三一
大正十四年	三、五六三	一五、三四〇	六六四	四七三	四・〇九	四・三三	三・〇八
大正十三年	三、五七四	一五、四六一	六〇三	五六九	四・一一	三・九〇	三・六八
大正十二年	三、五五九	一五、三七三	六一二	五一六	四・一一	三・九八	三・三六
明治四十二年	四、三八五	一七、八五六	六〇一	四七三	四・〇七	三・二七	二・六五

備考　現住人口は舊土人以外のものを控除し、舊土人以外の家族にある舊土人を加へたものであるが、後者に付ては此の全數とは云ひ得ない現狀にあること本文の如くである。

國有鐵道（狩勝國境附近）



殖民軌道

函館港（津輕要塞司令部許可濟）

第六章　交通及通信

拓殖上最も緊要なるは鐵道、道路及港灣等の設備を完うし、以て交通運輸の機能を敏活ならしむるにある。故に開拓使時代に於ても既に官船を備へ外國船を傭ひ、或は燈臺、臺竿を各所に設置し、又燈船を設くる等力を海運の發達に致すと共に、一面陸上交通の設備に力を盡し、道路の開鑿、驛遞及渡船の設置、郵便及電信の創設竝鐵道の敷設等に努めた。次で道廳時代に入りて益々是等設備の完成を圖り、明治二十九年先づ北海道鐵道敷設法發布せられ、同三十四年に至りては所謂十年計畫成り、同四十三年更に十五年計畫確立し、尙昭和二年より現行の二十年計畫成立するに至り、爾後鐵道、道路、橋梁、驛遞、渡船、航路及築港等運輸交通の機關著しく發達し、海陸の交通漸次脈絡を具ふるに至りて、今や鐵道は私設を加へて三千七百九十一粁八（昭和十年十二月）に達し、道路亦一萬六百九十四里餘（昭和十年三月）を算し、航路は遠く北千島に及ぶに至つた。然れ共本道は四面環海にして地域廣濶なるが故に更に之が計畫施設を進め、以て交通機關の速成を圖り拓殖の先驅たらしむるの必要切なるものがある。

(一) 鐵道

本道に於ける鐵道の敷設は幌内炭山の開坑に伴つて其の石炭輸送の爲、明治十三年十一月開拓使に於て札幌、手宮間三十五粁一の幌内鐵道の建設に創り、昭和十年末現在に於ては國有鐵道三千二百八十一粁、私設鐵道五百十粁八、計三千七百九十一粁八に達してゐる。而して其の敷設の經路は、初期の鐵道は何れも鑛產物の搬出を主眼として建設せられ、私設鐵道は大正九年鐵道省補助の外、更に拓殖費を以て補助の途を開いて以來頓に之が發達を見るに至つた。

今本道の鐵道と其の面積との比例を見れば、國有鐵道は面積一・七五方里に付き鐵道一粁、私設鐵道を加へ一・五二方里に付き鐵道一粁の割合であつて、之を内地府縣に於ける國有鐵道の面積一・三一方里に付き鐵道一粁の割合(昭和五年末現在)なるに略々接近しつゝあるが、尙開拓の餘地多きと資源の豐富なるを以て尙敷設を要するもの尠くないのである。昭和十年末に於ける國有鐵道及私設鐵道は左の如くである。

國有鐵道（昭和十年末現在）

線名	延長	摘要
函館線	七二四・九粁	函館本線、上磯線、瀬棚線、京極線、幌内線、歌志内線、手宮線、岩内線、幌加内線、札沼南線
室蘭線	二九二・四	室蘭本線、萬字線、夕張線
日高線	一二八・三	
留萌線	二一二・四	留萌本線、札沼北線、羽幌線
根室線	六九〇・四	根室本線、富良野線、士幌線、廣尾線、標津線
宗谷線	四二七・七	宗谷本線、北見線、天鹽線
名寄線	二一三・九	名寄本線、渚滑線、湧網西線、興濱南線
石北線	一八一・〇	
網走線	二四三・七	網走本線、相生線、湧網東線
釧網線	一六六・三	
計	三、八一一・〇	

内　昭和十年中に開業せるもの

線名	延長	區間	開業月日
天鹽線	一八・九四粁	幌延、天鹽間	六月三十日
興濱南線	三〇・〇〇	興部、雄武間	九月十五日

私設鐵道（昭和十年末現在）

線名	延長	區間	開業月日
湧網東線	一三・二四新	網走、卯原内間	十月十日
札沼南線	三六・三〇	浦臼、石狩當別間	十月三日
湧網西線	一六・五三	中湧別、計呂地間	十月二十日
日高線	二四・五六	日高三石、浦河間	十月二十四日
音更線	一〇・四八	上士幌、清水谷間	十一月二十六日
江差線	二一・四一	木古内、湯ノ岱間	十二月十日

會社名開業線	延長	區間	開業年月日	動力
定山渓鐵道	二九・九新	白石、定山渓間	大正七・一〇・一七	蒸氣及電氣
壽都鐵道	一六・五	黒松内、壽都間	同九・一〇・二四	蒸氣
北海道鐵道	一三八・六	邊富内、苗穗間	同一一・七・二四	同
十勝鐵道	六五・〇	帶廣大通、美生間外三線	同一三・二・八	同
河西鐵道	四〇・一	清水、鹿追間外三線	同一四・五・三〇	蒸氣及瓦斯倫
美唄鐵道	一〇・六	美唄、常盤臺間	同一三・一二・一五	蒸氣
雄別炭礦鐵道	四四・一	釧路、雄別炭山間	同一一・一・七	同
釧路臨港鐵道	八・七	東釧路、入舟間	同一四・二・二	同
夕張鐵道	五三・二	野幌、新夕張間	同一五・二・一	同
渡島海岸鐵道	九・四	森、砂原間	昭和二・一二・二五	同
膽振鐵道	一一・〇	京極、喜茂別間	同三・一〇・二一	同
北海道拓殖鐵道	五四・三	新得、上士幌間	同三・一二・五	蒸氣及瓦斯倫
洞爺湖電氣鐵道	八・六	虻田、床丹湖畔	同四・一・二三	電氣
北見鐵道	八・七	假止別、小清水間	同五・六・三	蒸氣
留萌鐵道	二二・一	惠比島、昭和間外二線	同五・七・一	同
計	五一〇・八			

備考　昭和十年末に於ける私設鐵道中
免許を受け未開業のもの十社十線　一九八粁
免許を申請中のもの二社二線　五二粁

而して昭和九年度末に於ける本道の國營鐵道營業粁數は其の延長三千百十九粁四で、之が停車場數四百四十五、車輛數は機關車五百十四、客車八百九十五、貨車二千三十、合計三千四百三十九輛に達する。又其の運輸成績は乘客二千五百七十五萬五千五百五十五人、發送貨物一千百九十二萬六千六百二十一噸であつて、之を前年度に比較するに、乘客百七十二萬一千四百七十人の增加を示し、發送貨物は凶作の影響を受け二十八萬六千

七百九十瓲の減少を示してゐる。

次に本道に於ける軌道は大正九年北海道拓殖鐵道補助法に依り、地方鐵道と共に補助を受くる事となるや續々建設せられ、昭和十年末に於て十六會社、其の延長二百粁七に達してゐる。

私設軌道（昭和十年末現在）

會社名	開業線	延長	區間	開業年月日	動力
江別町營軌道		〇・三	江別驛、江別川沿岸間	明治三八・一・一	人力
帝國電力軌道		一四・四	函館市內及函館、湯ノ川間	大正二・六・二九	電氣
札幌市營軌道		二三・五	札幌市內	同七・八・四	電氣
士別軌道		二一・六	士別、奧士別間	同九・六・一	瓦斯倫
早來軌道		一八・六	早來、幌內間	同一一・一・一八	瓦斯倫
沙流軌道		一三・〇	佐瑠太、平取間	同一一・八・二一	蒸氣
輕石軌道		八・三	輕川、花畔間	同一一・一〇・二八	馬力
旭川電氣軌道		二二・三	旭川、東川間、追分、旭山公園間	昭和二・二・一二	電氣
江當軌道		一一・一	江別、當別間	同二・八・一八	蒸氣及瓦斯倫
大沼電鐵		一七・二	大沼、鹿部間	同四・一・五	電氣
札幌郊外電氣軌道		一・八	圓山三丁目、札幌溫泉間	同四・六・三〇	電氣
根室拓殖軌道		一五・五	根室、齒舞間	同四・一〇・一六	蒸氣及瓦斯倫
旭川市街軌道		一二・八	旭川市內	同四・一一・三	電氣
湧別軌道		六・三	下湧別、丁寧間	同五・二・一二	瓦斯倫
余市臨港軌道		二・七	余市驛、濱中間	同八・五・九	蒸氣及瓦斯倫
計		一八九・四			

備考　札幌郊外電氣軌道は目下休業中である。

而して之が動力も時代の趨勢に伴ひ漸次電力化され、地方鐵道にありては定山溪鐵道及洞爺湖電氣鐵道、軌道にありては札幌市營軌道、帝國電力軌道、旭川電氣軌道、大沼電鐵、札幌郊外電氣軌道及旭川市街軌道の八社に及んでゐる。

更に道路の完成と共に自動車は重要なる交通機關となり、本道に於ても急激なる發達を遂げ、昭和九年末に於ては乘用車千四百五十臺、貨物用千百五十五臺、合計二千六百五臺で、之を昨年に比較するに乘用車に於て七十八臺の減、貨物用に於て二百四十九臺の增、合計百七十一臺の增加である。

更に本道の交通機關として特記すべきは殖民軌道及森林鐵道であつて、殖民軌道は拓殖

の促進上新開地方の物資輸送の爲、簡易なる軌道を敷設せるものであり、大正十三年根室國厚床、中標津間に試驗的敷設を爲したるを初とするが、現在に於ては道内に於て移住民の多數住居せる所には殆ど敷設され、其の延長四百五十一粁に及んでゐる。又森林鐵道は本道國有林經營上官行斫伐製品輸送の爲、鐵道及軌道を敷設されたものであつて、其の延長は三百三十七粁に及び、其の餘力を以て民間物資輸送の需に應じ沿線住民の便宜を計つてゐる。

殖民軌道（昭和十年末現在）

線名	區間	延長
根室線	中標津、標津間	三三・九粁
枝幸線	小頓別、枝幸港間	三五・二
西別線	西別、中西別間	一六・一
計根別線	中標津、計根別間	一六・三
茶内線	茶内、奥茶内間	一三・〇
圓朱別線	中茶内、圓朱別間	九・二
標茶線	標茶、計根別間	三八・六
久著呂線	塘路、上久著呂間	二八・八

線名	區間	延長
雪裡線	新富士、中雪裡間	二八・九
幌呂線	下幌呂、上幌呂間	一五・五
弟子屈線	弟子屈、虹別間	二二・〇
上春別線	西春別、上春別間	九・七
居邊線	高島、下居邊間	一八・八
斜里線	斜里、チプトマリ間	一七・九
寒別線	問寒別、上問寒別間	一三・八
幌延線	幌延、下エペコロベツ間	一三・八
沼川線	沼川、下エペコロベツ間	二一・一
幌別線	幌別六線、シビウタン間	一二・六
厚床線	厚床、風蓮間	七・一
藻琴線	藻琴、東藻琴間	一五・一
貫氣別線	荷負、上貫氣別間	一三・四
矢臼別線	西別、矢臼別間	五・八
ニウプ線	美深、ニウプ原野二十五線間	二一・六
忠類線	川北、古多糠間	八・九
中春別線	春別、上春別三十四線間	八・四
眞狩別線	太、眞狩別間	一三・〇
計		四五八・五

森林鐵道及軌道（昭和十年末現在）

區分	線名	區間	延長
鐵道	落合線	落合驛、シーソラプチ川上流間	一六・三六新
〃	足寄線	足寄驛、上足寄間	六二・九七
〃	斗滿線	淦別、斗滿原野間	二五・八三
〃	淦別線	淦別、上淦別間	二三・〇一
〃	置戸線	置戸驛、士居常呂間	六一・四四
〃	津別線	津別驛、津別川上流間	三三・七三
〃	溫根湯線	留邊藥驛、武華五十六號線間	四六・七八
〃	武利線	丸瀨布驛、上武利十一號線間	三四・七六
軌道	上生田原線	上生田原驛、奥生田原間	二・六一
〃	ウッナイ線	下頓別驛、ウッナイ原野間	一三・三八
計			三七・八七

備考　延長は支線を含む。

(二) 道路　昭和十年三月三十一日現在の道路延長は一萬六百九十四里餘であり、内開拓使以來國費を以て開鑿せるものは明治三十三年度迄に於て千九十里、明治三十四年度以降同四十二年度迄の所謂拓殖十年計畫に依りしもの千百八十三里、明治四十三年度以降

拓殖道路（十勝國芽室原野）

驛遞所（石狩國幌加内村）

旭　　橋（旭川市）

昭和元年度迄卽第一期拓殖計畫に依るもの千四百七十一里、而して昭和二年度以降に於て六百九十里、通計四千四百三十四里であつて、他は地方團體又は私人の開鑿に依るもの及踏分道路である。飜て交通の狀態を見るに各地方の開拓と生產業との發達に伴つて物資の集散、旅客及移民の來往等が逐年頻繁を加へつゝあるにも拘はらず、郡部にあつては根室支廳管內の一方里當道路延長二十四町の甚しいのを除いても平均一方里に付いて二里一町に過ぎず、市部を入るゝ時は本道道路の面積に對する割合は今尙一方里に付き僅かに二里三町に過ぎぬ狀態であり（千島を除く）、將來拓殖の進展と共に一方里當約三里としても二萬里に達せしむる必要がある。

而して從來の道路は所謂拓殖道路であり、單に延長を主とし簡單なる工法に依つて築造せられたものであるから、新設と相俟つて之等道路の改修を要すべきもの尠くはない。加之急激なる自動車の發達に伴つて樞要なる地區に達する國道及地方費道等の幹線道路は、運輸經濟上將又軍事上極めて重要なるを以て、漸次自動車道路の完成に努めねばならぬ。要するに開拓途上にある本道の道路延長は左の如くである。

道路延長調（昭和十年三月末現在）

市又は支廳名	國道		地方費道		準地方費道		市道		拓殖費支辨町村道		町村費支辨町村道		計	
	里	町	里	町	里	町	里	町	里	町	里	町	里	町
札幌	一	二四	一	二〇		三一	五	一七					三	二〇
函館	一	三		一四	一	三〇	三	二					三	二
小樽	二	一二		一五		一〇	一	一八					三	二
室蘭	二	二〇	三	五			二	一三					四	一
旭川		一五	二	〇		一五	一	一六					三	一
釧路			四	二四	三	一四	一	一六					四	一
帶廣			四	〇四				四一					四	一
石狩	二	三五	二四	三									二四	三
空知	三	〇七	四四	〇三	六三	一六							五	一九
後志	三八	一六	三	四	九六	一六							四	一八
渡島	三〇	〇七	三五	三	六五	二八							四	一八
檜山			九	八〇	六四	七七							一	一九
上川	四	三一	四	三	六五	三〇							四	一八
宗谷			六〇	一一	一	一〇							一	一八
留萌			五一	二五	一九	二八							二	一七
計	一五	二一	一二	一〇	三	一〇	一	二〇					三五	一〇

備考　一方里當延長一里三〇町五三間（千島を除く一方里延長二里三町三五間）

網走														
膽振	二六	〇九	二六・一〇	二九	〇一	〇六・三	三九	一三	五七・三	一九六	〇四	一六・〇七	七〇	三三
日高				四一	〇九	三一・一五	二一	一八	一六・一五	一九	一七	一九・二三	三三	二五
十勝				七九	一九	一二・八〇	七五	〇八	二〇・四三	一九六	一七	一九・六六	七七三	二八
釧路國				八三	一四	二六・五一	二九	一七	五四・三七	一九六	一七	一九・六六	七、八〇七	三八
根室				三三	三四	三四・三三	一〇六	二七	一一・六八	一九六	一七	一九・六六	七、八〇七	三八
計	二五一	二	五一・四一	七三	〇〇	五一・六四	八三三	一〇	二七・〇四	二四四	一七	〇六・六一	一〇、九九四	三三

（三）**驛遞所及渡船場**　驛遞所は本道未開僻陬地方の交通に利便を與へ、行旅者をして不便なからしむる爲の交通補助機關として特設せらるゝものである。卽ち本道驛遞所の起源は古く松前藩時代の創設に係り、開拓使時代に官營制度に依り驛舍は國費を以て建設し以て旅人の宿舍に當て、官馬を備へて交通の用に供し、且驛遞取扱人に對しては手當を支給することゝし、現在も略々其の制度を踏襲してゐるものである。而して驛遞所設置の目的が上述の通りであるから、其の地方の進展に從ひ宿業の開設及交通機關の完備等の爲に廢止さるべきは勿論であるが、依然本道に於ては奥地開發上缺くべからざる重

要機關たるを免れない。

渡船場は道路の補充的施設であつて、本道の河川は其の數頗る多く、殆ど太古自然の儘で其の河身變轉常なく、加ふるに拓殖財源の關係上橋梁の不備不足を免れない爲、渡船場を設置して旅客の通行及貨物の運搬等を行ひ交通上の利便を圖つてゐる。其の數は昭和十年末に於て驛遞所は百九十八箇所、渡船場は官設のもの二十五箇所及市町村經營に係るもの四百箇所である。

(四) 港灣と出入船舶　本道に於ける現在商港の主要なるものは、函館、小樽、室蘭、釧路、留萌、網走、稚內及根室の八港であつて、今其の狀勢を見れば函館港は本道の海産市場として益々殷盛を極め、小樽港は主として農產物及木材の市場として近年特に異常の發達を來し、室蘭港は石炭積出港として永く其の使命を有し、釧路港は木材、石炭及雜穀の輸出港、根室港は水產物の集散港とし、又網走港は北見沿岸唯一の避難港として、稚內港は樺太との連絡港、留萌港は石炭積出港として進展し、各特有の價値を顯はしてゐる。昭和九年中船舶の出入せる港灣數は內國航路百四十、外國航路五であり、其の入港噸數內國航路は三十一萬六千六百八十九隻、同噸數二千四十二萬五千三百九十一噸、外國航路は八百四十五隻、同噸數二百二十二萬八千七百八十八噸であつて、總計入港船舶三十一萬七千五百三十四隻、同噸數二千二百六十五萬四千百七十九噸を算してゐる。之を海運界に好況を齎せる大正九年と比較しても入港船舶數に於て二十七萬七千二百七十五隻、噸數に於て千二十五萬七千三百六十五噸の增加を爲し本道海運界の發展を示してゐる。然るに昭和八年に比較するに四萬二千百四十五隻の增加であるが、二十萬九千三百八十八噸の減少となつてゐる。之は一般經濟界の不況に伴ひ海運界も不振に陷り大型船舶を繫留して小型船舶を多く運行しつゝある狀勢を示し、且九年度に於ては凶作災害等の影響を受けた結果稍々劣勢となつたが、概して本道產業界の發展と海運界の進展を物語るものであつて、將來港灣修築設備の竣成と相伴つて益々繁盛を極むるであらう。

入港船舶數

年次	內國航路			外國航路			計		
	隻數	登簿噸數		隻數	登簿噸數		隻數	登簿噸數	
昭和九年	三一六、六八九隻	二〇、四二五、三九一噸		八四五隻	二、二二八、七八八噸		三一七、五三四隻	二二、六五四、一七九噸	
昭和八年	二七四、六九三	二一、四三、三六〇		六九七	一、七二〇、二〇七		二七五、三八九	二二、八六三、五六七	

年次	內國航路			外國航路			計		
	隻數	登簿噸數		隻數	登簿噸數		隻數	登簿噸數	
昭和七年	二四六、八八四	一九、六一六、五六六	噸	七四八	一、八三二、四九九	噸	二四七、六三二	二一、四四九、〇六五	噸
昭和六年	二三八、〇七四	一九、六二一、八八七		八七五	一、九七三、〇三四		二二八、九四九	二一、五九四、九二一	
昭和五年	二一一、二九	一九、六五五、一三三		一、一一九	二、四八九、五五二		二一二、二四八	二二、一四四、六七五	
昭和四年	一七三、〇八四	二〇、五〇四、一九八		一、六〇四	二、八六一、九九〇		一七四、六八八	二三、三六六、一八八	
昭和三年	一三七、〇七一	二〇、四四二、一四二		一、三三一	二、三三〇、〇五三		一三八、四〇二	二三、七七二、一九五	
昭和二年	一七二、一七一	二一、一五五、七八六		一、二四一	二、〇四三、七五二		一七三、四一二	二三、一九九、五三八	
昭和元年	九六、〇九三	二一、三〇六、九〇八		一、二一七	二、〇三一、七九四		九七、三一〇	二三、三三八、七〇二	
大正十四年	八〇、七八	一八、六九六、九〇八		一、一〇二六	一、三四九、四〇九		八一、八〇四	二〇、〇四六、三一七	
大正十三年	八七、八九二	二〇、五三八、七二〇		一、一五九	一、六七〇、〇三二		八九、一五一	二二、一九八、七五二	
明治四十二年	三八、一二三	一三、四八八、五一五		四六二	三九九、七六五		三八、五八四	一三、八八八、二八〇	

(五) **補助航路**　現今本道に於ける國庫補助航路は本道沿岸の全周を七線十六區間に分ちて受命會社をして定期航海を爲さしめ、陸上交通機關の短を補ひ併せて治く離島との交通運輸の利便を圖つてゐる。

補助航路一覽表（昭和十年三月末現在）

線名	區間	航海回數	寄港地	受命會社
函館、小樽線	函館、小樽間	二〇回	福島、江良町、江差、乙部、鮫柱、熊石、久遠、青苗、釣懸、瀬棚、壽都、岩内、余市、青森、上ノ國、相沼内、貝取澗、太櫓、千走	藤山海運株式會社
函館、擇捉線	函館、藥取間	六四	釧路、根室、入里節、具谷、丁寧、年萌、内保、留別、紗那、別飛、色丹、小田萌、白糠泊、乳呑路、小越、庶野、穾留、廣尾、青森、大津、厚岸、霧多布、八ノ戸、浦河、様似、冬島、幌滿、上古丹、油駒、室蘭、青森	金森商船株式會社
	函館、擇捉間	三六	釧路、根室、古釜布、乳呑路、色丹、内保、留別、紗那、紗萬部、別飛、厚岸、霧多布、羅臼、茂世路、青森	
函館、千島間	函館、占守間	一四	加熊別、鯨灣、荒川、阿頼度、村上岬、片岡灣、村上灣、桑山、摺鉢、千歳灣、釧路、根室	近海郵船株式會社
	根室、占守間	一七	鯨灣、加熊別、柏原灣、桑山、摺鉢、南浦、北浦、片岡灣、村上灣	
函館、根室線	函館、根室間	二〇	釧路、厚岸、霧多布、七尾、伏木、新潟、船川、青森、羅臼、七尾、伏木、新潟、船	島谷汽船株式會社
函館、鹿部線	函館、鹿部間	八〇	尻岸内、古武井、椴法華、尾札部、臼尻、根田内、古部、木直、川汲	渡島商船株式會社
小樽、稚内線	小樽、稚内間	六八	鬼脇、仙法志、沓形、鴛泊、香深、船泊、留萌、枝幸、乙忠別、幌内、雄武、紋別、	島谷汽船株式會社
	小樽、燒尻間	六八	敎賀、鬼脇、仙法志、沓形、鴛泊、香深、船泊、留萌、伏木、留萌、天寶、初山別、風連別、遠別	藤山海運株式會社
	小樽、增毛間	二〇	增毛、留萌、天寶、初山別、風連別、遠別、厚田、濱益、幌、雄冬	適澤合資會社

線名	區間	航海回數	寄港地	受命者
根室近海線	根室、色丹間	三〇	水晶、勇留、志發、相泊、多樂、ノトロ、アナマ、サキムイ	根室汽船株式會社
	根室、羅臼間	三三	春刈古丹、知丹別、標津、忠類、薫別	
	根室、白糠泊間	三五	東沸、古釜布、植内、乳呑路、禮文礁	
	根室、泊間	三七	古丹消	

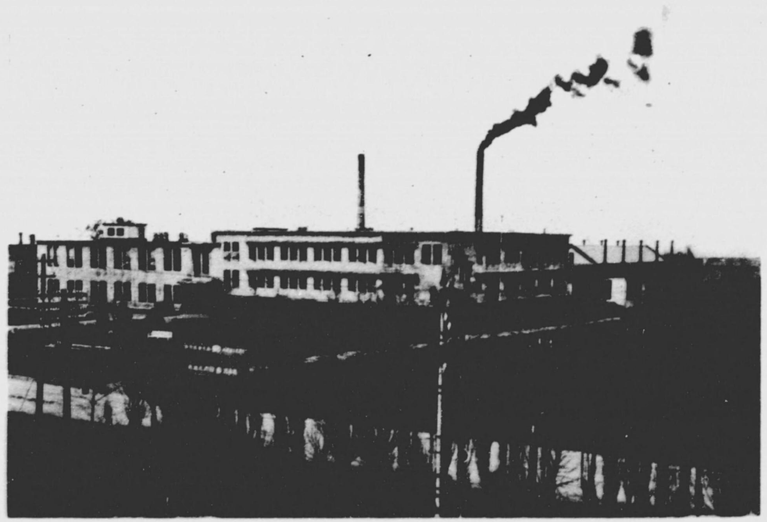
而して昭和九年度の航海成績は航海回數八百二十回、總航海延長三十六萬六千八十三海里、平均一航海四百四十餘海里に及び、其の運搬せる旅客三萬二千五百九十七人、貨物十九萬四千四百八十二噸、郵便物四千八百八十三個を輸送した。

(六) 通信 昭和九年度末に於ける本道の通信機關は遞信局一、郵便局一等七、二等十四(函館、落石、幌莚無線電信局及花咲電信局を含む)、特定三等三、普通三等六百六十五、郵便取扱所五十二、電話所五、電報取扱所二百十五合計九百六十二であり、同年度中取扱に係る通常郵便物發着總數四億一千九百四十三萬六千百九十三通、小包郵便物七百八十九萬四千七百五十七個、電信九百六十五萬五千七百二十三通であつて、前年に比し何れも增加の趨勢を示してゐる。

北海道農事試驗場 (札幌市外琴似村)

北海道林業試驗場 (江別町野幌)

北海道水産試験場（余市町）



北海道工業試験場（札幌市外琴似村）

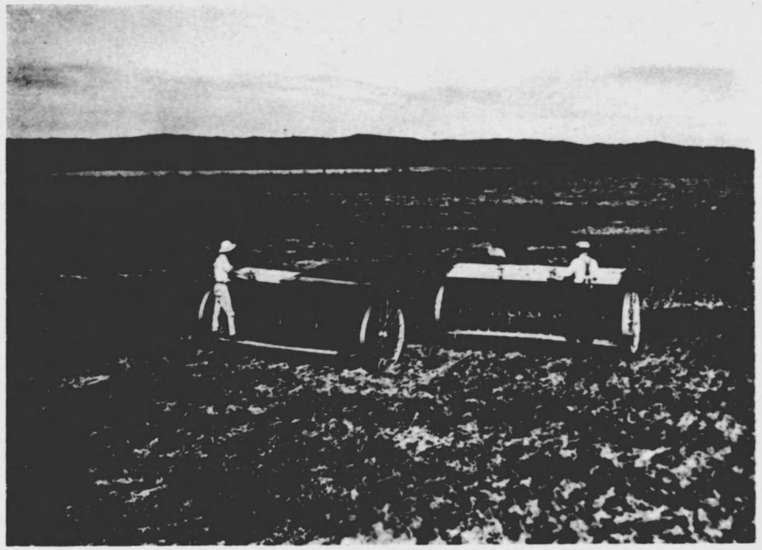
(一)　**産業の概況**　本道は海に陸に無盡の富源を藏し、海岸線の延長千三百五十五里に亙り魚介海藻の棲息繁茂は世界三大漁場の一と讃へられ、大小河川の流域は廣濶なる平原を成し、地味肥沃にして農耕適地約百五十八萬町歩を算し、山には千古未だ曾て斧鉞の入らざる大天然林を控へ、之が面積は實に六百七十三萬町歩を擁して蓄積材石二十二億餘を有し、且金及石炭を始め各種鑛物の埋藏も亦豐富で夙に北門の寶庫と稱せられて來た。而して此等の富源を基礎として立てる本道産業の趨勢を顧みる時に一張一弛があつたとは云へ概して長足の進歩を爲し、殊に歐洲戰時財界の好況に乘じたる各種工業の勃興と農産物の海外輸出の激增とは駢行翼進し、全く既往の面目を一新したる感がある。即ち其の産額に付て之を見るに、其の間物價指數の高低に依つて異動がない譯ではないが、大正六、七年を期して以後一新紀元を劃せるものと云ひ得る。但し昭和元年に於ける減額は米の凶作及一般財界の不況に基因し、昭和三年の減額は主として水産業の不漁に基いてゐる。尙昭和五年の生産額は四億四千萬圓にして前年に比し一億七百餘萬圓の

減少を來したるは、打續く財界不況の影響を受けて一般物價の低落せるに依るものであり、更に昭和六、七年度は僅かに三億二、三千萬圓を算するに過ぎず、十數年來になき低額を示すの悲境に陷つたが、之は二箇年に亙る未曾有の水害及凶作に因る一時的現象に過ぎず、漸次財界好轉し昭和八年は農作物の豐作其他の好況に惠まれ總生產額約五億圓に達し、更に九年には五億三千四百七十餘萬圓に達するの盛況を見るに至つた。

斯の如く近年に於ける本道の產業も本道拓殖計畫樹立の明治四十三年に於ける六千七百餘萬圓に比し數倍の生產總價額を擧げてゐるが、大正八年に於ける生產總價額六億二千益餘萬圓の最高記錄を隔たること遠く、共に現今の經濟界不況と天災とに禍され爾來々不振の狀態に在るものであるが、昭和九年は又も道內の大半に及ぶ冷害凶作に見舞はれたるにも拘はらず、對外爲替關係の有利なる條件に因り本道特產物の海外進出は固より、國內市場に於ても金、石炭、木材、乳製品、雜穀及水產物の消流狀態著しく躍進を示し、玆に本道の產業界は積年の愁眉を開いて前途を翹望するに至つた。殊に昭和二年度より更新されたる第二期拓殖計畫の遂行後に於て六百萬の人口を抱擁し十八億圓の生產を擧げ、本道をして名實共に物資の一大供給地たるの使命を全うせんとする企圖は今後大いに期待すべきである。今各生產物發達の趨勢を示せば左の如くである。

産業別生産額調

年次	農産	畜産	林産	水産	鑛産	工産	合計	平均一月當	平均一人當
	円	円	円	円	円	円	円	円	円
昭和九年	二三、七四三、九四四	一三、七三七、一二六	三一、四三七、一八	一〇、九八二、七二〇	六七、四一一、二八八	一九、三八三、七一〇	一四五、四一〇、〇二六	一、〇三〇	一八八
昭和八年	一四、二三七、一二三	二、三三五、四一九	二四、四三三、八一二	三二、二六九、七三五	三三、七九二、〇二八	四九九、九三四、九六九	一七五、七三六、八四五	九七四	一七五
昭和七年	六二、八四三、九八三	一〇、六四九、九〇三	一四、七四七、〇四一	一九、九九一、一九七	三七、〇三二、九七一	四九九、九三四、九六九	一七五、七三六、八四五	六四三	一二七
昭和六年	五九、八五一、九四〇	一〇、六〇一、七一四	一四、七四七、〇四一	二〇、六四九、九〇三	四四、九五七、〇四一	四九九、九三四、九六九	一七五、七三六、八四五	八六五	一五七
昭和五年	一二四、六九六、四八二	一三、三〇六、〇四九	二八、四三七、四三三	二〇、六四九、九〇三	五六、九六〇、七四三	四四〇、九二〇、七二一	二〇四、〇四〇、三四一	一、一四一	二一四
昭和四年	一三〇、一七九、四〇六	一三、二四〇、四〇九	二七、二三六、九三五	三二、九六八、〇四九	五六、一六一、四三九	四三六、九六〇、七七〇	二〇七、二三六、九三五	一、一二七	二一〇
昭和三年	一三七、四四六、九四一	一三、八〇〇、〇四二	二八、〇一六、二六二	三四、九九九、四八六	五五、九九九、四八六	四五七、〇四二、三〇一	二一六、三九九、〇四八	一、一六八	二一九
昭和二年	一三一、六六〇、二七九	一三、八〇〇、〇四二	二八、〇一六、二六二	三四、九九九、四八六	五五、九九九、四八六	四五七、〇四二、三〇一	二一六、三九九、〇四八	一、一六八	二一九
昭和元年	一一四、一二七、八七九	一三、三五三、〇三一	二九、四三五、二〇六	三四、四七五、二〇六	五四、九五七、〇六一	四四八、一二三、九六五	二一〇、六九六、八九八	一、一九五	二二四
大正十四年	一七五、九九八、七四三	一三、四七五、二〇六	二九、四三五、二〇六	三四、四七五、二〇六	五四、九五七、〇六一	四四八、一二三、九六五	二一〇、六九六、八九八	一、一九五	二二四
大正十三年	一九五、〇八二、三八〇	一四、三〇六、八二九	二九、四三五、二〇六	三四、四七五、二〇六	五四、九五七、〇六一	四四八、一二三、九六五	二一〇、六九六、八九八	一、一九五	二二四
大正十二年	一三六、一三〇、五七八	一四、三〇六、八二九	二九、四三五、二〇六	三四、四七五、二〇六	五四、九五七、〇六一	四四八、一二三、九六五	二一〇、六九六、八九八	一、一九五	二二四
大正十一年	二一一、一八四、二一八	一四、三〇六、八二九	二九、四三五、二〇六	三四、四七五、二〇六	五四、九五七、〇六一	四四八、一二三、九六五	二一〇、六九六、八九八	一、一九五	二二四
大正十年	一五四、八六〇、三六六	一四、三〇六、八二九	二九、四三五、二〇六	三四、四七五、二〇六	五四、九五七、〇六一	四四八、一二三、九六五	二一〇、六九六、八九八	一、一九五	二二四
大正九年	二三〇、八五四、〇三三	一四、三〇六、八二九	二九、四三五、二〇六	三四、四七五、二〇六	五四、九五七、〇六一	四四八、一二三、九六五	二一〇、六九六、八九八	一、一九五	二二四
大正八年	一九四、一三二、九二一	一四、三〇六、八二九	二九、四三五、二〇六	三四、四七五、二〇六	五四、九五七、〇六一	四四八、一二三、九六五	二一〇、六九六、八九八	一、一九五	二二四
大正七年	一四八、八九六、五四四	一四、三〇六、八二九	二九、四三五、二〇六	三四、四七五、二〇六	五四、九五七、〇六一	四四八、一二三、九六五	二一〇、六九六、八九八	一、一九五	二二四
明治四十二年	三〇、〇八四、二三〇	一、三五六、六六三	一、三五六、六六三	一、三五六、六六三	一、三五六、六六三	一、三五六、六六三	一〇、三五九、六六三	一、一九五	二二四



機械力による小麥播種

トラクター耕耘

(二) 農　業

(一) 概況　古來本道の農業は地理的關係と自然的條件に依り海主陸從たるを免れなかつたが、明治二年本道開拓の當初より農業を以て拓殖の中樞と爲し、爾來拓殖の進捗と共に其の發達は極めて顯著なるものがあり、耕地面積及農家戸數に於ても比年增加を示し、殊に歐洲大戰當時は豌豆、菜豆及澱粉等の本道特產物は海外に於ける需要を激增し、爲に價格奔騰して大正八年度の如きは農產物總價額は實に一億九千四百萬圓を超え未曾有の好況を齎したが、戰後は其の反動として沈衰の狀況を續け、殊に昭和五年以降同七年に亙る三箇年間は其の減少の程度急激なるものがある。之は世界經濟界の不況益々其の深刻の度を加へたる事と、更に昭和五年は全國的大豐作の爲所謂豐作飢饉の奇現象を呈し農產物價額の低落したるに依る。昭和六年は天候不順による稀有の大凶作で例年の半額以下の大激減を示し、翌七年には又も打續く未曾有の水害竝凶作の慘害に遭遇し、全道を擧げて大困厄の悲境に呻吟し農產額は甚しく低減を示した。然し乍ら昭和八年に至り氣候頗る順調に經過せる爲農產物總價額は一億四千四百餘萬圓に達した。然るに九、十兩年は又も冷害凶作の悲運に

遭遇したが九年は前年に比し千八百五十萬圓の減少に止まるを得た。之は本道農業の特産物たる菜豆類、青豌豆、除蟲菊、薄荷及澱粉其他雜穀は對外爲替安の好條件に乘じたる海外進出に基因するもので最近の傾向として特筆すべき事象である。此の事例を以てするも今後氣候平順を持續し尙經濟界順調に推移せば生產額の增大すべきは疑のない所である。而かも未成の農耕適地尙六十四萬餘町歩を有し、移民を收容するの餘地多く、本道農業の前途は洵に洋々たるの感がある。

而して其の地質は概して肥沃であるから穀類を始め果樹及蔬菜等一として栽培に適せざるものなく、其の重要作物は米、麥類、馬鈴薯、菜豆類、大小豆、豌豆、玉蜀黍、甜菜、除蟲菊、薄荷、玉葱及林檎等であり、就中甜菜奬勵に基く甜菜栽培の勃興は斯界に一新機軸を開き、昭和十年に於て作付反別を增加し、著々北方特殊農業の使命を果しつゝあるものである。他面其の氣候風土は飼料作物に好適し九十七萬二町歩と云はれる廣大な放牧適地を擁するを以て畜類の飼養に適し、牛馬、緬羊を始め各種の家畜を配して農業經營を多角化せしめ得るものである。本道農業經營の特徵とする所は地積廣濶にして一戶當耕地面積廣く、其の經營は概して大農的經營法

に依り、勞力の調節を計る爲耕馬を利用し機械力を活用する等、府縣農業に比すれば遙に進歩的經營に據つてゐる。今本道農業を概說すれば左の如くである。

(二) 耕地面積　昭和九年末現在の本道耕地の總面積は九十四萬一千九百五十八町歩で、其の內水田は二十一萬三千二百九十七町歩、畑は七十二萬八千六百六十一町歩を占め、之を前年に比較すれば水田に於ては凶作等の影響により四十町歩餘の增加に過ぎないが、畑に於ては一萬三千百七十二町歩の增加を示して居る。而して現在耕地面積の本道全面積に對する割合は一割、其の農耕適地に對しては約六割、又農家一戶當耕地面積は四町七反四畝、之を府縣の一戶當九反三畝に比すれば約五倍に當つてゐるが、之は本道に於ける拓地殖民の特殊的事情に依るもので、他面本道農業の彈力性を示すに足るものである。

尙本道に於ける將來の農耕適地は本道總面積八百九十五萬一千四百八十二町の一割七分即ち百五十八萬町歩、內水田四十五萬町歩、畑百十三萬町歩である。

而して其の開墾狀況を見るに、拓殖の進展と共に逐年耕地面積の增加を示してゐるが、就中水田面積に於て特に著しく、最近數年間を除いては每年約一萬町歩內外を增加せる狀況にある。此の如く水田面積が極めて多く增加して來たのは、大正九年以來灌漑溝及排水溝の幹支線掘鑿に對して四割の補助費が交付され、更に昭和元年に至り五割に改め、同時に造田費に對しても四割以內の補助金が交付され、造田助成の方策が講ぜられた事に基くものであるが、他面農事試驗場に於て耐寒性の水稻品種育成に力を注ぎ著々其の效果を擧げ栽培適地が擴張されたるに因るものである。畑は大正九年に至る迄は逐年一萬町歩內外の增加を持續して來たが、大正九年を一轉機として遽かに其の數を減じたのは前記水田助成の結果水田專營の農家數の增加したるに依る。然るに最近打續く天災に累せられ凶作の慘害に遭ひ水田農業萬能の氣風は漸く反省せられ、地方の特異性を考慮し漸次畑面積も順調に增加しつゝある現狀である。殊に昭和九年度よりは本道特殊土壤たる酸性土壤及泥炭地等の積極的改良を促す爲、從來施行し來れる石灰の購入補助を廢し、官營事業として石灰の生產を圖り實費を以て農家に配給し其の目的を達せんとするもので、今後本事業の徹底は農耕地の增加竝作物增收を促すものとして期待される。今最近の田畑開墾狀況を表示すれば左の如くである。

本道耕地面積

年次	田 作付反別	田 不作付反別	田 計	畑 作付反別	畑 不作付反別	畑 計	合計	農家一戸當耕地面積
	町反	町反	町反	町反	町反	町反	町反	町反
昭和九年	二一〇、四四七・六	二、八四九・一	二一三、二九六・七	七〇二、〇四五・八	二六、六一五・〇	七二八、六六〇・八	九四一、九五七・五	四・七
昭和八年	二一〇、〇八〇・四	三、一七六・〇	二一三、二五六・四	六九二、一二三・五	二三、三六五・六	七一五、四八九・一	九二八、七四五・五	四・六
昭和七年	二〇九、〇四八・七	三、三三八・三	二一二、三八七・〇	六五九、九一八・〇	二九、三〇一・六	六八九、二一九・六	九〇一、六〇六・六	四・六
昭和六年	二〇四、三七七・五	三、九五四・六	二〇八、三三二・一	六三六、〇四四・〇	二七、一八六・四	六六三、二三〇・四	八七一、五六二・五	四・四
昭和五年	一九八、〇八六・五	三、七九四・六	二〇一、八八一・一	六〇九、五五一・六	二七、三七八・六	六三六、九三〇・二	八三八、八一一・三	四・五
昭和四年	一八六、九三六・六	四、〇一四・七	一九〇、九五一・三	五九七、〇七七・〇	三〇、六六八・〇	六二七、七四五・〇	八一八、六九六・三	四・四
昭和三年	一七一、〇七五・九	三、三九八・九	一七四、四七四・八	五八一、七〇七・六	五一、三一九・三	六三三、〇二六・九	八〇七、五〇一・七	四・六
昭和二年	一五五、六八三・〇	三、二三一・一	一五八、九一四・一	五七〇、九三一・四	五九、五九四・〇	六三〇、五二五・四	七八九、四三九・五	四・五
昭和元年	一四三、〇六八・五	三、五五九・二	一四六、六二七・七	五七三、七八三・七	六三、八五七・七	六三七、六四一・四	七八四、二六九・一	四・五
大正十四年	一三二、二〇八・〇	三、八〇三・二	一三六、〇一一・二	五七五、二八一・二	七五、〇四四・四	六五〇、三二五・六	七八六、三三六・八	四・六
大正十三年	一二三、四八六・三	三、八六五・〇	一二七、三五一・三	五八五、二二八・九	八六、二四一・〇	六七一、四六九・九	七九八、八二一・二	四・七
大正十二年	一二四、二二九・一	三、九一〇・七	一二八、一三九・八	六三六、九三四・七	七一、三八二・一	七〇八、三一六・八	八三六、四五六・六	四・八
大正十一年	一〇二、九六五・三	二、三一七・三	一〇五、二八二・六	六八三、〇一九・三	五九、七二一・〇	七四二、七四〇・三	八四八、〇二二・九	四・八
大正十年	九〇、四三九・七	二、九一五・二	九三、三五四・九	七〇七、六一三・九	五三、六〇八・五	七六一、二二二・四	八五四、五七七・三	五・三
大正九年	八二、〇二三・六	一、八二二・六	八三、八四六・二	七〇六、二八三・七	四八、九四〇・六	七五五、二二四・三	八三九、〇七〇・五	五・〇
大正八年	七二、〇二二・七	一、八五六・五	七三、八七九・二	六九五、六三二・一	四六、六一七・八	七四二、二四九・九	八一六、一二九・一	四・三
大正七年	六七、四〇〇・六	三、四七四・一	七〇、八七四・七	六六四、一四八・六	六〇、一六八・二	七二四、三一六・八	七九五、一九一・五	四・三
明治四十二年	三二、八六五・四	三、五六七・一	三六、四三二・五	四三〇、四九二・八	五一、〇六三・七	四八一、五五六・五	五一七、九八九・〇	三・五

田地擴張及潰廢面積

年次	耕地面積	前年に比し増減	年內擴張面積 開墾	年內擴張面積 畑より變換	年內擴張面積 其他	年內擴張面積 計	年內減地面積 潰廢地	年內減地面積 畑に變換	年內減地面積 其他	年內減地面積 計
	町反	町反	町反	町反	町反	町反	町反	町反	町反	町反
昭和九年	二一三、二九六・七	四〇・三	一、〇五〇・六	一、四三三・〇	一、一六三・五	三、六四七・一	四〇三・六	二、三〇二・二	九〇一・〇	三、六〇六・八
昭和八年	二一三、二五六・四	八六九・四	一、〇二六・九	一、四九八・九	二、一七六・九	四、七〇二・七	八五〇・三	二、八四一・二	一四一・八	三、八三三・三
昭和七年	二一二、三八七・〇	四、〇五四・九	一、九四〇・八	三、五三八・六	五五〇・七	六、〇三〇・一	八三六・八	六三六・一	五〇二・三	一、九七五・二
昭和六年	二〇八、三三二・一	六、四五一・〇	二、〇七八・二	五、六八八・九	六一四・一	八、三八一・二	七二五・三	八〇五・四	三九九・五	一、九三〇・二
昭和五年	二〇一、八八一・一	一〇、九三九・八	二、六二九・八	八、五三九・九	八三九・四	一二、〇〇九・一	六八五・〇	四三九・六	四四・七	一、〇六九・三
昭和四年	一九〇、九五一・三	一六、四六六・五	四、七五三・〇	一〇、四二九・九	四、六八四・一	一九、八六七・〇	六九四・二	五七〇・一	二、一三六・二	三、四〇〇・五
昭和三年	一七四、四七四・八	一五、五六〇・七	四、九五二・二	一〇、〇四〇・六	一、三一三・五	一六、三〇六・三	三六五・九	二六〇・五	一一九・二	七四五・六
昭和二年	一五八、九一四・一	一二、二八六・四	二、七二四・八	八、五六六・四	一、九二七・二	一三、二一八・四	三七八・一	一八〇・八	三七三・一	九三二・〇
昭和元年	一四六、六二七・七	一〇、六一六・五	二、九一九・七	八、二七三・五	九五二・〇	一二、一四五・二	一、〇八八・八	八八・〇	三五一・九	一、五二八・七

備考　一、年內擴張面積中其他は埋立及干拓、荒地復舊、地目變換及實測の結果に依るものである。

二、年內減地面積中潰廢地は宅地、工場敷地、道路、鐵道軌道、河川及水路敷地、荒地、地類及地目變換に依る土地である。其の他は實測の結果に依るものである。

畑地擴張及潰廢面積

年次	耕地面積	前年に比し増減	年内擴張面積 開墾	田より變換	其他	計	年内減地面積 潰廢地	田に變換	其他	計
昭和九年	七二八、六六〇・八町反	一三、一七一・七町反	二四、二二一・六町反	二、三〇二・二町反	一、四六〇・七町反	二七、九七四・五町反	一八、六二〇・二町反	一、四三三・〇町反	四、七四九・六町反	一四、八〇二・八町反
昭和八年	七一五、四八九・一	二六、二六九・五	三一、四八一・六	二、八四一・二	二、五八九・三	三六、九一二・一	八、三二〇・四	一、四九八・九	八二三・三	一〇、六四二・六
昭和七年	六八九、二一九・六	二五、九八九・二	三四、一七〇・五	六三六・一	一、二一〇・二	三六、〇一六・八	五、五九〇・八	三、五三八・六	八九八・二	一〇、〇二七・六
昭和六年	六六三、二三〇・四	二六、三〇〇・二	三五、九二九・六	八〇五・四	七三三・五	三七、四六八・五	四、六二〇・五	五、六八八・九	八五八・九	一一、一六八・三
昭和五年	六三六、九三〇・二	九、一八五・二	二一、八二三・九	四二九・六	九七四・五	二三、二二八・〇	五、〇五九・九	八、五三九・九	四四三・〇	一四、〇四二・八
昭和四年	六二七、七四五・〇	△五、二八一・九	三一、〇七八・二	五七〇・一	三五、二〇五・四	六六、八五三・七	二四、六六三・四	一〇、四二九・九	三七、〇四二・三	七二、一三五・六
昭和三年	六三〇、五二五・四	△七、一二六・〇	二三、八八六・五	二六〇・五	三、二〇〇・八	二七、三四七・八	一一、六五三・一	一〇、〇四〇・六	三、一四二・六	二四、八三六・三
昭和二年	六三七、六四一・四	△一二、六八四・二	一二、一九七・一	一八二・八	三、〇六八・二	一五、四四八・一	八、九四五・一	八、五六六・四	五、〇六二・六	二二、五七四・一
昭和元年			八、一三三・三	八八・〇	三九三・一	八、六一四・四	一三、四四五・二	八、二七三・五	一、四四〇・二	二三、一五八・九

備考　一、年内擴張面積中其他は埋立及干拓、荒地復舊、地目變換及實測の結果に依るものである。
二、年内減地面積中潰廢地は宅地、工場敷地、道路、鐵道軌道、河川及水路敷地、荒地、地類及地目變換に依る土地である。其の他は實測の結果に依るものである。

(三)　農家戸數　明治十九年末に於ける本道の農家戸數は僅に一萬四千五百五十九戸を數へるに過ぎなかつたが、其の後拓殖の進展と共に漸次其の數を增加し明治四十二年には十四萬七千四百二十戸に達し、歐洲大戰の好況時代たる大正八年には十八萬七千二百五十戸迄に增加したが、戰後一般經濟界の疲弊は農村をも深刻な悲境に陷れ、農家にして他に轉業又は都市に轉住する者續出し、大正十三年には十六萬八千九百九戸に減少した。然し乍ら其の後本道の農業經營も戰時の如き投機的販賣作物の作付にのみ偏せず、漸次農業本來の面目たる堅實なる歩みを辿り來つた。加ふるに本道の移民招徠策も積極的に講ぜられるに至り、殊に現行第二期拓殖計畫に於ては一戸當り三百五十圓の移住手當を支給する等、農業移民を優遇するの途を開いてゐる爲移住希望者は年々多きを加へて來た。而して昭和九年末農業戸數は十九萬八千五百二十七戸、人口は百十七萬六千八百二十四人を算し、之を前年に比較すれば戸數に於て七百三十九戸の減、人口に於ては千八百四十人の增加を示してゐるが、之は近年打續く凶作水害等に基く他への轉業又は小作の減少に因る結果と見られてゐる。尙農業戸數を自作、小作及自作兼小作の三種に區分して之を見るに、自作農は大正十一年以來漸減の一路を辿り昭和四年度を最低とし、其の後年々一千戸内外の增加を示して今日に至つたが、昭和九年末は前年に比し七十三戸の增加に過ぎない。小作農及自作兼小作農は共に年々增加の傾向にあつたが、昭和九年末に於ては小作農戸數九萬七千七百六十三戸、自作兼小作農戸數は三萬四千百五十五戸で、之

を前年に比し前者に於て九百六十九戸の減となり、後者に於ては僅かに百五十七戸の增加に過ぎない。而して小作農戸數は全農家戸數の約半數を示してゐるが、これは本道が大地積の農場經營の多い特殊事情に基くものと云へる。之が趨勢を表示すれば左の如くである。

自作及小作農家一覽表

年次	總戸數	自作戸數	自作兼小作戸數	小作戸數	農家總戸數に對する百分比 自作	自作兼小作	小作
昭和九年	一九八、五二七戸	六八、六〇九戸	二四、一五五戸	九七、七九三戸	三四・六	一七・二	四九・二
昭和八年	一九九、二六六	六六、三五六	三三、九八八	九八、七三三	三三・四	一七・一	四九・五
昭和七年	一九七、一八〇	六五、九二一	三三、九八二	九八、二八七	三三・四	一六・七	四九・九
昭和六年	一九二、〇九八	六四、六七一	三一、八七八	九五、五四九	三三・七	一六・六	四九・七
昭和五年	一八七、二九三	六三、〇一七	三〇、六九二	九三、五七四	三三・七	一六・四	四九・九
昭和四年	一八三、八四〇	六〇、三二七	三〇、三一三	九三、〇九一	三二・九	一六・四	五〇・七
昭和三年	一七七、〇八八	六二、一五五	二七、五五六	八七、三七七	三五・一	一五・七	四九・二
昭和二年	一七四、六八二	六一、〇六〇	二六、九八二	八六、六四〇	三五・〇	一五・四	四九・六
昭和元年	一七二、五九一	六〇、八三三	二六、九四四	八四、八一四	三五・三	一五・六	四九・一
大正十四年	一七一、一九	六一、〇一五	二五、四二八	八四、四四六	三五・六	一五・一	四九・三
大正十三年	一六八、九〇九	六〇、八三八	二五、一七四	八二、八九七	三六・〇	一四・九	四九・一

農業人口一覽表

年次	實數 自作	自作兼小作	小作	計	百分比 自作	自作兼小作	小作
昭和九年	三九一、六一二人	二一九、四四三人	五六五、七七一人	一、一七六、八二四人	三三・三	一八・六	四八・一
昭和八年	三八九、三三九	二一五、三一三	五七〇、四三三	一、一七四、九八四	三三・一	一八・三	四八・六
昭和七年	三八二、三八五	二〇八、一一〇	五六六、四七六	一、一五六、九七一	三三・〇	一八・〇	四九・〇
昭和六年	三七二、〇九三	二〇四、二五三	五五四、五五七	一、一三二、九〇二	三三・二	一八・二	四八・六
昭和五年	三六四、六五五	一九五、五一九	五三〇、八〇四	一、〇八八、八八八	三三・五	一七・八	四九・二
昭和四年	三四九、五九七	一八八、二五四	五二一、四八七	一、〇五九、三三八	三三・〇	一七・八	四九・二
昭和三年	三五九、七二七	一七二、五六八	四九七、二六二	一、〇二九、五七七	三四・九	一六・八	四八・三
昭和二年	三五〇、〇〇九	一六九、一七五	四九五、七六八	一、〇二二、九五二	三四・六	一六・七	四八・七

年次	實數 自作	自作兼小作	小作	計	百分比 自作	自作兼小作	小作
大正十二年	一七三、五二九	六三、九一八	二六、二三	八三、四七九	三六・八	一五・一	四八・一
大正十一年	一七七、三五九	六六、六五二	二六、九五一	八三、七七七	三七・五	一五・二	四七・三
大正十年	一八〇、一七三	七一、二九五	二七、九五一	八一、一八六	三九・五	一五・三	四五・二
大正九年	一八六、七六六	七七、五五八	二八、九八〇	八〇、三二八	四一・五	一五・五	四三・〇
大正八年	一八七、二五九	八〇、九七二	二七、〇五二	七九、二〇五	四二・二	一四・五	四三・三
大正七年	一八五、三三三	八〇、七二三	二七、一三三	七七、四七九	四二・六	一四・九	四一・八
明治四十二年	一四七、四二〇	六七、八二八	一九、九二一	五九、九二一	四五・〇	一三・三	四〇・七

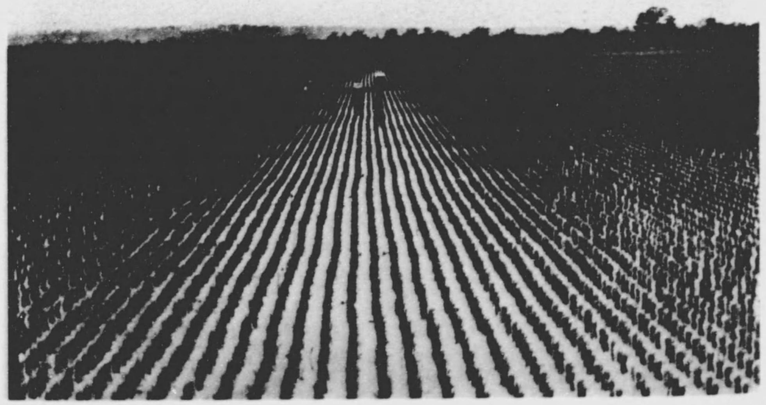
年次	實數 自作	實數 自作兼小作	實數 小作	實數 計	百分比 自作	百分比 自作兼小作	百分比 小作
昭和元年	三三〇、一三五人	一六六、九四一人	四八六、七六五人	一、〇〇三、八四一人	三四・九	一六・六	四八・五
大正十四年	三四七、一六三	一五七、八四一	四八一、一五三	九八六、一五六	三五・〇	一六・〇	四八・八
大正十三年	三四四、三四五	一五三、一〇六	四六四、三八五	九六一、八三六	三五・八	一五・九	四八・三
大正十二年	三六一、〇四〇	一五五、二三八	四六六、〇四六	九八二、三二四	三六・八	一五・八	四七・四
大正十一年	三七八、四六九	一五九、五三六	四六九、一七六	一、〇〇七、一八一	三七・六	一五・八	四六・六
大正十年	三九三、六七四	一六二、八二七	四五三、四五七	一、〇〇九、九五八	三九・〇	一六・一	四四・九
大正九年	四二四、三四三	一六五、一七七	四四四、五一二	一、〇三四、〇三二	四一・〇	一六・〇	四三・〇
大正八年	四五二、一九二	一五八、〇一七	四五七、一二五	一、〇六七、三三四	四二・四	一四・八	四二・八
大正七年	四五八、六五七	一六〇、三四七	四五四、八七七	一、〇七三、八八一	四二・七	一五・〇	四二・三
明治四十二年	三六五、五六一	三一七、四二五	一〇九、八八三	七九二、八六九	四六・一	四〇・〇	一三・九

(四) 農產物　本道農產物總價額は大正八年には一億九千四百萬圓に達し各種生產物の第一位を占めたのであるが、歐洲大戰終熄と共に世界的經濟不況に累せられて逐年減少し、大正十一年に於ては一億一千百餘萬圓に低下するに至つた。之は一時的に戰時需要作物の栽培を目標とせる投機的農業に對する反動的現象であつて、其後財界の回復せると、從來輸出作物を主とせる方針を變更し、食料作物の栽培を主とするに至れるとに依り、大正十四年には農產物總價額一億七千五百餘萬圓に及び、再び總生產額中の首位を占むる迄回復するに至つた。

越えて昭和元年には一億一千四百餘萬圓に下つたが、之は稀有の凶作の結果に因るもので、翌年には一億五千百餘萬圓、同三年には一億五千七百餘萬圓と次第に增加し順調に進んだ。然るに再び財界の不況に沈淪するに及び農產物價額低落し、昭和五年には一億一千四百餘萬圓に減少し、更に昭和六、七年に於ては屢說の如く稀有の天候不順による水害及凶作の爲收穫は半減し、加ふるに價格低廉の爲同六年は五千九百八十餘萬圓、同七年は六千二百八十餘萬圓の價額を示したに過ぎないが、昭和八年は幸に豊作に惠まれ一億四千四百餘萬圓に昇り、漸次財界活況を見ると共に昭和九年に至りては又も凶作なりしに拘らず對外爲替安の關係上輸出向農產物の異常なる活況を見、一億二千五百七十餘萬圓の生產總額を保つことが出來た。

次に本道農產物の主要なるものに就いて見るに、其の大宗たる米は品種の改良と造田の奬勵と相俟つて收穫激增し、大正十四年の如きは二百十二萬七千石、六千五百萬圓の產額を見、昭和元年に至り稀有の凶作に依り一時減少したが、昭和三年に於

水田の種籾直播

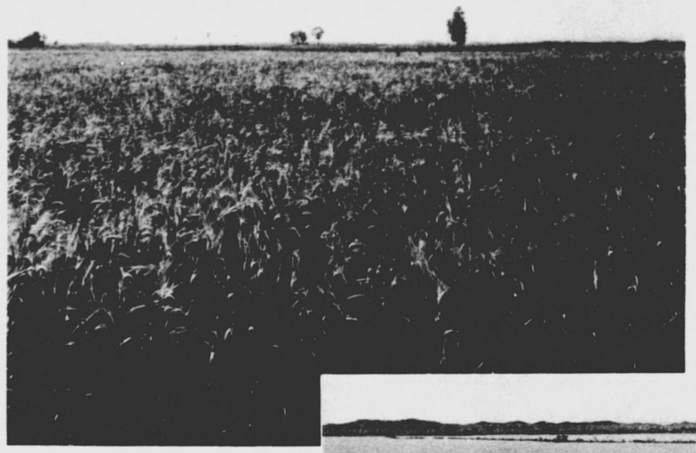


水田の除草

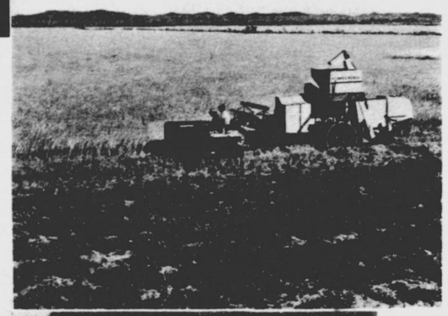
ては二百七十六萬石、同五年は二百八十八萬石を產するに至つた。而して米質も亦著しく改良せられ、自給自足の域より進んで中央市場に其の販路を擴張せんとするに至つた。然るに昭和六、七兩年に於ては再び大凶作に遭遇し百萬石以下の減收を見るの悲況を呈するに至つたが、昭和八年は豐穰に惠まれ三百二十萬石收穫の新記錄を作つた。又本道の特殊產物である薄荷及除蟲菊は比年著しく增收し、遂に世界生產の約七割を占め本邦輸出品として重きをなしてゐる。製糖原料たる甜菜の耕作は糖業政策上重要なるばかりでなく本道拓殖費財源に密接の關係を有し、又北方に於ける畑作農業經營上附帶作物とし且飼畜農業の指導的作物としても至重の任務を有し其の年產額六千四百萬貫に達してゐる。其他所謂輸出品と稱せられて一時海外市場に活躍せる豌豆、菜豆類、澱粉の原料たる馬鈴薯等は經濟界の不況に禍せられて稍々不振の狀勢にあつたが、昭和八年以降漸次活況を呈するに至り、最近豌豆及菜豆其他穀類の如きは既に往年の記錄を突破せんとするの傾向にあるは喜ぶべき現象である、今其の重要作物に就き摘記すれば左の如くである。

米　本道の稻作は二百三十餘年前既に其の端を發し、爾來幾多の消長を經今日に於て

大麥畑



小麥收穫



大豆畑

は新潟縣に亞ぐの米産地として聞え、本道中寒冷著しき根室、釧路及宗谷等二三の地方を除いては道内到る所水稻の成育を見ぬ所はない。就中、上川及空知地方は其の主産地で夙に上川米及空知米の名聲があり、昭和八年は收穫高三百二十萬石を超え此の價格は五千六百餘萬圓に及んだ。尙今後耐寒品種の育成が遂げられ其の技術的方面の完成を見るに至らば本道の米作は尙多望なるものがあらう。

而して其の收穫量は現在道民三百六萬八千人に對する食料の自足を確保するもので、其の販路中道外移出は主として樺太送りである。

麥類　麥類は特に本道の氣候及地質に好適し到る所に其の成育を見、大麥の大部分は麥酒釀造用に供し、裸麥は農家の主食物である。燕麥は本道の特産物であつて昭和九年の作付面積十一萬五千四百町歩、此の收穫高二百四十五萬餘石、價額千百九十萬圓に達するもので、大部分は馬糧に供せられ軍馬の飼料として陸軍糧秣廠に買上げられるものが多い。又近時榮養食品としてオートミールに製造されるに至つた。

大豆　本道は我國に於ける大豆の主産地で、其の生産の增減は本道大豆の消長に依つて左右される。其の栽培は本道の全般に及ぶものであるが、就中十勝、檜山、空知

及膽振地方最も多く、品種は鶴の子、袖振、大谷地及甘露等で何れも良質を以て知られ、味噌及醬油の原料として府縣に於て歡迎される。昭和九年の作付反別は八萬六千餘町歩、收穫高は凶作の爲減少し四十三萬六千石で、其の價額は五百三十五萬四千圓に及ぶものである。

小豆　十勝及空知地方に生產多く、品種は早生、大納言及圓葉早生大粒等であつて、上等品種として府縣の需要頗る旺盛なる爲生產の過半は府縣への移出である。昭和九年に於ける作付反別は五萬七千餘町歩、其の收穫高は凶作の爲二十八萬四千石に減少したが尙其の價額は四百四十五萬餘圓に達してゐる。

豌豆　特に靑豌豆は本道の特產品で海外輸出を目的として栽培され、其の生產の大半は世界有數の豌豆消費國たる英國に仕向けられ又北米の需要も尠くはなく、我國輸出品中の重要品である。主產地は十勝及網走支廳管內である。昭和九年の作付反別は四萬二千八百餘町歩、收穫高は四十萬石を超え、其の價額は八百三十八萬圓に達し前年に比し二百六十六萬餘圓の增加となつてゐる。

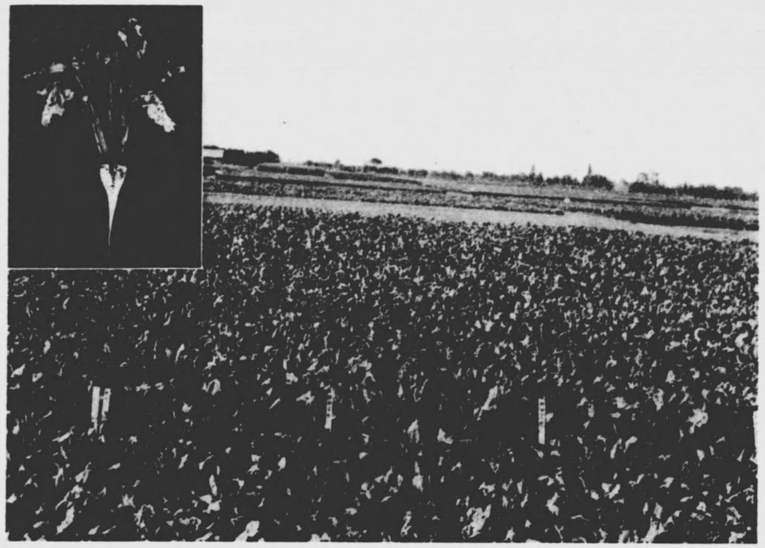
菜豆　品種は極めて多く、大福、中福、手亡、金時類、長鶉、中長鶉、丸鶉及ビルマ等があり、最も多く栽培される地方は十勝、後志、空知及網走支廳管內である。而して本道は我國唯一の菜豆の特產地であつて概して移輸出を目的として栽培され、府縣の需要は固より米國及英國に其の需要多く、豌豆と同じく我輸出品中重要なる位置を占めて居る。昭和九年の作付面積は打續く冷害の影響を蒙れ前年に比し約一萬町歩を減じ七萬六千餘町歩となり、收穫高も亦冷害の爲四十六萬七千石に減收し、其の價額は五百六十萬餘圓に減少した。

馬鈴薯　主要食糧品の一であつて府縣に移出されるもの頗る多く、且つ之より農家は副業的に澱粉を製造するが其の價額も決して僅少ではない。而して本道の馬鈴薯は品質極めて良好で栽培は廣く全道に及ぶが、就中上川、後志及網走支廳管內に特に多く耐寒的作物の一として今後其の生產は更に增大するであらう。昭和九年に於ける作付反別は六萬四千餘町歩、收穫は一億五千九百萬貫を超え、價額は八百七十八萬圓を突破し前年に比し稍々減收を示して居る。

甜菜　本道特殊作物として知られ、寒冷なる地方程成績良好なる故に本道の適作物として近時特に之が栽培を希望するもの多く、一般作物の凶作に喘ぐ時に於ても寧ろ本作物は豐作に惠まれる狀況で、然かも其の耕作は本道農業の積弊たる掠奪的農業

を矯め、且施肥及耕鋤の合理的方法を懲憑し畜類の飼養を促し、又其の跡作物の好成績なる等より見るも、甜菜は本道農業殊に寒冷地方に於ける基本作物たるべきものであつて、斯かる見地より北海道廳に於ては甜菜栽培の奬勵に萬全を盡すと共に、之が製品たる甜菜糖の優越性を消費者に徹底せしめ以て販路の確立を計りつゝある。即ち甜菜耕作者には肥料、農具及運搬費等の補助をなし之が耕作を奬勵してゐる。本作物も亦全道に其の耕作を見るが、氣候の關係上十勝及網走地方を以て其の首位とする。而して昭和九年に於ける作付反別は一萬六十四町歩、收穫高は六千四百四十六萬貫、價額は二百二十一萬五千八百九十餘圓に及び、前年に比し好成績を示した。尙本作物の耕作は製糖會社との特約に依るものである。

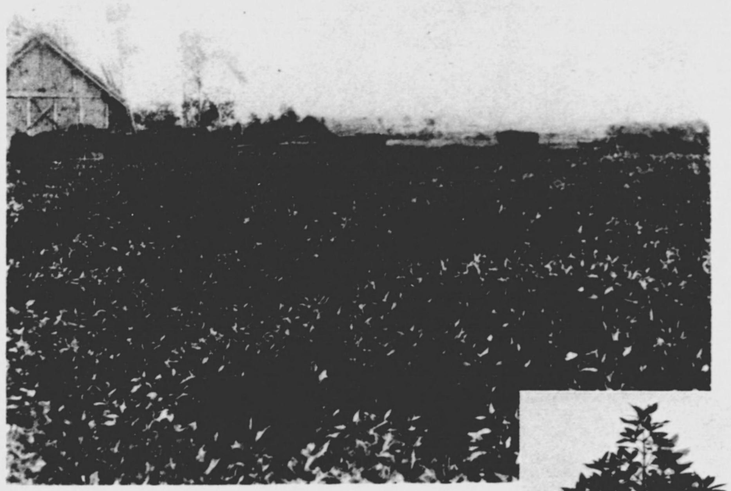
薄荷　本作物も亦本道の特產品にして本邦生產の八割に及び、世界に於ける總生產額に就て見るも殆んど其の過半は本道薄荷を以て占められるの現狀にある。而して其の栽培は腦分が氣候に依つて左右される關係上概して網走支廳管內に限られてゐる。而して其の販路は取卸油とし神戸等を經由して海外に輸出される。昭和九年に於て之が作付反別は一萬八千七百町歩、收穫高は八百四十六萬餘貫に減少したが、此の



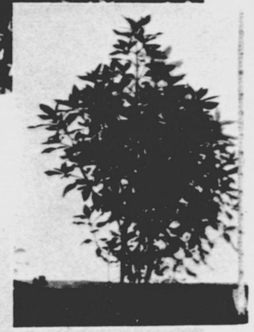
甜菜畑と甜菜根

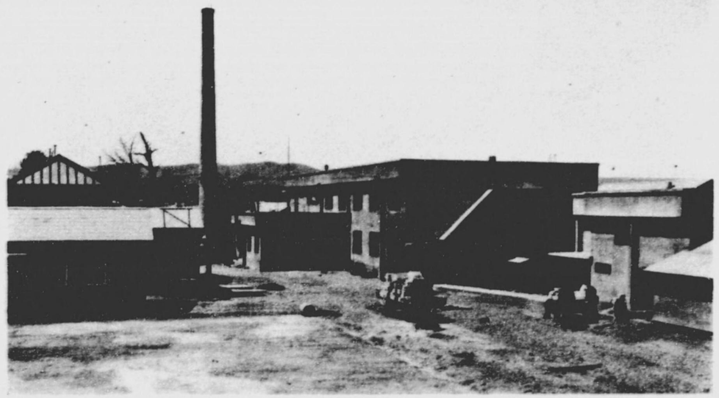
明治製糖株式會社清水工場

北海道製糖株式會社帶廣工場



北見地方の薄荷畑





北海道信用購買販賣組合聯合會所屬薄荷精製工場（野付牛町）

亞麻畑と亞麻莖

除蟲菊畑と除蟲菊莖

玉　葱　畑（札幌市外札幌村）

林　檎　園（余市町附近）

價額は僅かな減少に止まり三百三十七萬六千圓である。

除蟲菊　除蟲菊も亦甜菜及薄荷等と共に本道の特産物で、其の産出は上川、後志及網走支廳管内に多い。其の製品は主として乾花の儘主要集散地たる紐育に輸出される。昭和九年の作付反別は一萬五千餘町歩、收穫高は前年に比し稍劣り七十八萬四千餘貫で、其の價額は三百九十七萬圓である。

亞麻　唯一の纖維作物であると共に本道の特産で、其栽培は製麻會社との契約に依るもので空知、上川及十勝支廳管内に多い。又種子は搾油原料として需要多く海外にも相當量輸出せられる。昭和九年は其作付面積一萬三千八百町歩、收穫高は前年に比し好成績を示し七百八十九萬貫に達し、價額百六十一萬三千餘圓に及ぶものである。

蕎麥　生產の多いのと粉出率の多いのは我國隨一で府縣への移出が大部分を占め、主產地は十勝、後志及網走管内である。昭和九年に於ける作付狀況は秋作なる爲冷害の轍を虞れ前年に比し二萬餘町歩を減じ作付面積二萬四千七百二町歩に過ぎない。而して同年は冷害にして收穫高及價額も著しく減じ、十四萬四千二百二十七石、百九萬四千三百八十六圓である。

牧草　本道の風土は頗る牧草の栽培に好適して居るもので、本道に於ける家畜の優秀なるは一に此の品質良好なる牧草を生產するに原因して居る。

果實　林檎、葡萄、櫻桃及梨等を多く產するが、就中林檎は我國林檎植栽の先驅を爲せるもので、其の風味佳良にして且貯藏に耐ゆるの特質を有し、其の主產地である後志支廳管內余市町附近のものは余市林檎として夙に名聲がある。

蔬菜　本道は又良く蔬菜の栽培に適し、就中玉葱、キヤベージ、葱、人蔘、牛蒡及南瓜、瓜類等の栽培盛であつて、府縣の需要も多く殊に玉葱は結球堅く貯藏に耐え品質優秀なるを以て海外輸出品として重要なものである。

此等重要農產物に對する累年の趨勢を表示すれば左の如くである。

重要作物　其の一

年次	米 作付反別	米 收穫高	米 價額	麥 作付反別	麥 收穫高	麥 價額	大豆 作付反別	大豆 收穫高	大豆 價額
	町反	石	円	町反	石	円	町反	石	円
昭和九年	一九四、三一六、九	一、七二四、八九六	四二、四六二、〇三五	四八三、〇〇七	六、〇三九、一七五	八六七、〇六三、六	四二、八〇一、八	五、三五二、九二五	一、四一五、九二五
昭和八年	一九三、一九四、七	三、二一七、二五三	五六、一八六、一七二	四、七八九、三四三	六、〇二〇、三	六九七、〇六四、三	四五、七六四、二	七、五二九、三五一	四、四六二、一七二
昭和七年	一九八、七三八、二	八八一、一〇〇	一六、三一六、二一三	一九三、八八一、一七	二、一三五、一四四	二四、九二〇、三五五	三八、九二一、七	八、三一六、二一三	三、一〇〇、八〇七
昭和六年	一九四、八八八、九	一、〇八四、五五七	一五、四四九、七六八	三四、一八六、〇	二、一五七、五四六	三〇六、九八六	三四、一八六、〇	二、一五七、五四六	三〇六、九八六
昭和五年	一八八、四一六、二	二、八八〇、五四七	四〇、七七四、三二六	三五一、七三九	四、四三三、九九二	三〇〇、八七六	三四、二五九、六	四、四三三、九九二	三〇〇、八七六
昭和四年	一七七、〇三五、三	二、四〇七、一五二	五四、四五八、三〇七	三〇〇、八七六	四、四四五、〇四〇	二九六、五八一	三三、九〇〇、六	四、四四三、六五六	二九六、五八一
昭和三年	一六六、七九九、三	二、七八〇、三六七	六一、四四二、四四三	二九六、五八一	四、四四三、六五六				

其の二

年次	小豆 作付反別	小豆 收穫高	小豆 價額	豌豆 作付反別	豌豆 收穫高	豌豆 價額	菜豆 作付反別	菜豆 收穫高	菜豆 價額	類 作付反別	類 收穫高	類 價額
	町反	石	円	町反	石	円	町反	石	円	町反	石	円
昭和九年	五七、〇五九、一	二八四、六五八	四、四五二、〇九	四二、八七四、一	八、三五〇、五七九	八、三四〇、一二三	七六、一四七、七	四八七、七二五	四五七、〇九二	四三、八〇一、八	五、三五二、九二五	一、四一五、九二五
昭和八年	五一、〇〇四、五	五三四、九〇七	六、七七三、一八二	四一、六〇一、五	二八五、六五三	五、七一七、六〇八	四一、六〇一、五	二八五、六五三	五、七一七、六〇八	四五、七六四、二	六、七七三、一八二	四、四五二、〇九
昭和七年	五六、一一一、四	一四四、八五三	二、七八九、四五六	四〇、五四七、三	二、七八八、四五六	二、七八九、四五六	一七四、九二三	二、八八八、四五六	二、七八九、四五六	三八、九一一、七	二、七八九、四五六	二、七八九、四五六
昭和六年	五三、三八二、七	二三〇、四七九	二、五九六、六一四	三三、一九一、八	二、八〇二、九一五	二、八〇二、九一五	二四六、七五五	二、八〇二、九一五	二、八〇二、九一五	三三、一二三、二	二、五九六、六一四	二、五九六、六一四
昭和五年	四七、〇五六、四	四六九、二四九	五、〇一九、〇一三	二六、三〇四、五	三、八八七、〇三四	三、八八七、〇三四	二四六、八五五	三、八八七、〇三四	三、八八七、〇三四	二六、三〇四、五	三、八八七、〇三四	三、八八七、〇三四

年次	小豆 作付反別(町反)	小豆 收穫高(石)	小豆 價額(円)	豌豆 作付反別(町反)	豌豆 收穫高(石)	豌豆 價額(円)	菜豆 作付反別(町反)	菜豆 收穫高(石)	菜豆 價額(円)
昭和四年	四四、九五三・四	三七六、四六一	六、八七二、六三三	四〇、八六六・一	三〇六、六四二	五、四六三、一三八	七七、四七七・〇	六三二、一七九	一三、五七五、三八八
昭和三年	四六、九七七・九	二九五、七六四	六、八七二、五八七	四五、三八五・四	三三六、八〇八	七、〇二三、五三六	五九、一九八・三	四三三、六六六	九、九六四、三八三
昭和二年	四三、六八一・二	四一四、五一一	六、四六三、七三〇	三九、〇一六・六	三三一、九〇四	七、二二六、一一三	五六、九三八・四	四七八、八二五	七、三四六、七四四
昭和元年	四九、五七一・九	二〇九、五七〇	四、二九三、三〇七	二九、五二〇・〇	二五一、九八二	六、一八〇、二四五	五九、〇六五・一	三八五、一三一	六、七一五、一三一
大正十四年	五四、二八一・五	五四九、〇九二	一〇、二八一、四六三	二八、五四七・〇	二〇八、八五八	五、〇三四、七〇九	五七、〇三六・三	五二六、〇四三	一一、〇〇七、六〇四
大正十三年	五四、五三五・五	四五八、四八三	一一、四一四、五三三	三五、〇七〇・三	二四八、三三六	四、八九七、五〇五	五一、五七二・一	四三七、四五七	九、五〇六、六九七
大正十二年	五七、四七八・九	三九二、五六一	六、九一六、三六一	三五、九三一・九	三一三、一五〇	四、六九六、八八四	六〇、三一五・三	四九九、九九六	六、六八二、五五六
大正十一年	六二、四八五・六	四二七、八二四	五、四一五、九一五	三三、二七一・〇	二四一、三三七	五、〇〇六、〇三三	六七、六二二・三	四九九、〇九九	七、〇五六、一八七
大正十年	六八、七三三・八	六六〇、二五九	九、八六二、七五九	一六、二四七・四	一四九、六六七	三、七三五、〇八一	五四、五六五・一	五三〇、七八六	九、〇四三、八五五
大正九年	五三、九〇五・三	四七五、六四〇	六、一四六、二〇四	二六、八九一・四	一五七、七九九	一、五八三、七七四	五八、四〇〇・七	四一六、一七四	五、〇五六、五一七
大正八年	四二、一四一・三	三〇八、〇八一	七、九三七、二九四	六八、六〇一・五	四四五、九〇三	一〇、三二四、一七三	一〇八、二九九・〇	六九六、二六五	一一、七二二、六一八
大正七年	三四、六九三・五	二九一、四二八	五、一五一、八三六	五四、七七六・六	三九六、七五三	九、九九五、七〇一	一三六、一二四・七	一、〇七三、八六一	九、三二六、六六一
明治四十二年	四四、五五〇・一	三五二、五六一	二、六〇七、〇一九	六、一六五・五	五一、〇九〇	三五三、八〇五	一〇、七七九・七	一〇三、八八五	八三四、四五五

其の三

年次	馬鈴薯 作付反別(町反)	馬鈴薯 收穫高(貫)	馬鈴薯 價額(円)	燕麦 作付反別(町反)	燕麦 收穫高(石)	燕麦 價額(円)	亞麻莖 作付反別(町反)	亞麻莖 收穫高(貫)	亞麻莖 價額(円)
昭和九年	六四、一〇九・二	一一五九、〇三〇、三八〇	八、七八一、三五九	一一五、四一四・五	二、四五二、一八〇	一一、八九七、七九九	一三、七七九・七	七、八九一、〇一六	一、六一三、三八四
昭和八年	六一、八〇九・〇	一一七四、四九九、〇一五	一〇、五七四、八二四	一二三、二八六・七	一、九五三、〇五八	七、六六二、四三〇	一三、一七四・三	六、二四二、〇五四	一、二三三、六七五

年次	馬鈴薯 作付反別	馬鈴薯 收穫高	馬鈴薯 價額	燕麦 作付反別	燕麦 收穫高	燕麦 價額	亞麻莖 作付反別	亞麻莖 收穫高	亞麻莖 價額
昭和七年	四七、三九六・〇	八一、六七三、五八七	五、五三四、一二三	一三三、三八七・八	一、三一七、九九七	五、二〇四、四九九	九、五〇六・九	三、一一七、二九七	五二四、〇四五
昭和六年	四四、三九九・二	七七、〇八一、九九六	四、〇〇一、七三八	一二五、一七三・七	一、九七二、八四九	六、八六〇、八八一	一〇、二六三・〇	四、六六三、七九六	八七八、一一四
昭和五年	四五、五三九・八	一一三、二二五、〇八六	五、八五三、二六三	一一七、七三三・五	二、二四七、〇五五	一三、三〇六、五六一	八、六六一・〇	四、一四九、八三九	一、〇〇四、六〇七
昭和四年	四三、九七一・一	一〇七、〇三四、五五四	八、七四二、二二九	一一四、五〇五・〇	一、九六六、七六六	一三、〇六〇、一三一	一〇、五八九・三	四、七〇五、八五三	一、二七四、一五三
昭和三年	四一、九六四・五	一〇一、六五三、二三三	九、二一一、九一一	一一三、九四四・四	二、〇六五、八八〇	一三、三三三、九〇三	七、七八一・二	三、五七〇、一五八	九七八、六七四
昭和二年	四四、四七八・七	一一三、八〇四、九四五	九、六三八、八一九	一三〇、六二一・五	二、二三六、一三一	一三、八五一、八一九	五、二二三・七	二、三三七、六六七	六〇三、五〇三
昭和元年	四五、四一一・二	九八、四四八、五四一	八、三九九、〇五六	一〇六、八五八・六	一、九三五、七七三	一三、九〇五、三九七	一八、四七五・四	八、五四四、七一九	二、二三七、五一九
大正十四年	四五、四四三・二	一二八、一〇二、〇五七	一一、五六四、八三四	一〇六、三三五・五	一、九五〇、三九五	一三、七〇三、一八三	二一、二七四・七	八、九六七、七三四	二、六八五、〇三六
大正十三年	四三、二四九・一	一一一、五〇八、八六四	一一、三三六、七四五	一一一、九四二・〇	一、八三〇、七〇三	一一、四九五、八〇三	一五、一七九・七	五、八七二、一二〇	一、六二四、一五三
大正十二年	四五、五三一・六	一〇四、〇〇六、一八九	八、三七六、〇三九	一〇八、六三三・六	二、〇二一、五〇四	一一、九〇六、七〇四	一八、一四三・一	七、七九二、三〇八	一、八〇八、九四三
大正十一年	五一、八二三・〇	一〇三、二九〇、四一一	八、四五一、三七〇	一一三、八七三・八	一、六八七、九二〇	八、四三〇、一七四	一五、九六八・七	六、七二八、二四七	一、六八三、六〇九
大正十年	五三、四六三・八	一五一、七三三、九六三	一〇、四五一、九一四	一三五、四四二・九	二、四七六、四五九	一三、六〇六、八三一	三一、〇四六・六	一三、六六四、〇〇一	二、一八四、八八〇
大正九年	六八、二八一・二	一四九、一七四、九五三	八、二三五、七二八	一一一、七六三・六	一、八二八、〇一九	一〇、七三九、六二八	四一、九一七・七	一七、三〇三、三六八	四、七七三、五三一
大正八年	一〇三、八三九・四	三四四、〇三七、八六五	三三、〇九八、九八一	八八、八八七・二	一、七〇六、七〇五	一五、三四〇、〇六一	二七、七九〇・二	一三、三六五、四〇三	三、四〇四、四九四
大正七年	八四、二九六・七	二一一、二八九、三九七	一九、四七〇、二六一	六四、四八三・八	一、二五八、四三五	一一、五五六、五七〇	三四、七七三・九	一七、一八九、五七八	五、八四七、二五四
明治四十二年	二六、一七四・〇	七三、〇七八、五四三	二、五三三、四〇三	四四、〇八〇・四	九七九、六〇九	二、七八五、八一三	五、一一七・二	三、四三四、三四〇	三五八、九六三

其の四

116280

年次	甜菜 作付反別（町反）	甜菜 收穫高（貫）	甜菜 價額（円）	薄荷 作付反別（町反）	薄荷 收穫高（貫）	薄荷 價額（円）	除蟲菊 作付反別（町反）	除蟲菊 收穫高（貫）	除蟲菊 價額（円）
昭和九年	一〇、〇六三・六	六四、四六五、〇七三	二、二二五、八九四	一八、六九三・二	八、四六三、八〇一	三、三七六、七九七	一五、〇八五・五	七八四、一九一	三、九六七、三九六
昭和八年	一〇、一八五・七	四九、八六〇、一四五	一、八六九、六七三	一七、三三六・七	一四、八一六、一九一	三、八九一、五〇五	一三、七八〇・八	八九五、八〇八	四、三七二、二八九
昭和七年	八、六五一・八	四五、五五三、一〇三	一、四三三、四八三	一五、七五八・二	七、二二八、四七一	三、四九五、二四九	一二、二〇九・五	六六九、二九三	一、八二五、六九七
昭和六年	九、八二四・六	四七、三三三、二五四	一、七七四、五五五	一四、九一八・五	八、八二三、二九六	一、九一五、四四八	一〇、〇九二・九	六三四、三五七	一、一九三、八一三
昭和五年	九、一三五・一	五〇、七八五、一五八	二、二一七、五〇六	一三、九一八・五	一〇、三八七、四八一	二、七三四、九八九	一〇、二九三・五	九八二、八八九	一、九九三、三六五
昭和四年	八、七六二・二	五三、三二四、九〇八	二、二八二、九五五	一三、〇九六・五	九、二七四、九二九	三、四五一、三三八	九、七〇〇・二	九六三、六九八	二、五四四、一〇三
昭和三年	一〇、三四四・一	五五、七二八、〇六八	二、四二八、五四〇	一二、九五三・六	六、六四一、六六九	三、一〇五、三〇〇	八、七三七・四	八九一、八五九	四、一四九、八八二
昭和二年	一〇、〇二三・九	四九、三三五、四七一	二、一四四、二八四	一二、五八〇・四	七、五五六、三〇八	二、九七七、五五〇	九、〇五八・〇	七七六、四〇三	一、八五二、三五一
昭和元年	七、五〇九・三	三八、七五四、〇二六	一、六七九、三三九	一三、一〇四・〇	六、九八〇、六八三	二、四〇三、八八一	一〇、四四一・八	一、二二七、六六四	一、四二六、四六九
大正十四年	七、四八〇・五	三三、二五七、六五六	一、四五三、八五一	九、二三〇・七	六、六七六、二八二	四、八六八、三七八	八、一四六・〇	八二三、一四八	二、〇七三、七〇〇
大正十三年	八、七九四・二	三四、三五九、七二四	一、四五四、九四一	七、四六六・五	五、〇三三、七六四	四、四四二、六七〇	四、六二六・九	四三八、八三二	二、二三三、八二〇
大正十二年	八、二九五・〇	四三、六八九、〇四九	一、八五三、一九〇	六、五八五・八	四、二二一、八三五	二、〇二七、二五一	二、〇六九・一	一八九、六四四	九五六、三四四
大正十一年	五、八三一・六	三三、九九三、三二六	九八〇、一八四	五、四七〇・六	三、七一五、六八二	一、九八三、五八三	一、〇六三・〇	一〇三、一三五	四九九、九七三
大正十年	四、六八二・六	二〇、六七六、二〇〇	一、〇二八、五九三	四、四一七・〇	三、五七九、〇〇三	六七三、二七三	五四八・九	五一、九六三	一八九、〇〇六
大正九年	二、三八四・〇	二、〇四六、二二四	一〇二、三二一	四、〇二三・五	二、七二九、六八一	四三三、九一八	二一七・六	一四、一三三	六八、五四五
大正八年	—	—	—	一、五五六・〇	一、三三九、四二七	三〇六、九六四	七三・六	八、〇九六	三五、九八三
大正七年	—	—	—	二、七六六・三	二、二七六、三二一	三四三、七一四	五六・八	六、七一四	一五、二六〇
明治四十二年	—	—	—	一、四七六・六	九一八、六〇三	二一九、二六三	一〇・一	三、二四三	五、三六八

（五）副業　本道の副業は殆んど創始的のものが多く、府縣の如く長年月の間に自然に發達せるものと比較すれば尚幼稚の域を脱しないが、近時一般經濟界の不況は其の本業に依る收入のみを以てしては滿足するを得ず、茲に副業は近時頓に發達するに至つた。而してこれは啻に中小産業者の經濟を向上し生活の安定を圖るに止まらず、併せて勤勞の美風を涵養し得る事は洵に得難い賜物であつて其の好影響は蓋し僅少ではない。

殊に本道は冬季積雪期長きに亙り、而かも府縣と異り二毛作を困難とするの狀態にあるを以て、此の間に於ける餘剩勞力を以て本道の豐富なる原料を利用すれば農山漁村民の收入を增大し得べく、本道は好箇の副業國となり得るの素地を有するもので、最近漸次道民の自覺によりて從業氣分著しく勃興し、倘當局の施設及指導に依り、從業者は副業組合を設け製品の改善統一と消流の圓滑を計り、斯業の積極的發展を期せんとするの趨勢に在り、其の年產總額は三千萬圓に達して居る。他面本道

に於て消費されつゝある副業品は殆んど府縣の移入に仰ぐの現狀であつて、本道副業の目標も先づ以て道內自給を計るを要するものである。今主たる副業に就て概記すれば左の如くである。

藁工品　主産地は空知、上川、石狩、後志及網走等の米産地で、近時器具機械の使用竝共同施設等の完備に依り、其の生産價額百四萬五千餘圓に及び本道副業の大宗である。

竹製品　原料となる根曲竹の産出は全道に亙り、又「スヾ竹」は膽振、日高及釧路地方に於て極めて豐富である。製品は主として日用品及農漁業用品で未だ美術品の産出は少いが、最近に於ては共同作業施設を爲すの風次第に興り、既に共同作業場を有する組合九箇所に達し、漸次增加の趨勢にあり年産十一萬八千餘圓である。

杞柳製品　本道は低沼地及河川の堤塘等多く、杞柳栽培適地を有するが故に杞柳細工は極めて適當な副業と云ふ事が出來る。製品は柳行李及バスケツト等であるが、是等は殆んど道內自給の域に達して居るので、最近では卓子及椅子其の他家具の製作に研究が進められて居るから將來當副業よりの收入は益々多きを加へるであらう。

年產五萬七千圓餘である。

羊毛加工　本道の氣候は緬羊の飼育に適し、其の品質は本場物たる濠洲產より遙かに優れ、殊に飼育極めて簡易なる爲近時農家の餘剩勞力と廢棄物を利用し之を飼育するもの多く、從つて羊毛加工は年々多きを加ふるに至つたが、之等は主として道民被衣の資に供しつゝあり、今後緬羊の增殖計畫成り飼育農家戶數の增加に連れ之に依り擧げ得る收益は農家經濟の好材料として有望視される。現今に於ては生產額三萬五千圓である。

燕麥稈製品　麥稈の利用は主として俵及壜苞類であるが、俵は雜穀の包裝用として需要頗る多く、近時製俵機を購入して其の生產に從事するもの年々增加して居る。

凍豆腐　本道は原料大豆の豐富なると氣候が其の製造に好適せる爲奬勵年尙淺きにも拘らず、其の成績極めて良好にして全道到る處に於て行はれ、前途頗る有望なる副業である。

割箸　副業割箸は未だ幼稚の域を脫しないが、原木として「エゾ松」「トド松」が豐富で價格も安く、而も製作簡易で老幼男女を問はず一家打揃つて爐を圍み談笑の中に生

產し得られるので、副業としては簡捷にして效尠からざるものである。

椎茸　檜山、日高及釧路地方は椎茸の發育に適し、天然產が相當多いが品質を改善し其の聲價を高める爲極力栽培を奬勵すると共に、一面乾燥設備を勸奬しつゝあるを以て栽培品の生產漸次增加し、今後は道外に多量の移出を見るであらう。

木工玩具　木工品は最近の發達にして轆轤及絲鋸を利用し、鄕土色豐なる裝飾品及玩具を製作して居る。

以上は主として加工的副業に限られて居るが、本道は地域廣汎で各地其の事情を異にし隨つて副業の種類も多樣である。今副業品生產の狀況を表示すれば左の如くである。

副業品生產額

品名	生產高	需要高	品名	生產高	需要高
藁工品	一、〇四五、一五三円	五、〇九九、八一二円	藺製品	一、九一五円	一、〇八一、二〇八円
竹工品	一一八、二〇一	六八九、〇一四	割箸	八五、三五五	一六三、八四七
凍豆腐	五一、一七九	一一〇、八三五	椎茸	三七、三二一	七九、四八〇
漬物	一、九九六、一二六	二、三二七、八七四	アスパラガス	四二、四三一	五二、四三一
羊毛加工品	三五、五〇〇	四二九、五〇〇	山葵	四、七三〇	九、七三〇
杞柳製品	五七、〇一九	七五、二五〇	蜂蜜	一一八、六七三	六四、〇四三
黍箒	二三、六三六	四七二、四三六	梅杏	六〇、九七七	六〇、九七七
手藝品	二〇六、五六九	二五八、二三八	味噌	二、三八三、九八七	三、五四七、一四三
木工玩具	二七、七九〇	七七、七九〇	藥用人參	九、九七六	二、九七六
干瓢	二、七四五	一四、七四五	胡桃	一、三〇七	四、三〇七
兎毛皮	六五、〇八六	四五、〇八六	栗	一、二一四	八、二一四
醬油	一、一〇六、五三四	二、八一九、一七一	計	七、四八三、四二四	一七、四九四、一〇七

(六)　農事指導竝檢查機關及團體

(イ)　北海道農事試驗場　本道に於ける農業啓發の基礎資料を究明し、以て本道に獨自なる農業の樹立を計らんとし、明治三十四年國費を以て札幌に設置されたが、同四十三年に至り本道拓殖計畫の確立と共に農事試驗機關の連絡統一せらるゝに及び、其の規模を擴張し大正六年に於ける本道拓殖計畫案の改訂と共に、品種改良、土性調査及農產製造に關する試驗事業を擴張し、從來の農事試驗場及蠶業講習所は本場の一部となした。更に大正十一年甜菜糖業に關する試驗事業を加ふるに及び、用地

竝廳舍の狹隘を訴ふるに至れるを以て、同十四年札幌市外琴似村に移轉し今日に及んで居る。而して其の事業は土性調査及施肥標準調査、種藝、園藝、農藝化學、甜菜糖業、蠶業病理及昆蟲其他に關する試驗をなし、本道農業の根幹をなす技術の決定を爲すと共に、農業練習生等を養成し以て農村に於ける中心的指導人物を養成しつゝあり、實施以來卒業生三百名を超え夫々天職たる農業に從事してゐる。而して廣大なる本道は各地方により氣象地質を甚だしく異にするものある爲、適地適作に依る農業經營の模範たらしむべく、渡島、上川、北見、根室及十勝に各支場を經營し地方農民の指導に萬善を期しつゝある。尙此の外泥炭地及濃霧地等の如き特殊地帶に於ては營に農業の技術的指導をなすのみに止まらず農家經濟の全般的指導を目的として、第二期拓殖計畫に於ては農業經營試驗を加へ模範的農家の造成に努めてゐる。今其の機關の名稱竝所在地を示せば左の如くである。尙此の外北海道地方費を以て農事試作場を設置し、前記試驗機關に依つて得たる成績を綜合應用し各地方に適應せる各種の試作及調査を施行し、以て地方農業の指導啓發に努めてゐる。

農事試驗場竝試作地の名稱及所在地

名稱	所在地	名稱	所在地
北海道農事試驗場	札幌郡琴似村	早來火山灰地試驗地	勇拂郡安平村
同　上川支場	上川郡永山村	十勝高丘地試驗地	河西郡大正村
同　十勝支場	帶廣市	檜山農事試作場	檜山郡厚澤部村
同　北見支場	常呂郡野付牛町	膽振同	虻田郡俱知安町
同　渡島支場	龜田郡大野村	釧路同	厚岸郡太田村
同　根室支場	標津郡標津村	美深同	中川郡美深町
札幌市試驗地	札幌市	天鹽同	天鹽郡天鹽町
琴似園藝試驗地	札幌郡琴似村	瀨棚同	瀨棚郡利別村
琴似泥炭地試驗地	同	日高同	靜內郡靜內村
美唄泥炭地試驗地	空知郡美唄町	宗谷同	宗谷郡稚內町

(ロ)　北海道農產物檢查所　農產物の生產改良を促すと共に內外取引の改善を圖らんが爲、大正八年四月北海道地方費事業として農產物の檢查を施行するに至つた。農產物檢查所は其の施行機關にして本所を札幌市に置き、其の支所は全道を通じて十一箇所、派出所は百九十七箇所、駐在所は四百四十四箇所である。而して檢查品目は普通作物を網羅し、併せて亞麻莖、除蟲菊及取卸薄荷の特用作物に對しても檢查を行ひ、以て本道農產品の聲價を高め內外市場の圓滿なる取引に資してゐる。尙右檢查事業に附隨する重要なる任務として農產物の經濟的調査機關たる調査課を本所

に置き、道内各支所及派出所間の聯絡は勿論府縣海外各地に調査網を張つて居る。其の調査報告は道内の當業者は固より、府縣當業者及海外に於ても權威あるものとして重要視せられて居る。其の調査の發表は調査時報及海外情報として月數回に亙り之を發行し、以て關係方面に其の利用を促してゐる。尚最近數年間に於ける檢査數量成績を表示すれば左の如くである。

農産物檢査數量調

區分	種別	年次	昭和五年	昭和六年	昭和七年	昭和八年	昭和九年
(イ) 生産檢査	玄米		五、二一三、三五二俵	二、八五四、三二一俵	一、八九二、六五〇俵	五、三五七、一三八俵	三、六二二、二四七俵
	雜穀		八、四三四、二二八〃	六、四四六、九一二〃	五、二六六、三二五〃	七、七九一、九八九〃	八、三二七、三二一〃
	澱粉		八四七、七八九貫	六五七、三一九貫	七六九、九二三貫	一、三一一、一八六貫	一、七七三、七七〇貫
	亞麻莖		五四八、七五一糎	六九三、二三〇糎	六三三、二八四糎	八六六、九四三糎	一、一七〇、八七八糎
	除蟲菊		一九六、七七九貫	一六二、七六〇貫	二〇二、三七二貫	二三三、二七八貫	二三〇、六二八貫
	取卸薄荷		三三、一一五糎	二九、九一五糎	二六、三三一糎	五五、八九二糎	三二、五五三糎
	計		一五、二七四、〇一四件	一〇、八四四、四五六件	八、七九〇、七八四件	一五、六一六、四二六件	一五、一五七、二九七件
(ロ) 移輸出檢査	玄米		三八三、三九四俵	九、〇一五俵	二、〇四〇俵	一、七九二、五七四俵	一七三、二九二俵
	雜穀		五、二九九、一一三〃	四、〇三八、三七四〃	二、五八三、九二八〃	四、五八三、九〇九〃	四、九七〇、一二九〃
	澱粉		七六五、四九〇貫	六六〇、六五〇貫	六六八、一九六貫	一、〇〇四、五九八貫	一、六一一、五一六貫
	除蟲菊		六、四四七、九九七件	一、七五五貫	一、三二七貫	三、〇六七貫	三、九九五貫
	計		三、五〇八、一二五俵	四、七〇九、七九四件	三、二五五、四九一件	七、三八四、一四八件	六、七五八、九三二件
(ハ) 精米檢査			二、六四一、七〇四俵	一、七五八、四九九俵	二、五四一、〇六二俵	三、〇四一、九二六俵	

(ハ) 農會　本道の農會は農會法の實施されたる明治三十二年に於て既に百三十二町村十五郡の系統的農會の設立を見るに至り、續いて之等各農會を統轄すべき全道單位の道農會の設立を見、爾來三十餘年間其の活動により農事の改良發達に貢獻せる處多く、今や十四郡農會の下に二百二十一の町村農會がある。而して其の構成分子として農家二十戸乃至三十戸の農事實行組合を結成せしめ、技術講習及優良種子の配布等を始め、農事諸般の指導は系統的に亙り、且各細部に至る迄其の徹底を期してゐる。現在本道に於ける農事實行組合數は約五千に及んでゐる。

(三) 畜産業

(一) 概況　本道は氣候風土頗る畜産に適し、加之其の面積九十七萬町歩と云はれる廣大なる放牧適地を擁し、且飼畜の主要素たる飼料作物はよく本道の氣候風土に適する等斯業に對する自然的好條件を完備して餘す處がない。一面本道は府縣に比し概

して氣候寒冷にして農耕期間短く、且單位面積よりの收穫少い關係上、生產を增加せしむる爲には勢ひ廣い耕地を必要とし、從つて勞働能率增進上耕馬の力を最も必要とし、又有機質肥料施用上畜類の飼養を以て本道農業の急務とする。

斯くて有畜農業は實に本道農業經營の根本をなすものであつて、牛馬百萬頭計畫は實に現行第二期拓殖計畫の重要なる方針の一となつてゐる。而して輓近國民保健上乳製品の需要は頓に增大し、農家に於ては生乳の飲用によつて農民の健康を增進し、之が販賣は確實なる現金收入を得せしめる等農業生產の方面と相俟つて、飼畜農業の必要なるは近時農民の認識を深めつゝあるもので、今後益々畜產國北海道の躍進は目覺しいものがあらう。

而して本道に於ける最近の畜產業の狀況を見るに、產馬地として名高い本道も一時漸減の傾向を示した事はあるが、之は財界好況時に乘じ優良馬の內地へ移出激增した爲生產之に伴はなかつた結果であつて、近年に至つては之が趨勢を挽回し漸次增加の傾向を辿りつゝある。

畜牛の趨勢に至つては前者と其の趣を異にし每年增加の傾向が著しく、今昭和九年

牛の放牧（札幌市外眞駒內の北海道廳種畜場）

緬羊の放牧
（瀧川町の北海道廳種羊場）

馬の放牧（十勝種馬所）

末に於ける頭數を見るに、牛は六萬五千七百七十五頭、馬は二十九萬千十九頭にして主業農家一戸に就き牛〇・三三頭、馬一・四七頭に當り、主業農家一戸當大家畜三頭の理想に漸次接近しつゝある。殊に畜牛馬匹奬勵規則により其の購入費に對して補助制を採つて以來、本道農家の飼畜農業への轉換は洵に加速度的發展傾向を示してゐる。之に依て觀るに輓近本道農業組織が傳統的なる穀菽農業より飼畜農業への急速度なる轉換を爲しつゝあるもので、牛酪及煉乳を始め其の他畜產品は逐年隆盛を極め、特に牛酪及煉乳の如きは生產高に於て本邦第一位を占め、將來乳製品の一大供給地たらんとしてゐる。

(二) 飼養頭數　本道に於ける飼育家畜の主なるものは牛馬、緬羊、豚及家禽等であつて、馬は開拓使以來極力保護奬勵を加へた結果、漸次飼養頭數增加し種類も改良されたが、歐洲戰時馬匹の道外に移出するもの增加し、生產之に伴はなかつた爲一時漸減の傾向を示したが、戰後は道外需要減少したると且本道の飼畜農業奬勵及農家の自覺等に依つて近時再び之が增加を見るに至つた。昭和九年末現在數は十年前の大正十四年に比較すれば八萬三千六百三十二頭の增加にして現在頭數は當時の一・

四倍に當つてゐる。

畜牛は元來本道が掠奪農業の結果漸次地力減耗し來れると、近時打續く財界不振の爲穀價下落し畑作農業の行詰りを來せる爲、之が救濟保護策として畜牛飼育を奬勵し、有機質肥料の增産に依り金肥の節約を計り、穀菽農業に依る行詰りを打開するに努めしめ、他面牛乳の販賣に依りて收入を得しむる等に依り以て本道農業經營の改善に資せんとし、耕馬と等しく補助金を下附して來れるものである。爾來其の頭數の增加は逐年著しく、昭和九年末頭數は六萬五千七百七十五頭に達し、前年に比しても六千八百六十一頭の增加を示し、十年前に比較すれば三萬二千九百五十一頭の增加にして二倍餘の增加に當る。

緬羊は開拓使時代早くも之が增殖に意を用ひたが、當時其の飼育管理方法の幼稚なりし爲失敗に終つた。元來本道の氣候風土は緬羊飼育に好適するを以て多年に亙る之が研究の結果漸次發展を見、昭和九年末に於て六千九百五十一頭に達し、本邦第一位を占むるのみならず、昭和十年度に於ては拓殖費事業に緬羊奬勵費を計上し、濠洲より優良なる種牝羊七〇〇頭、種牡羊一四頭を購入し、瀧川種羊場をして之が增殖と拂下を爲さしめ、本道農業經營の合理化促進を圖ることゝなり、大いに囑目されるところとなつた。而して之が羊毛の品質は頗る優良にして、本道の如き多季農閑期永き地方に於ては餘剩勞力を以て自家加工業と爲し被服の自給を計り、更に餘剩毛を賣却して副收入を得しめるは副業として最も好適せるものである。

爾餘の小家畜及家禽も逐年增加の傾向にあり、以て農家經濟の向上に資する處が多い。今之等累年の狀況を表示すれば左の如くである。

本道家畜年末現在頭數

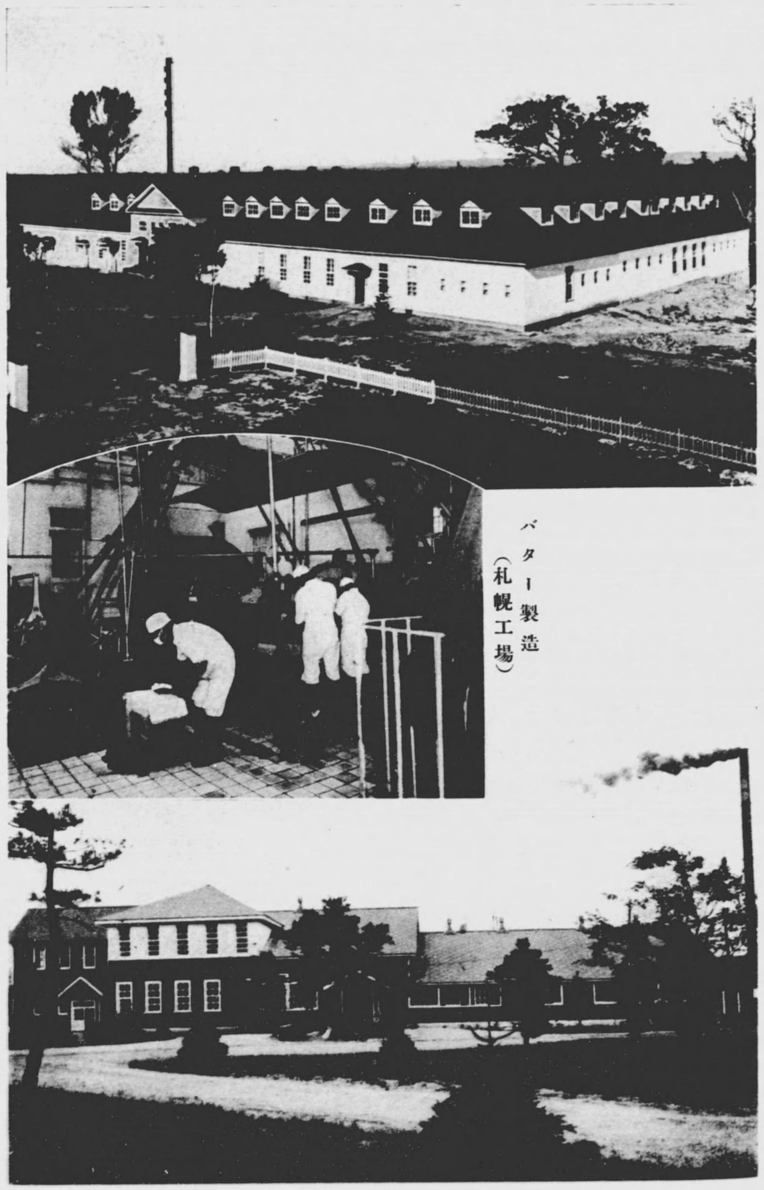
年次	牛	馬	豚	緬羊	家禽
昭和九年	六五、七七五頭	二九一、〇一九頭	二八、一〇六頭	七、三二〇頭	二、〇八九、二二九羽
昭和八年	五八、九一四	二九六、二三九	二三、二四一	七、一一六	二、〇六九、二三三
昭和七年	五二、四八一	二〇三、一九六	二七、二三九	六、四〇七	二、〇六四、三一三
昭和六年	四七、四六六	二八九、四九八	三五、九七六	五、六八五	一、九八四、七六六
昭和五年	四五、一九九	二八七、一八八	二七、三二四	六、〇三四	一、七六四、五〇九
昭和四年	四二、〇三三	二七〇、一一二	二五、九六六	五、九一四	一、八一〇、九六三
昭和三年	四四、二三四	二五六、八五九	二三、二九三	五、六四〇	一、七八三、〇二七

年次	牛	馬	豚	緬羊	家禽
昭和二年	四三、五五五頭	二四一、三七五頭	三二、二四六頭	五、七三九頭	一、五七九、六二九羽
昭和元年	四〇、八五四	二二五、九六六	二八、六一〇	五、七九四	一、五四〇、九五八
大正十四年	三八、〇七五	二二三、九〇五	二七、一七九	五、三五六	一、四五九、二六四
大正十三年	三三、八二四	二〇七、三八七	二六、二一五	四、三一一	一、五八九、九八四
大正十二年	二九、四二四	二一〇、〇八九	三二、七二二	三、五六一	一、七三八、二二一
大正十一年	二五、六四五	一九四、八五五	三五、三〇三	二、四六三	一、七二八、五四六
大正十年	二三、三四六	一七九、八二四	三六、二三四	一、九七六	一、三四九、九八四
大正九年	二一、五四七	一七六、七二一	三三、〇二六	一、四八四	一、〇九六、七六八
大正八年	二〇、五六一	一八一、二六一	一七、七〇八	一、四〇五	一、〇八三、五二一
大正七年	一八、八七三	一九〇、五四三	一一、三六	一、二九	一、〇五四、一五六
明治四十二年	二一、三三〇	一五二、五五八	一四、二九二	四〇九	三〇五、〇〇八

備考一、昭和八年緬羊頭數中には山羊二六四頭を、昭和九年には山羊三七九頭を含む。
二、家禽は鷄、鶩及七面鳥にして大正十一年以前及昭和二年以降は七面鳥を含まぬ。

(三) 畜産生産品

昭和九年の畜産總額は一千三百七十餘萬圓に達するの盛況であるが、此の畜産業に伴ひ其の發達特に顯著なるものは乳製品である。同年に於ける生産數量は煉乳一千六百萬斤、牛酪三百七十一萬五千斤及粉乳百九十萬斤にして共に全國



北海道製酪販賣組合聯合會所屬チーズ工場（膽振國勇拂郡安平村遠淺）

バター製造（札幌工場）

北海道製酪販賣組合聯合會所屬製酪工場（札幌市）

生産高の半以上に達し、牛酪の如きは全國消費高の九割を占め、チーズ其の他を加へたる乳肉製品總價額は一千百四十九萬圓に達し、前年の九百七十六萬圓に比して百七十三萬圓の增加を見、逐年躍進の一路を辿り其の品質に於ても益々其の聲價を確保するに至つた。

而かも本道は官民協力して尙製品の向上統一を圖り、且生産費の輕減、貯藏及販賣施設の改善等に努め、常に需給關係の調査研究を怠らず、以て本邦の需要に應ずると共に更に進んで海外に一大飛躍を試みんとしてゐる。

肉製品は專らハム、ベーコン及腸詰の類で産額は未だ多くはないが、飼畜農業の奬勵に伴つて今後の發達に見るべきものがあらう。尙屠畜の需要も頗る盛で移入も亦尠からず增加しつゝある。次に本道の重要畜産製品に就き其の概要を記述しよう。

牛酪　牛酪の需要は我が國民生活文化の向上によりて著しく增加し、殊に本道第二期拓殖計畫の實施によりて道内に三十有九の製酪工場及三百餘の集乳所網完成し、八箇所の牛酪檢査所により嚴密に製品を檢査し、他面生産及販賣の統制を行ひ、尙國内の主要消費地には牛酪冷藏庫を施設し以て消流の圓滿を圖つてゐる。昭和九年に於ては全國生産の約九割を占め外國製品を驅逐し、昭和十年に於ては三十餘萬圓の

海外輸出を見、又最近は倫敦市場にも進出せんとするの趨勢にある。

煉乳及粉乳　本道に於ける煉乳製造の歴史は遠く明治八年より其の端を發し、其の後幾多の消長を經て今日の隆盛を見るに至り、其の生産額も全國の半を過ぎ、昭和九年に於て煉乳五百六十萬圓、粉乳二百九萬五千圓に達してゐる。而して道内主要酪農地帶に十二箇所の煉乳工場（内煉乳及粉乳工場二箇所）を有し、品質亦優良にして國内の需要を滿すのみならず、近年海外市場に其の販路を開拓しつゝありて其の聲價大いに見るべきものがある。

チーズ及其他乳製品　チーズ及其他の乳製品は孰れも我國に於ける新製品であつて近年其の需要頓に增加し、チーズは道内數箇所に製造所を有し道產チーズの聲價を世に問はんとしてゐる。其他新興乳製品中見るべきものはカゼインであつて、特殊工業原料として極めて重要なる地位を占め、道内に十數箇所のカゼイン製造工場を設置し、此の種製品は近來極めて重要視せらるゝに至つた。

肉製品　畜牛及養豚の增殖に連れ牡犢、老牛及豚の處理はハム、ベーコン、ソーセージ及肉罐詰等肉加工品として製造され年々增產の傾向にあり、昭和九年に於けるハム及ベーコンを合せて七萬一千六百六十二斤にして其の價額は五萬三千四百八十一圓である。

本道主要畜產物

年次	生產	屠畜	牛乳	禽卵	蜂蜜	畜產物總額
昭和九年	九八、九八六 頭	一、三四一、二七五 頭	四六八、三〇九 石	八九四、二〇八 箇	一四二、二九七 貫	一三、七二七、一二六 円
昭和八年	九六、二六六	一、一九八、二三三	四一四、四三三	八七、五七三、五〇五	一二三、五三四、八五四	一二、六四九、八〇二
昭和七年	九六、〇七九	一、三五〇、三八一	三五三、七一三	八四、四七四、三八一	九四、七八五	一〇、六〇一、七二四
昭和六年	九六、七八五	一、一〇〇、〇七九	三四六、六二八	七三、五四〇、九七七	六九、一〇八、三二七	一〇、三〇六、〇四九
昭和五年	八七、八六〇	一、一一〇、一一三	二四六、三五六	六七、九四五、二三五	七四、八六八	一〇、五一三、八五八
昭和四年	八〇、六九二	一、一九〇、八三一	二〇八、一三三	六五、七三五、二五八	五九、三五九	九、七九八、八四七
昭和三年	八二、三一九	一、二一八、七七五	一八八、一八〇	五六、〇二八、七四七	五一、〇一四、四一三	九、一〇七、八八八
昭和二年	七八、九一四	一、〇〇六、九五五	一六七、二七〇	五二、三七九、二四三	五一、〇一四、四一三	九、一〇七、八八八
昭和元年	七三、三七六	九二六、八八八	一五〇、六四三	五二、三七九、二四三	五一、〇一四、四一三	九、一〇七、八八八
大正十四年	六八、三三一	八〇六、八四四	一三七、九二七	四九、三五八、一四二	四四、一五三	八、七七七、八三八
大正十三年	六三、二六九	七九八、八三四	一二六、九一七	四九、八三五、一四二	四四、一五三	八、七七七、八三八
大正十二年	六四、二三三	八四五、九四四	八六、一五九	五四、八三五、一四二	四四、一五三	八、七七七、八三八
大正十一年	七〇、九八〇	八七七、八三八	七八、八六一	五六、八三五、一四二	四四、一五三	八、七七七、八三八
大正十年	六一、一五三	六五九、八一五	二一、四七〇	五五、四三〇、一二五	四〇、四〇五、一二五	六、五九九、八一五
大正九年	三九、七二七	七四〇、三五〇	一八、五九〇	三五、二五七、一二五	三七、二五七、一二五	六、六三五、〇四九
大正八年	四〇、八〇八	六八三、〇六〇	二六、一三三	三六、一三三	三三、六〇三	六、六三五、〇四九
大正七年						

年次	生産	屠畜	牛乳	禽卵	蜂蜜	畜産物總額
明治四十二年	四、三二七頭	三七六、一〇五貫	一〇、八三三石	四三四、三六三個	？貫	一、三六四、二〇三円

備考　一、生産及屠畜は牛、馬、豚、緬羊及山羊を合算せるものである。
二、牛乳は大正九年以前は市乳のみを掲ぐ。
三、禽卵は鶏、鶩及七面鳥等の卵にして、大正十一年以前及昭和二年以降は七面鳥を含まぬ。

(四)　畜産業指導竝檢査機關及團體

(イ)　北海道廳種畜場　本場は明治九年開拓使の創立に係り、當時眞駒內牧牛場と稱し札幌市を距る南方約二里にして豐平川の淸流に沿ふ廣濶なる地域にあり、總面積二千八百餘町歩に及ぶ。大正十四年北見國訓子府村に一千町歩の地を相して分場を設置し專ら種畜の育成を行ひ、爾來本道畜産の改良に努むる事多年、畜産北海道の名をなさしめたる樞要なる指導機關である。現在同場飼育の家畜は昭和九年度末現在牛二百五十二頭、馬二百十九頭、豚百二十四頭、兎百八十三羽、鷄二千二百六十六羽で優良種の生産に努め、之を一般農家に拂下げ以て本道家畜の改良に資してゐる。

(ロ)　北海道廳種羊場　本場は空知郡瀧川町にあり、明治四十三年以來農林省種羊場瀧川分場として種緬羊の增殖と改良に努めて來たが、爾來數度の行財政整理に遭ひ昭和六年遂に閉鎖の止むなきに至つた。然るに本道に於ける緬羊飼育の重要なるに鑑み、翌七年度より北海道廳地方費に移管され之を繼續實施する事となつた。爾來本場の事業は現に農林省より牝羊千頭及牡羊四十頭の無償貸付を受け、年々之より生産する一千頭內外の種緬羊を道內に拂下げつゝあつたが、將來は本道農家經濟の向上を計る爲、更に基礎種牝羊の拂下頭數を增加するの必要あるを以て、既述の如く昭和十年度以降國費に於て本事業の擴張を圖ることゝなり、第二期拓殖計畫完成迄に道內緬羊頭數を三十萬頭に達せしむべく之が實現に著手するに至つた。

(ハ)　畜産組合　明治三十三年根室產牛馬組合の設立を魁として、爾來日高、十勝、釧路及北見國等に一郡若くは數郡を區域とする該組合の設立を見るに至つた結果、今日に於ては全道二十一組合に及び種畜の共同購入及家畜の蕃殖に資する處頗る多く其の機構竝事業は極めて發展的である。尙明治四十年には之等各組合の連絡を計らんが爲北海道畜産組合聯合會を結成し、牛馬の改良、蕃殖及之が販路の調査、而して種牛馬の共同購入及畜産物の利用奬勵竝各組合の技術員設置奬勵、共進會、講習會、競馬會等の開設及會報の發刊等其の事業は畜産に關し各般に亙るが、就中特

記すべきは牛酪檢査事業である。

(ニ) 牛酪檢査事業　本道牛酪の品質向上と規格統一を圖り、名實共に優良國產品たらしめる目的の下に昭和四年度より廳令を以て牛酪檢査規則を制定し、畜產組合聯合會をして檢査の衝に當らしめる事となつた。之が爲牛酪の品質頓に向上し生產亦著しく增加し、四百三十五萬六千八百餘封度に達するの盛況を示し、全國生產の九割を占むるの隆盛を見るに至り、現に國內の需要を充すは勿論海外にまで輸出するの機運に到達した。而して檢査は風味、品質、色澤及包裝等に就て嚴格に調査し、推奬品、一等品、二等品及等外品の四等級を定め以て其の聲價を昂めつゝあり、現在道內に於ては札幌に於ける本所の外、函館、帶廣　野付牛、釧路及名寄の五箇所、道外に於ては東京及大阪の二箇所に出張所を設け、十五名の檢査員が各製造工場に出張して檢査を實施して居る。

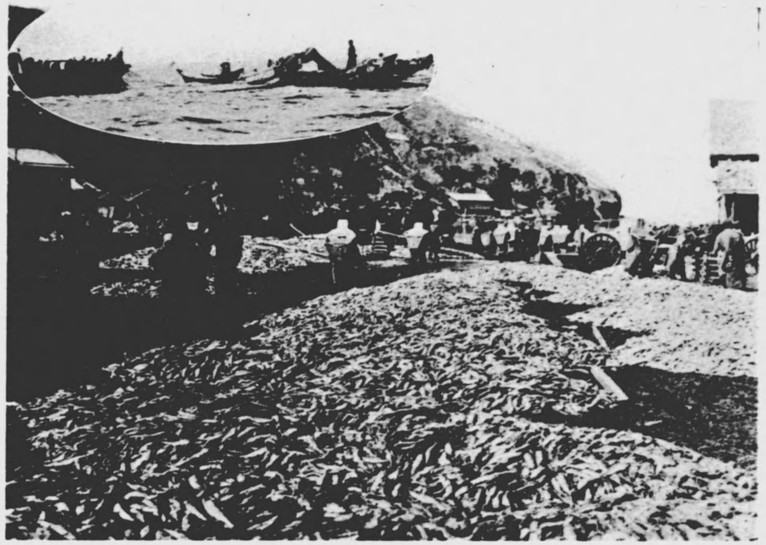
今本事業實施以來の成績を表示すれば左の如くである。

年次	檢査數量	推奬品		一等品		二等品		等外品	
昭和九年	四、三五六、八五二封度	三、三〇六、三一九封度	七五・九%	九一三、二八五封度	二一・〇%	九二、九七五封度	二・一%	四四、二七三封度	一・〇%
昭和八年	三、三九五、二五七封度	二、七九五、二〇二封度	八二・三%	四六一、八一六封度	一三・六%	七七、五二六封度	二・三%	六〇、七一三封度	一・八%
昭和七年	三、六六六、〇六二	二、八六一、四七二	七八・〇	六一九、五五一	一六・九	一三〇、九七〇	三・六	五四、〇六九	一・五
昭和六年	三、二九九、七八八	二、五四〇、六一五	七七・〇	五八二、三八九	一七・九	一三七、七五二	三・九	九三、〇三二	一・二
昭和五年	二、三四五、五六五	一、七六七、六三一	七五・三	四九〇、七二〇	二〇・九	五三、二〇二	二・三	三四、〇一二	一・五
昭和四年	一、六三九、九四八	一、一五〇、二九八	七〇・一	三九九、五八一	二四・四	七五、六九三	四・六	一四、三七六	〇・九

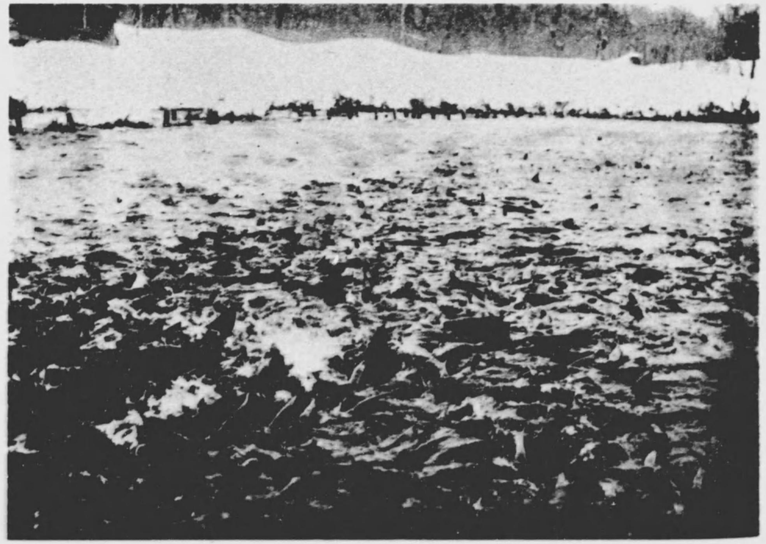
(四) 水產業

(一) 概況　本道海岸線の延長は一千三百五十五里に及び、沿岸悉く深海を繞らし魚族貝類無限に棲息し海藻亦繁茂し、每年春季の候に於ては鰊の銀鱗を閃めかして潮の如く群來し、時に鯨群の悠々遠洋に威を示すあり、又鮭鱒の四海に回游し秋季數多河川に夥しく鮭の溯上する等、眞に世界三大漁場の稱ある所以である。卽ち寒暖二海流の相交はる所は彼等安住の鄕であり、本道沿岸の海底臺地は魚族の食餌を得る所にして又繁殖の地である。顧るに本道開拓當時の產業は漁業を以て始まり、往年に於ける生產額は漁業が首位を占めてゐたが、開拓が內陸に進むに連れ本道產業の重點も漸く農工の業に移り、昨今に於ては第四位に下るの狀態であるが、然も尙本邦水產總額の約五分の一を占め依然水產國たるの名を辱かしめない。然し乍ら水產

鰊漁網起



鰊漁



鮭の漁上

業は他の産業に比すれば概して原始的生産の狀態にあり、此等二三漁獲物の如きも處理方法宜しきを得ざる爲、貴重なる食糧給源を經濟的價値低き肥料製造に委しつつあるが如き、又濫獲も甚しく近時漸く沿岸漁場の荒廢を告ぐるに至つた。茲に於て本期拓殖計畫に於ては先づ以て漁船構造の改良を奬勵し、遠洋漁業への進出に依り積極的に未開の富源を拓き漁獲物の合理的處理方法を講ぜしめ、以て漁業經濟の向上を計らんとし、之に對し奬勵金を給する等着々漁村の振興に資しつゝある。而して昭和九年の水產總價額は一億六百九十八萬圓に達し、豐漁なりし前年に比しても尙千八十三萬三千餘圓の增加を示し昭和四年以來の好記錄を示した。之は鰊の不漁に拘はらず一般に順調なる漁況なりしと、近時北千島漁業の勃興に伴ひ同年は特に鮭鱒流網の成績頗る良好なりしに依るものである。尙今後漁村の漁港及船入澗の完成に依り遠洋漁業は益々隆盛に趣くであらう。更に漁獲物の製造改良に就いては團體的活動近時旺盛に向ひつゝあるを以て、製造物價額も逐年增加を示しつゝある。又漁場の擴張を計ると共に淺海養殖等の事業に關しても漸く漁民の關心を深めんとする機運を馴致するに至つた。今水產價額を表示すれば左の如くである。

年次	沿岸漁業	遠洋漁業	水產養殖	水產製造物	計
昭和九年	四〇、五九四、一九二円	九、九一八、三六四円	八六、五九九円	五六、三八三、九九七円	一〇六、九八二、七五〇円
昭和八年	三三、四七〇、〇七三	七、四二六、八六八	八一、七九九	四九、二八四、〇一五	九〇、二六九、七五五
昭和七年	二六、七九一、三七七	六、二五八、三四五	七二、九三七	三四、八六八、五三八	六七、九九一、一九七
昭和六年	二八、三四一、五三六	六、五〇二、七四五	七二、九六〇	三四、三二九、四六〇	六九、二四六、七〇一
昭和五年	三一、九四六、九二一	六、三四五、四八三	八七、六〇五	四〇、一一四、九〇五	七八、四九四、九一三
昭和四年	四五、四五〇、二七一	八、一三九、七五五	九九、七四四	五六、四〇〇、五七一	一一〇、〇九〇、三四一
昭和三年	四二、一六〇、二一五	六、八一五、三四七	一〇三、七七九	五〇、四九六、二八八	九九、五七五、六二九
昭和二年	五九、五八三、八九二	五、九一一、三四七	一三五、〇三三	六〇、七四八、七九三	一二六、三七九、〇六四
昭和元年	五〇、一一四、一五五	五、七九七、九八六	一一九、三〇〇	五四、六六八、二五七	一一〇、六九九、六九八
大正十四年	五五、〇六七、〇四〇	三、九二九、三一一	一〇六、八七一	六八、五四四、二九三	一二七、六四七、五一五
大正十三年	五一、一六五、二二三	三、六六五、八六一	一〇〇、六四四	五六、九六八、一〇八	一一一、八九九、八三五
大正十二年	五三、六八八、一四二	二、三五二、八四九	一一九、一六八	五八、三四五、六二〇	一一四、五〇五、七七九
大正十一年	四五、九七三、七四一	二、二九九、九一六	七五、七四七	四七、五〇三、〇六九	九五、八五二、四七三
大正十年	四二、七〇八、七一四	一、一〇八、三〇九	五八三、四七一	五二、八四〇、九七九	九七、二四一、四七三
大正九年	四八、一六三、八六〇	四三一、九七一	一九、六八	四七、八五〇、五二二	九六、四四八、三五一
大正八年	五〇、七五五、五〇八	五二一、〇九七	七、四九	六〇、七八二、二〇一	一二二、一〇、五一四
大正七年	二九、九七九、六二二	六四、七三八	七八、二九九	三二、九九〇、七八二	六三、一一三、四四一
明治四十二年	九八四、六三八	四二、九七五	四、六〇七	九、五五七、四四三	一〇、五八九、六六三

備考　水産養殖綱中大正九年は海獣皮を示し、沿岸漁業中昭和二年は鰊の豊漁と價格騰貴等の爲最高記錄を示し以後不漁或は價格低落等の爲漸次減少せるものである。

(二)　漁船及從業者數　本道の漁業は沿海より漸次沖合に進み、囘游魚に對する新規漁業又は發動機船に依る底曳網漁業勃興し、昭和九年に於ける漁業件數は免許漁業九千四百件、許可漁業一萬四千八百六十件、自由漁業は一萬七千六百七十七件、專用漁業百六十五件で之に從事する漁業者は四萬七千三百七十七人、其の被傭者は十四萬九千六百十九人を數へ、其の使用漁船の總數は五萬九千五百二十五隻を算し、前年度に比し九百六十八隻の減少を示して居るが、之は無動力船の減少に因るもので動力船は却つて四百隻の增加を示してゐる。而して其の內發動機船の新造及新規漁業試驗に對しては、國費又は地方費を以て補助金を交付し或は指導を爲す等其の助長に努力してゐる。

漁船及從業者數

年次	漁船			從業主			被傭者		
	動力を有するもの	動力を有せざるもの	計	漁撈	養殖	製造	漁撈	養殖	製造	計
昭和九年	五五、六一〇隻	三、九一五隻	五九、五二五隻	四一、二三九人	二六七人	五、八八一人	四七、三七七人	一二四、一九二人	三、六三、一三人	一四九、六一九人
昭和八年	五五、九七八	三、五一五	六〇、四九三	四〇、九五〇	二六〇	五、四一六	四六、八二二	一二一、五三一	三一、七二九	一四五、五〇八
昭和七年	五六、八五二	三、五四四	六〇、一〇七	四〇、三〇九	二六五	五、〇二一	四六、四四三	一二二、九七四	三一、七二五	一四五、七〇〇
昭和六年	五六、二五六	三、〇三七	五九、二八三	四〇、七〇八	二五五	五、三八二	四六、三五五	一二〇、七三三	二八、二三三	一四三、九三四
昭和五年	五六、四二二	二、七三九	五九、一六〇	四〇、六二四	二四九	五、二八三	四六、五五一	一二一、六〇三	二七、四三五	一四三、九八九
昭和四年	五六、三〇六	二、二四八	五八、五五四	四一、八三七	二四四	四四九	四六、八三七	一二三、三三七	二七、四三五	一四三、七二一
昭和三年	五八、八〇九	一、八四四	六〇、七三三	四二、七五一	二八四	四六、九〇一	四八、二八九	一一〇、九一六	二八、四〇〇	一三四、六〇〇
昭和二年	五八、一四六	一、四九二	五九、六三八	四一、九六四	二六六	四六、六九九	四七、八七九	一一四、〇二一	二六、二九二	一三五、九七一
昭和元年	五七、六三〇	九八三	五八、六一三	四一、四二三	二六四	四六、七〇七	四八、〇七〇	一一四、一〇〇	二六、一三〇	一三五、八〇〇
大正十四年	五八、二三三	七四一	五八、九六四	四一、八三〇	二九二	四七、〇〇九	四七、四一五	一一四、四一五	二六、二六六	一三八、八五二
大正十三年	五八、二六二	五八四	五八、八四六	四一、七一三	二四一	四七、一四四	四七、三五四	一一四、三五四	二六、二六六	一三八、八五二
大正十二年	五八、二三六	四七五	五八、七〇二	四四、三五七	二四四	四七、一三三	四七、三五四	一一三、八三七	二六、二六六	一三七、〇一四

(三)　漁獲及製造高　本道に於ける漁獲物の種類は極めて多いが、其の主要なるものは鰊、鮭、鱒、鱈、鰯、鰛、鮪、柔魚、帆立、蟹及昆布等であり、就中鰊は本道漁業の大宗を成し每年漁獲高の二割內外を上下して居る。今昭和九年の漁獲高に就て見るに沿海漁獲高に於て四千五十九萬四千餘圓、遠洋漁獲高は九百九十一萬八千餘圓を示し、之を前年に比較すれば鰊の不漁に拘はらず前者に於て百二十三萬七千餘圓、後者に於ては約二百五十萬圓の增加を示して居る。

水產製造は近時長足の進步を爲し、食料品は三千三百五萬七千餘圓、肥料一千六百

四十一萬餘圓、魚油六百三十一萬餘圓、合計五千五百七十七萬餘圓に達して居るが、尙改善を要する點多く今後の研究に俟つ所決して尠しとせぬ。殊に鰊及鰯等の主要漁獲物の過半は肥料に供されつゝあり、之が食品化の緊要なるは云ふまでもなく、目下本廳は勿論當業者に於ても考究を重ねてゐる。玆に於て鰊に就ては新しく供給の途が拓かれるに至つたが、尙今後低溫設備を有する輸送機關の發達と相俟つて本道の澁刺たる鰊は更に遠距離の地まで輸送され其の需要は頓に增大するであらう。而して水產製造物は主として素乾、鹽乾、煮乾、鹽藏、調味加工品、罐詰類、肥料及魚油等であり、其の他箇々の製造物に就ては種類極めて多い。

本道の水產製造物は嘗ては對支輸出品として極めて重要の地位を占め、年歲七、八百萬圓の輸出を爲しつゝあつたもので、近來對支關係圓滿ならざる爲日貨排斥等の影響を受け不振を續けて居たが、昭和七年友邦滿洲國の成立あり、玆に於て滿蒙に對する需要再び昂まり、本道產の昆布、鹽鱒、鰯、貝柱、海參及乾鱈等は彼等民族の最も嗜好に適するを以て、今後は有望なる水產製造物の消費地となるであらう。次に主要漁獲物の主產地、漁期及處理製造の狀況の概要を記述すれば左の如くである。

鰊　鰊は春鰊及夏鰊に大別する事が出來るが、其の漁獲高は本道漁獲物產額中第一位を占め、其の豐漁と否とは實に本道漁業經濟界を左右する。其の漁獲は後志支廳管內特に多く、宗谷及留萌は之に亞ぎ、之等鰊は鮮魚、身缺鰊及鰮を主とし、燻製、或は鹽藏として製造され、又肥料及魚油として處理されてゐる。

鮭　鮭は往時濫獲の結果著しく減少を示したが、最近官民協力して人工孵化を爲し、增殖を計つてゐる。鮭は本道各地の海洋及河川に漁獲せらるゝが、就中根室及千島方面を首位とし石狩、北見及十勝方面之に亞ぐ。處理方法としては冷藏設備の發達と共に鮮魚の儘消費さるゝもの相當あり、製品としては鹽鮭最も多く又罐詰及燻製品として製造され、筋子は鹽藏又は粕漬に製せらる。而して新鮮なる鮭を薄鹽にせる新卷鮭は頗る高評がある。

鱒　鱒も鮭と同じく近時漁獲高の減少を示して居たが、北千島に於ける流網漁業に依る紅鱒の漁獲及賣上高は頗る高潮に達し、昭和九年は昭和四年以來の好記錄を示してゐる。而して沿海に於ける鱒の減少に對しては人工孵化に依つて其の挽回に努め

つゝある。漁獲も亦全道に亙るが大部分は根室、千島及網走方面の海洋である。鮮魚、鹽藏及罐詰等として處理せられてゐるが、殊に鹽鱒は對支輸出品とし重要であり、北千島産の紅鱒水煮罐詰は歐米向輸出品として其の聲價頗る高いものがある。

鱈　鱈は本道海洋到る處其の棲息を見ぬ所は無く、沖合漁業中主要なものである。處理製造は棒鱈、開鱈、鹽藏鱈、そぼろ、鱈の子（鹽藏）、搾粕及鱈油等で棒鱈及開鱈は支那及南洋に輸出される。

鰮　鰮漁業は後志、檜山及膽振地方の沿海に於て多く漁獲される。棒干、味醂干及鰮の子等に處理せられ、殊に明太魚として朝鮮仕向けが隆昌を來して居る。

鰛　種類は「まいわし」「せぐろいわし」を主とし、煮干、鹽鰛、搾粕及鰛油に處理されてゐる。尚近時トマト漬罐詰は南洋方面に仕向けられてゐる。

鰈及鮃　本道到る所に產し其の種類は三十種に上るが、中でも「まがれい」「ぶたがれい」及「宗八がれい」等が重要視されてゐる。鮮魚として消費されるが秋冬の候は府縣へ移出するものも尠くない。

鮪　釧路及千島方面を主產地とし冷藏事業の發達と共に大部分鮮魚にて消費される。

鯖　主として日本海方面に產し、多くは鮮魚とし或は鯖節、鹽藏及搾粕等に製造されてゐる。

柔魚　主要な種類としては「するめいか」及「やりいか」等であるが、之等は鰑、鹽辛及刻鰑等に製造され、就中鰑は對支輸出品として重要なるものである。

章魚　本道到る所に棲息し就中日高及釧路地方に多く產する。製品は酢章魚を主とし煮干之に次いでゐる。

鱈場蟹　國後島東岸及北見國東岸を主とし、又千島、釧路及十勝沿岸に產し、殆ど全部は罐詰に製せられ、歐米への輸出品として特に重要の地位を占めて居る。

帆立貝　根室、北見及天鹽地方を主產地とし漁獲物の一部は罐詰に製せられるが、其の多くは貝柱に製せられ對支輸出品として重要の地位を占めてゐる。

海鼠　海鼠は殆ど全道に棲息を見るが、就中北見及天鹽地方に多い。漁獲物は專ら海參に製せられ對支主要輸出品の一となつてゐる。

昆布　種類多く其の分布は全道に亙り折、花折、元揃、長切及刻昆布等に製せられ、花折及元揃は主として本邦の需要に應じ長切及刻昆布は主として支那に輸出する。